

決定版

ガンダム モビルスーツ列伝

GUNDAM
MOBILE
SUITS
FILES

株式会社レック社 編著

オール
カラー

伝説の機体90の
圧倒的な活躍を完全網羅!

機動戦士ガンダム

Zガンダム

ガンダムZZ

逆襲のシャア

PHP

定価:本体648円(税別)

決定版

ガンダム

GUNDAM
MOBILE
SUITS
FILES

モビルスーツ列伝

株式会社レッカ社 編著

PHP



9784569799759

ISBN978-4-569-79975-9

C0079 ¥648E



1920079006484

定価:本体648円(税別)

PHP研究所



決定版

モビルスーツ ガンダム GUNDAM MOBILE SCUIT FILES 列伝

株式会社レツカ社編著

PHP



決定版

ガングラム 走どろっ スツ列伝

オール
カラー

株式会社レッツカ社編著



PHP

決定版

ガンダム モビルスーツ列伝

GUNDAM
MOBILE
SUIT
FILES

株式会社レック社編著



PHP





アニメの概念を壊した キング「モビルスーツ」

1979年に放映された『機動戦士ガンダム』は、いまや言わずとしたロボットアニメの金字塔です。現在もシリーズとなつて人気を博しています。

この人気を支える最大の魅力は、なんといっても「モビルスーツ」にあるといえます。

従来のロボットは、それこそ荒唐無稽なものでした。しかし、モビルスーツは、兵器としてリアルで

薬莖やっせうの巨大さや、各種武器の弾切れ。毎回登場している量産機、新しく配備される新型。宇宙・陸地でも使える汎用、陸地のための陸用、陸地・水中でも使える水陸両用などなど。

その後、モビルスーツは「リアルロボット」という概念さえ生み、現在のロボットアニメは、リアルロボットが主流となっているほどです。

はじめに ロボット エポックメー

近年、目を見張るクオリティの「ガンブラ」も、このリアルを追求したからでしょう。

ガンダムとザクで幕を開けた「モビルスーツ戦」は、その後、巨大モビルアーマーやニュータイプ専用機、可変モビルスーツなど、続々と新型がつくれられ激化していきます。

そこで本書は、『機動戦士ガンダム』からの本道『機動戦士Zガンダム』『機動戦士ガンダムZZ』『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』（劇場版）の4作品に登場した、ほぼすべてのモビルスーツを紹介しています。モビルスーツ戦に投入された、リアルなモビルスーツの系譜を、楽しんでいただけたら幸いです。

「決定版」ガンダムモビルスーツ列伝 目次

はじめに

■第1章

機動戦士ガンダム

圧倒的性能で地球連邦軍を勝利に導いた「白い悪魔」

ガンダム

「Gファイター」

馬力と頑丈さを兼ね備えたRXチームの大砲役

ガンキャノン

驚異の対空能力を有するロボット戦車

ガンタンク

高い生産性を誇る地球連邦軍の量産機

ジム

キャノン砲を付けた宇宙用作業ボツド

ボール

ホワイトベース隊に迫り来る恐怖の「赤い機体」

シャア専用ザク

汎用性に優れた一年戦争の名機

ザク

ランバラルも駆った白兵戦用モビルスーツ

グフ

三位一体の攻撃でガンダムに迫った重モビルスーツ

ドム

サイコミュ兵器を搭載したジオン軍の最終モビルスーツ

ジオング

三たび戦場へ舞い降りた、赤い彗星の乗機

シャア専用ゲルググ

時代を超えて活躍した一年戦争の傑作機

ゲルググ

稀代の謀略家が愛した白兵戦用高性能機

ギャン

大火力で地球連邦軍を震えあがらせた巨大モビルアーマー

ビグ・ザム

「ソロモンの亡霊」と恐れられたララァ専用機

エルメス

034 032 030 026 022 014

080 076 072 068 064 058 052 046 040

084

難攻不落のジャブローから二度も帰還した英雄機
シヤア専用ズゴック

088

水陸両用機でもっとも高い完成度を誇った傑作機
ズゴック

092

ガンダムを凌ぐパワーをもった水陸両用のエボックモデル
ゴッグ

096

姿や動きがユーモラスな廉価版水陸両用機
アッガイ

100

ゲルググの穴を埋めるべく宇宙用に改修されたダム
リック・ドム

102

アムロ・レイを失神させた宇宙のスピードマスター
ビグロ

104

上司の仇討ちに現れた、異形のモビルアーマー
ザクレロ

106

ニュータイプ専用機の新駆けとなった開拓者
ブラウ・プロ

108

遠距離からの支援攻撃を得意とする水陸両用機
ゾック

110

ジオン軍初の水中用モビルアーマー
グラブロー

112

必殺技でガンダムを苦しめたモビルアーマーの原型
アッザム

114

モビルスーツの原点となったジオン軍初の量産機
旧ザク

■第2章

ゼーダ

機動戦士Zガンダム

120

抜群の加速性能を誇る、エウーゴの象徴的可変機
Zガンダム

126

モビルスーツ史に多大な影響を与えたグリプス戦役の雄
**ガンダム Mk II
〔ゲイフエンサー〕**

134

ワンアンドオンリーの黄金の機体
百式

138

次世代ガンダムとして開発されたエウーゴの新機体
リック・ディアス

- 170** **ハンブラビ**
アーガン隊を何度も窮地に追い込んだ可変モビルスーツ
- 166** **メッサーラ**
可変機時代の到来を宣言した偉大なる先駆者
- 162** **サイコ・ガンダム**
サイコミュを搭載した「破壊の巨人」
- 158** **アッシマー**
ユニークな姿に支えられた、大気圏内最高の空戦モデル
- 154** **ギャプラン**
圧倒的加速性を発揮した華麗なるドッグファイター
- 148** **ハイザック**
最後までつきまとったジオン軍の残像
- 146** **デিজエ**
アムロ・レイが搭乗した、非ガンダム系モビルスーツ
- 144** **ネモ**
ジムシリーズ初のガンダリウム合金装備機
- 142** **メタス**
モビルアーマー形態の一撃離脱を主眼とした可変モビルスーツ

- 198** **バイアラン**
変形機構なしで大気圏を高速飛行できるモビルスーツ
- 196** **バーザム**
ガンダム Mk II の量産型として開発された機体
- 194** **マラサイ**
リック・ディアス並みのスペックを有した影の実力派
- 192** **ポリノーク・サマーン**
グリプス戦役のパワーバランスを変えた一撃
- 190** **パラス・アテネ**
さまよえる女の情念を背負う武装女神
- 186** **ジ・O**
機動性や運動性を極めた超実力派
- 182** **サイコ・ガンダム Mk II**
さらに凶悪・鉄壁になった悪魔のガンダム
- 178** **バウンド・ドック**
クラブプロをベースに開発されたニュータイプ用モビルアーマー
- 174** **ガブスレイ**
複雑な変形機構と高火力の武器が魅力の可変機

200

次々とモビルスーツを撃破したスゴ腕スナイパー
ハイザック・カスタム

202

地球連邦軍の正統なる主力量産機
ジムⅡ

204

第一世代モビルスーツの頂点に立つ高性能機
ガルバルディβ

206

強力な武器と高い機動性を備えたハマーン・カーン専用機
キュベレイ

212

集団戦術で本領を発揮する、奇妙な形の可変機
ガザC

■第3章

機動戦士ガンダムZZ

ダブルゼータ

218

変形合体を極め、高性能を誇った怪物級ガンダム
ZZガンダム

フルアーマーZZガンダム

226

カラバが開発したジムシリーズの発展系
ジムⅢ

228

搭乗者のメンタルを反映するニュータイプ専用機
キュベレイMk.Ⅱ

232

高い操縦技術を要求されるグレミー軍の最終兵器
クイン・マンサ

236

見る者を恐怖に陥れた阿修羅のような機体
ザクⅢ

238

鬼神のような戦いを見せたマッシュマー・ゼロ専用ザク
ザクⅢ改

240

どこか抜けていて憎めないエンドラ魂の象徴
ガザD

242

ガザシリーズでもっとも成果を収めた機体
ガ・ゾウム

244

グフの流れを汲む、陸戦用モビルスーツ
ガルスJ

246

全身ミサイルの動く弾薬庫
ズサ

248

2機の戦闘機に合体・分離できる実力派
バウ

250

ドムの魂 再び戦場へ推参
ドライセン

252

偵察任務に秀でた、電子戦のスペシャリスト
アイザック

254

砂中から獲物を狙うハンター
ディザート・ザク

256

砂漠での機動性を見せつけた旧式の底力
ドワッジ

258

砂漠戦の名手デザート・ロンメル専用モビルスーツ
ドワッジ改

260

キュベレイの後継機として開発された
準サイコミュ搭載モデル
ハンマ・ハンマ

262

ギヤンの設計思想を受け継いだ、華麗なる騎士
R・シヤジャ

264

圧倒的な機動性と運動性をもつ新型ゲルグ
リゲルグ

266

強化人間専用開発された超攻撃的モビルスーツ
ゲーマルク

268

キュベレイを護衛するために生まれた親衛隊専用機
ガズエル

270

ロイヤルガードの使命をまっとうした親衛隊
ガズアル

272

ネオジオンに横流しされたリック・ディアスの強化型
シュトルム・ディアス

274

ZZガンダムを追いつめた三位一体攻撃の威力
ジャムル・フィン

276

簡易サイコミュを搭載したオールタイプ希望の星
ドーベン・ウルフ

278

オリジナルより攻撃力が増した量産タイプ
量産型キュベレイ

280

ハイゴッグを発展させた優秀な水陸両用機
カプール

282

着脱式のハイドロジェットをもつ水中用ザク
ザク・マリナー

284

パワーあふれる豪腕ファイター
ゲゼ

■第4章

機動戦士ガンダム
逆襲のシャア

290

アムロ・レイの手によって設計された最強のガンダム
Vガンダム

296

Zガンダムの流れを受け継いだ量産型の新鋭機
リ・ガズイ

298

ふたつの技術を統合した究極のジムシリーズ
ジェガン

300

Vガンダムと激闘を繰り広げた、
シャア・アズナブルが駆る真紅の機体
サザビー

306

ニュータイプ専用機として開発された巨大モビルアーマー
α・アジール

310

ネオ・ジオン軍の中核を担ったニュータイプ専用機
ヤクト・ドーガ

314

ジオン軍の伝統を色濃く受け継ぐ最新鋭の量産機
ギラ・ドーガ

COLUMN

116

「機動戦士ガンダム」登場モビルスーツ総括
兵器として誕生した
モビルスーツの黎明期

214

「機動戦士Zガンダム」登場モビルスーツ総括
高性能化が進み、
可変機も登場した発展期

286

「機動戦士ガンダムZZ」登場モビルスーツ総括
高出力・重火力化によって
機体の大型化が進む

316

「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」登場モビルスーツ総括
地球連邦とジオン両系統の
集大成となる機体が登場

第1章

機動戦士
ガンダム

人類が、宇宙へ移民するようになって半世紀。スペース・コロニー「サイド3」はジオン公国を名乗り、地球連邦政府へ独立戦争を挑んできた。

開戦当初、ジオン公国はモビルスーツ「ザク」を投入し、3倍の戦力をもつ地球連邦軍を圧倒。その後も、陸戦用の「グフ」や重モビルスーツ「ドム」、水陸両用の「ゴッグ」など、多様なモビルスーツを開発していった。

一方、ザクの威力を目の当たりにした地球連邦軍は、独自にモビルスーツ「ガンダム」、「ガンキャノン」、「ガンタンク」と、これらを運用する強襲揚陸艦「ホワイトベース」を開発。また、「ジム」と「ボール」を大量生産して対抗し、戦場の主役は完全にモビルスーツとなった。

■ ミノフスキー粒子

ミノフスキー博士が発見した素粒子で、電磁波や赤外線を妨害するほかビーム兵器にも使われる。粒子が構成するフィールド上に物体を乗せて、浮遊させるミノフスキークラフトの技術も開発された。

■ モビルスーツ

ジオン軍が開発した巨大汎用人型兵器。誘導兵器が阻害されるミノフスキー粒子散布下では、有視界戦闘による白兵戦が有効であるため、人型をしている。

■ モビルアーマー

モビルスーツより大型の局地戦用機動兵器。汎用兵器であるモビルスーツが、性能を十分に発揮できない状況下での使用を想定している。

■ フィールド

ミノフスキー粒子が一定濃度になると形成される場。ミノフスキー粒子がもつ性質の一種で、ビーム兵器やビームに対するバリアなどに利用されている。

■ ニュータイプ

人が宇宙に進出したことで新たに生まれた人類。宇宙という広大な空間に適応することで認識力が拡大し、並外れた直感力や空間認識力などを身につけている。

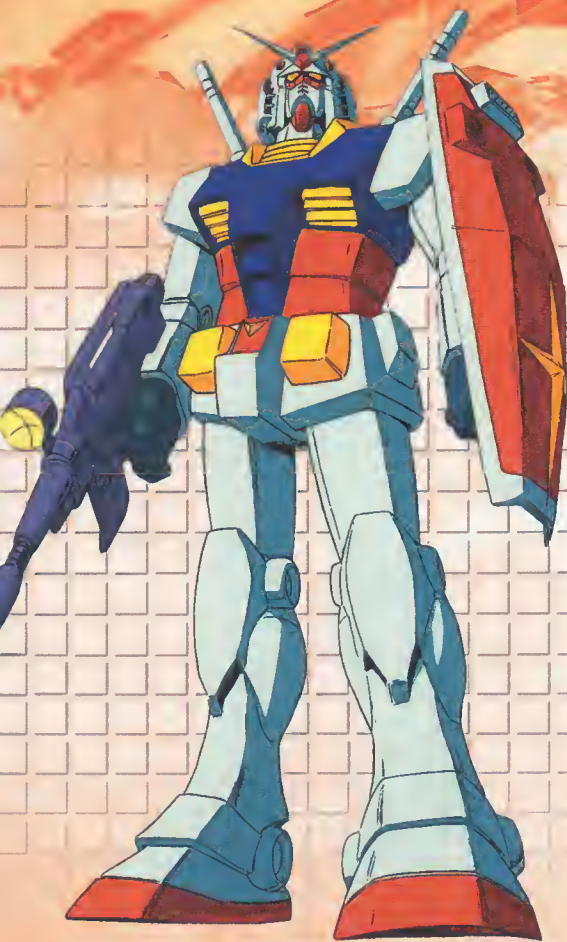
■ フラナガン機関

キシリア・ザビによって、スペース・コロニー「サイド6」の「ノルダ」コロニーに創設された、ニュータイプ研究所。ニュータイプの能力を兵器の操作にいかす、サイコミュシステムを開発した。

圧倒的性能で地球連邦軍を勝利に導いた「白い悪魔」

RX-78-2

ガンダム



SPEC

「V作戦」で開発された、白兵戦用モビルスーツ。
全高 18・0m。重量 43・4t。主な搭乗者は
アムロ・レイ。



運命的なアムロ・レイの搭乗

ジオン公国との開戦から8ヶ月あまりが経過したところ、スペース・コロニー「サイド7」では、地球連邦軍のモビルスーツ開発計画「V作戦」が進められていた。

しかし、V作戦はジオン軍のエースパイロット、シャア・アズナブルに察知され、サイド7にモビルスーツ「ザク」が3機、偵察に送り込まれてきたのだった。

ザクのパイロットであるデニムとジーンは、強襲揚陸艦「ホワイットベース」へ搬入作業中だった、モビルスーツの部品を発見。功をあげた新兵のジーンがザクで攻撃を開始したことから、迎撃に出た連邦軍と戦闘になってしまふ。

この騒ぎのなか、民間人の少年アムロ・レイは、ホワイットベースへ搬入作業中だったモビルスーツ「ガンダム」のマニユアルを偶然手にすることになる。そして、戦闘の巻き添えで知人が死亡するところを目の当たりにした彼は、激しい怒りとともにガンダムへ搭乗。

マニユアル頼りの操縦ながらガンダムの性能に助けられ、2機のザクを撃破するのだった。

アムロが初めての実戦でザクを倒せたのは、ガンダムの性能が驚異的に高かったからにほかならない。



ザクを倒して事態は収拾したが、ホワイトベースの正規パイロットがみな死傷していたことから、アムロはそのままパイロットを務めることになる。

サイド7を出港したホワイトベース隊は、以後ジオン軍の執拗な追撃を受けることになるが、ジオン軍の主力を担っていたザクの攻撃が、重装甲のガンダムにはほとんど通用しなかったということもあり、なんとか切り抜けていくのであった。

結局アムロは、ガンダムの性能に助けられつつパイロットとして大きく成長し、終戦までガンダムのパイロットを務めることになる。

のちに、ニュータイプとして覚醒したアムロと、彼の能力に対応するためマゲネット・コーティングで強化されたガンダムは、もはやジオン軍の手に負えない最大の脅威となった。

▽ ほかのモビルスーツとはケタ違いの高い機体性能

ガンダムは、緒戦でジオン軍のザクによって大敗した地球連邦軍が、独自に開発した白兵戦用モビルスーツである。開戦前からモビルスーツを研究していたジオン公国に比べ、地球連邦はモビルスーツ機体開発だけでなく、運用面でも大きく出遅れていた。

そこで本機は、搭乗者の生還率向上と戦闘データの回収を行うため、脱出用の小型戦闘機「コア・ファイター」を内蔵した「コア・ブロック・システム」を採用。

ガンダムの上半身をAパーツ、下半身をBパーツとしてドッキングする、空中換装なども可能としたほか、支援用重戦闘機「Gファイター」との組み合わせで、さまざまな戦闘形態をと

ることができる。また、大気圏付近での戦闘に備え、耐熱フィルムを使用することで、単機での大気圏突入も実現した。

ガンダムは、ザクをはるかに凌ぐ機動性や出力をはじめ、ビーム・ライフル、ビーム・サーベルといった携行用ビーム兵器の装備や重装甲など、機体にかかるコストを省みずに製作されており、量産化を前提とした試作機ではなく、機能テストや運用法の研究を主眼とした実験機的な意味合いが強い機体であった。

武装として、背面のランドセルにビーム・サーベル、頭部に60ミリ機関砲を搭載。携行武器として、ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ、ガンダム・ハンマーが用意され、加えてシールドが装備可能となっている。

頭部の機関砲は、ガンダムの武装の中でもっとも火力が低い武器だが、それでもザク本体を撃破するほどの威力を備えているほか、連射力をいかしてミサイルやバズーカ弾の迎撃に使用できる。

ビーム・ライフルは、戦艦の主砲に匹敵する出力をもっており、ジオン軍のザクを一撃で破壊するほどの火力をほこっている。

劇中で初めて使用した際には、シャアですら「火

超高性能のガンダムは、アムロの操縦によく反応して、度重なる危機を乗り越えていった。



力が違いすぎる」と絶句するほど、驚異的な破壊力であった。

380ミリの口径をもつハイパー・バズーカは、ジオン軍の「ドム」が装備するジャイアント・バズですら凌ぐもので、やはりモビルスーツを一撃で破壊するほどの火力がある。

装弾数は5発と少ないが、本体からのエネルギー供給を必要とせずに高い火力を得られるほか、ビーム・ライフル以外に射撃武器を携行できるという点で、優秀な武器といえる。

ガンダム・ハンマーは、トゲのついた巨大な鉄球に鎖をつけた格闘戦用の武器で、射程距離は短いものの、弾数を気にせずに使えるという利点がある。応用して、バズーカの弾などを迎撃するのにも使用していた。

ランドセルの両側に1本ずつ、計2本装備しているビーム・サーベルは、モビルスーツを一刀両断するほどの武器である。両手に構えて二刀流で使用できるほか、長い柄と3つに分かれた刃先をもつ、ビーム・ジャベリンとして使えば、投擲して攻撃することもできるようになる。劇中では、「ガウ」攻撃空母やモビルアーマー「アッザム」に使用していたほか、軽巡洋艦「ムサイ」に投げて使用していた。

▼アムロ・レイがガンダムの性能を引き出せた理由

このように高い性能を備えたガンダムだったが、民間人のアムロでも性能を引き出せたのは彼のセンスだけでなく、ガンダムに搭載された教育型コンピュータのお陰でもある。

このコンピュータは、戦いを重ねるごとにケーススタディを記憶していき、プログラムによ

つてある程度対応してくれるシステムになっていた。よって、パイロットのアムロが機体制御のすべてを行っていたわけではなかったのである。このデータは、オートパイロットモードに反映されるが、劇中で使用したのは、最後に「ジオング」の頭部と相撃ちになる場面のみだった。

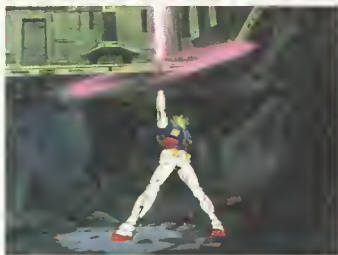
また、ザクとの戦闘を想定して開発されたガンダムは、月面上の重力下で精製された「ルナ・チタニウム合金」（のちに改良され、「ガンダリウム合金」と呼ばれる）という、従来のチタン合金より高い硬度をもつ特殊合金を装甲に使用することで、ザクをはるかに凌ぐ重装甲を実現。劇中でも、被弾しているのにもかかわらず、損傷を受けていない場面が見られた。

ただの民間人に過ぎなかったアムロも、ガンダムの堅牢な装甲に守られていたからこそ、パイロットとして必要な経験を実戦で積むことができたのだ。

そして連邦軍は、本機から得たデータをもとに、ジオン軍のザクより優秀な量産機である「ジム」を開発したのである。

地球連邦軍が「一年戦争」を戦い抜けたのは、まさにガンダム1機のおかげといえるだろう。

ジオングの頭部と相撃ちになる「ラストシューティング」は、屈指の名シーンとして知られる。



ガンダムと分離・合体が可能な重戦闘機

支援用重戦闘機

Gファイター



「Gファイター」は、マチルダ・アジャンのミニア輸送隊が持ってきた、ガンダムのサポートメカである。

武装は、上部の2連装ビームキヤノン、機首と機体下部にミサイル発射口があり、下部のミサイルは後ろに攻撃することができる。

Gファイターは、上にガンダムを乗せてサブ・フライト・システムとして運用できるほか、ガンダムのコア・ブロック・システムを応用してさまざまな形態にチェンジが可能となっている。

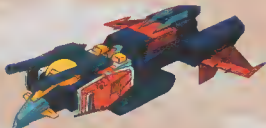
さまざまな形で戦いをサポートする

[Gスカイ]



Gファイターの後部と小型戦闘機「コア・ファイター」、Bパーツが合体した形。高速戦闘機として戦える。

[Gアーマー]



Gファイターと「ガンダム」が合体した形態。左右にある盾は分離の際に1枚破壊していたが、2枚重ねに改良された。

[Gブル]



Gファイター前部と戦闘機「コア・ファイター」、Aパーツが合体した形態。強力な戦車として活躍した。

[ガンダム+Bパーツ]



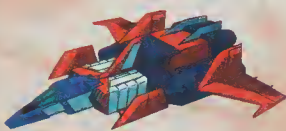
Gファイター後部と「ガンダム」が合体した形態。「ザクレロ」との戦闘時にのみ使用された形態。

[Gブル・イージー]



Gファイター前部とAパーツのみが合体した形態。操作はGファイターで行うため、当時はGブルと誤った。

[Gスカイ・イージー]

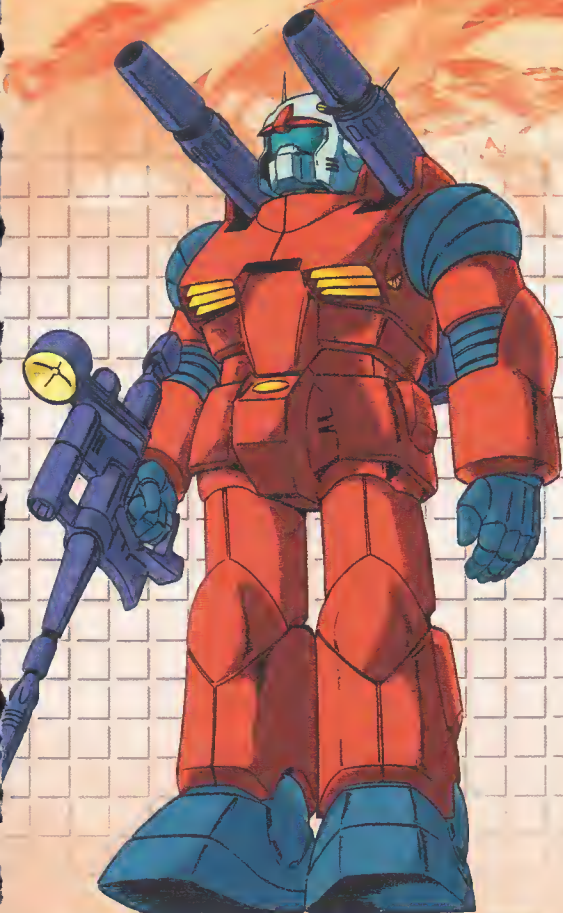


Gファイター後部と小型戦闘機「コア・ファイター」が合体した形態。ガンダムを上に乗せて操作することになった。

馬力と頑丈さを兼ね備えたRXチームの大砲役

RX-77-2

ガンキャノン



SPEC

「V 作戦」で開発された、中距離支援用モビルスーツ。全高 17・5m。重量 51・0t。主な搭乗者はカイ・シデン。



RXチームのナンバー2

グレートキャニオンにて一時休戦した強襲揚陸艦「ホワイトベース」とガルマ・ザビの部隊は、避難民の退避後、再び交戦する。この戦いでは、作戦上「ガンダム」を敵陣の背後に配したため、ホワイトベース側に「ガンタンク」とともに投入されたのが「ガンキャノン」だ。

搭乗者のカイ・シデンがまだ乗り馴れていなかったものの、この戦いで本機は、その強力な火力をもって戦闘機「ドップ」や戦車「マゼラ・アタック」を撃破するなどのスコアをマークした。

そしてこれ以降、ガンキャノンはガンタンクとともに、ガンダムをサポートするサブ戦力として幾多の激戦を駆け抜けることとなる。もちろん、劇中ではキャノン砲を最大限にいかした活躍が多く、その火力の高さは、撃った反動の大きさからもよくわかる。そのため、安定した砲撃を行うべく四つん這いで撃つたり、高台に手をかけて撃つたりと、さまざまな射撃方法が見受けられた。

ただ、残念ながらガンキャノンは、基本的にはあまり派手な戦果をあげた機体ではない。しかも、劇中後

固定なしにキャノン砲を撃てば、反動で大きく後ろに後退する。それだけ火力が大きいことの証である。



半になると、カイの練度が上がるのと反比例するように活躍そのものも激減する。だが、本機の地道な援護射撃なしに勝利できなかった戦いも多い。ガンキャノンは、ホワイトベース隊にはなくてはならない、偉大なナンバー2なのである。

ちなみに、劇場版『めぐりあい宇宙編』では、ホワイトベース隊にもう1機のガンキャノンが受領され、カイ機（機体番号109）とハヤト・コバヤシ機（機体番号108）が活躍している。さらに、宇宙要塞「ア・バオア・クー」戦では、この2機以外に量産されたガンキャノンも連邦軍各隊に配備され、実戦投入されている。テレビ版よりも活躍している本機の姿を見たい方は、こちらのほうもご確認あれ。

▼役割に特化した、中距離支援モデル

ガンキャノンは、「V作戦」によってガンダムとともに開発が進められたモビルスーツだ。この2体に求められたコンセプトは、「ザク」に見受けられるような汎用性ではなく、チーム戦における「役割」である。砲撃戦用にすでに完成していたガンタンクを、中距離支援にガンキャノンを、格闘戦用にガンダムをという形で、用途や射程距離にあわせて特徴を分化し、開発されたのだ。

そうして誕生したガンキャノンは、この開発コンセプトをしっかりと具現化した姿となった。両肩には、同時発射も可能な240ミリキャノン砲を2門装備。頭部にはバルカン砲を装備し、手にはガンダムのものよりも大型で、火力も高い狙撃用ビームライフルを携行している。また、

ガンキャノンには、そのコンセプトゆえに、ガンダムよりも優秀な点も多い。たとえば装甲が非常に厚く、「ドム」のジャイアント・バズを受けても撃破されないほどの頑丈さを誇っている。さらに、ガンキャノンのバイザー型カメラはガンダムのものよりも視界が良好で、実はこれがのちに「ジム」に転用されている。

一方、ガンキャノンの弱点となるのが、格闘武器を一切持たないことだ。これは開発コンセプトゆえの性だが、一応パンチやキックくらいの格闘戦はこなせる。実際、塩湖に立ち寄ったホワイトベースがランバ・ラル隊の襲撃を受けた際、アムロ・レイの乗るガンキャノンが、ザクを強烈なパンチと足払いで倒している。馬力の高さに関しては、RXチーム一といえそうだが。

いずれにせよ、ガンキャノンは中距離支援モデルという、使用目的に沿ったジャンルの開拓者となった。後年はあまり直系の後継機が生み出されていないものの、「用途にあわせて性能を特化したスタイル」は、その後の多数生まれた特異なモビルスーツたちの発想の原点のように思える。

ガンキャノン自体は時代に埋もれたが、ガンキャノンの残した面影は今なおモビルスーツの歴史に深く刻まれている。

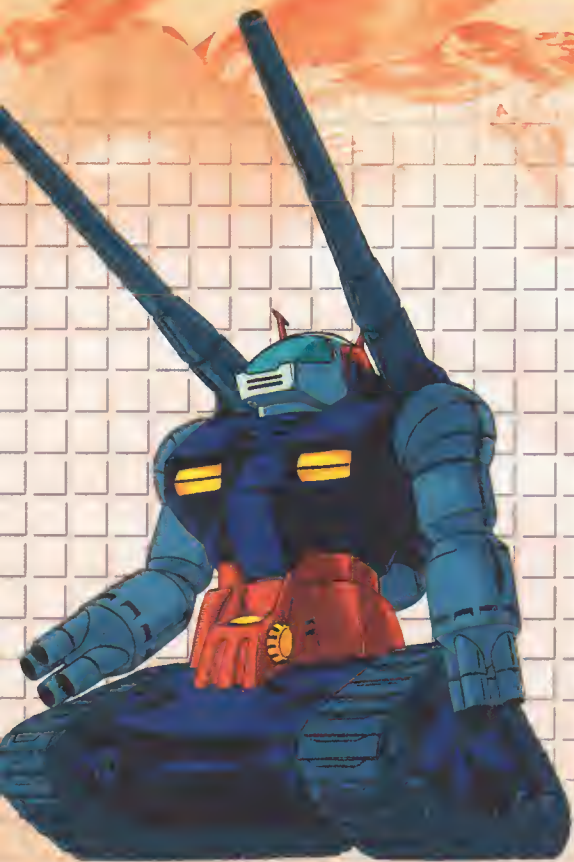
キャノンの射撃方法は、意外とバリエーション豊か。射撃精度を上げるために、砲身を手で支えることもしばしば。



驚異の対空能力を有するロボット戦車

RX-75

ガンタンク



SPEC

「V 作戦」で最初に開発された、長距離支援用
モビルスーツ。全高 15・0m。重量 56・0t。
主な搭乗者はハヤト・コバヤシ。



ホワイトベース隊における影の功労者

シヤア・アズナブル隊の追撃を振り切るべく、強襲揚陸艦「ホワイトベース」は宇宙要塞「ルナツー」宙域で補給する巡洋艦「ファルメル」を奇襲する作戦を敢行する。しかし、敵との交戦中、味方機が邪魔でホワイトベースの主砲が撃てなかったため、ハヤト・コバヤシの機転で投入されたのがこの「ガンタンク」だ。

突然の実戦投入ながら、ガンタンクが大型特殊の免許だけで乗れることが幸いし、見事に補給艦「バブア」を撃沈させることに成功する。

その名の通り、タンク＝戦車を彷彿とさせるフォルムのガンタンクは、この初陣以降、砲撃戦や地対空攻撃などが必要とされる戦局において大活躍する。

ホワイトベースを追いつめるガルマ・ザビ隊の迎撃作戦では、戦闘機「ドップ」を次々に迎撃して対空能力を存分に発揮。また、偶然発見したマ・クベの採掘基地を破壊する作戦では基地の大半を壊滅させたりと、大火力を遺憾なく発揮した見事な戦果をあげている。

さらに、「V作戦」で誕生した「ガンダム」、「ガン

ア・バオア・クー攻略戦では、キャノンとポップミサイルの同時発射で、リック・ドム3機同時撃破の荒技も披露。



キャノン」との同時運用においては、2機をサポートする長距離支援機としてのポジションを確立。マッド・アングラー隊の「ズゴック」を倒すべく、ガンダムに導かれて海面から姿を現したところに120ミリキャノンをドンピシャで見舞って敵機撃破に一役買うなど、仲間との連係プレーを最大限にいかし、活躍していた。

劇中でも、最後の激戦区となる宇宙要塞「ア・バオア・クー」攻略戦までしっかりと戦力として機能していた。その機動性の低さを考えると、非常によく持ちこたえたほうだといえる。

派手な活躍をしていたガンダムの影に隠れた、縁の下の力持ちガンタンク。そのポテンシャルは意外と高いのかもしれない。

▽ □ ポット戦車ゆえの宿命的な轍

ガンタンクは、V作戦で開発されたモビルスーツ、RXシリーズで最初にロールアウトした機体である。しかし、当初地球連邦軍には二足歩行のノウハウがなかったために、コクピットが丸見えの頭部、両肩・両手にはものものしい砲身、下半身がキャタピラという、戦車の面影を色濃く残すフォルムとなった。

武装のほうも戦車の発想と大差なく、両肩には120ミリキャノン、手にはポップ・ミサイルを装備。しかもオプション兵器も携行できなければ、格闘武器も一切ない。純粹に移動砲台としての性格を強調するモデルとなってしまった。

こうして、本来目指すべきモビルスーツの形となれなかったガンタンクは、もともと長距離

砲撃支援をコンセプトとしていたわけではない。

のちにガンダム、ガンキャノンが開発され、それらとの同時運用を前提として、後天的に「長距離砲撃支援」というポジションを与えられたのだ。

唯一、戦車的に見ての独自性となると、ガンダムやガンキャノンと同様、「コア・ブロック・システム」を採用していたことに尽きる。しかし、そのメリットもあまり顕著とはいえず、結局、当初は複座式コクピットだったガンタンクは、マチルダ・アジアン補給部隊によって単座機に改修された。これはもちろん、ガンタンクの有効性を高めるための改修だが、コア・ブロック・システムに一種のアイデンティティーがあったRXシリーズとしては、悲しい宿命かもしれない。

また、ガンタンクには決定的な弱点も多かった。

キャタピラが破壊されると地上ではただの砲台と化すこと。宇宙空間ではキャタピラ走行の意味が皆無なこと。そして圧倒的に機動性が低いこと、などなど。

これらが、おそらくモビルスーツの性能として大いに疑問視されたのだろう。

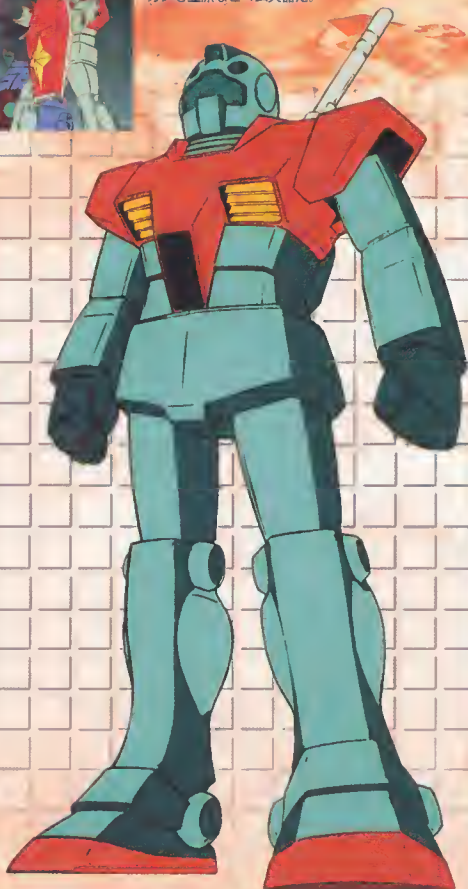
ガンタンクは後年、ほとんど後継モデルが誕生することなく歴史に埋もれていった。

長射程砲撃だけでなく、対空砲撃についてもRXシリーズ中で一番安定している。陸戦でこそ力を発揮できる。





ボールとグリーブを組み、大量に投入されたジム。出力は低い、ビーム・スプレーガンも立派なビーム兵器だ。



ジム

RGM-79

高い生産性を誇る地球連邦軍の量産機

SPEC

「ガンダム」のデータをもとに開発された、地球連邦軍初の量産型モビルスーツ。全高 18・0m。重量 41・2t。主な搭乗者はシン。



大量投入された地球連邦軍のやられ役!?

地球連邦軍本部「ジャブロー」に突入しようとするジオン軍を、連邦軍が全力で迎撃するなか、見慣れないモビルスーツも参戦する。それが「ジム」の初お目見えだ。が、その後「シャア専用ズゴック」の一撃を腹に食らって爆発四散してしまう。

ジムのデビュー戦は、連邦軍側のヤラ役としてのイメージを植えつけられ、その後も、数々の戦いで「ザク」と競うようにしてやられ役を演ずることとなる。

ジムは「ガンダム」から回収したデータをもとに、量産機として設計されたモビルスーツである。プロダクトモデルとして開発されたため、コア・ブロック・システムを廃止し、ジェネレータも低出力のものに変更されている。

武装は、ビーム・スプレーガンに、ビーム・サーベル一本、頭部バルカン、シールドを装備しており、全体的に機能も武装も簡略化されている。

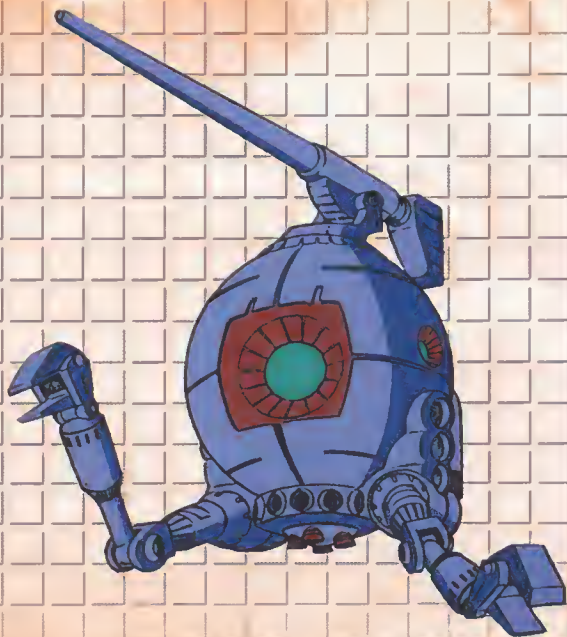
だが、ビーム兵器を使用できるメリットは大きかったようで、劇場版『めぐりあい宇宙編』では「リック・ドム」を倒すシーンも見られた。アドバンテージは伊達じゃなかったわけだ。

ただ、本機最大の特徴は、高い生産性に尽きる。短期間で大量に生産できるため、宇宙要塞「ソロモン」や「ア・バオア・クー」攻略戦では多数のジムが投入された。そして、それぞれの戦いでいずれも連邦軍が勝利したことは、ジムが勝利のカギだったことを証明している。

「一年戦争」を終結させたのは、ジムの登場にほかならないのだ。



ボールに格闘戦は、はっきりいって無理。
ひとたび敵モビルスーツに近づけば、この
ような惨劇を生むことに……



ボール

RB-79

キャノン砲を付けた宇宙用作業ボット

SPEC

宇宙用作業ボットを戦闘用に改造したボット。
全高 12・8m。重量 17・2t。搭乗者は一般兵。



数合わせのためだけの捨て駒的メカ

宇宙要塞「ソロモン」攻略戦で、ついに地球連邦軍は一斉攻撃を開始。この激戦で初めて姿を現したのが「ボール」だ。

キャノン砲と細い腕をつけたひとつ目の球体は、「ジム」とともに行動し、連邦軍の戦力として活躍した。しかし、その弱そうな見た目通り、劇中ではジム以上にやられシーンが目立つ。その最たるものが、宇宙要塞「ア・バオア・クー」戦で「ザク」に蹴られてジムに激突し、爆発するシーンだろう。単独行動は、即「死」。これこそがボールの特徴を表している。

ボールは、宇宙用作業ボッドを戦闘用に改造したものである。当時の連邦軍は、ジムの量産に成功したとはいえ、ソロモン攻略を前にして、全部隊に配備するには時間的にもコスト的にも無理があった。そこで、急遽その穴埋めとして開発されたのがボールである。

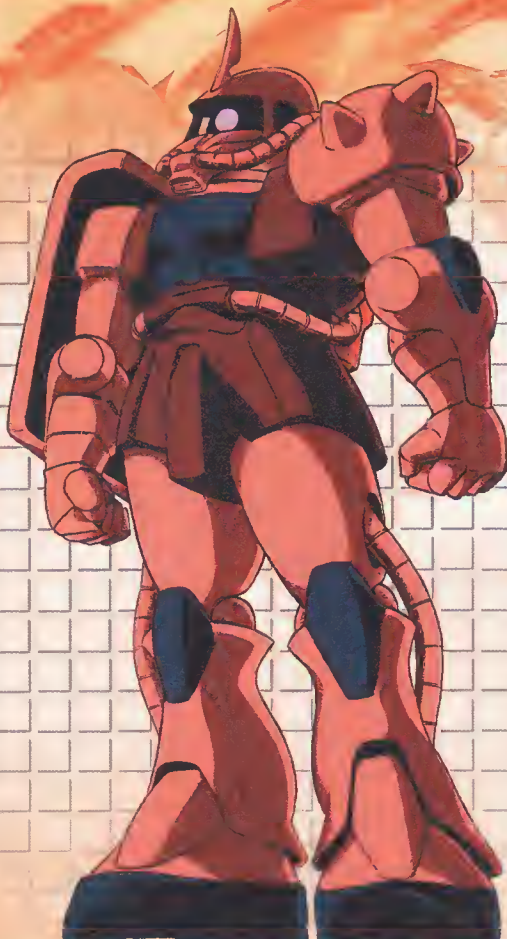
作業ボッドのブースターと装甲を強化し、120ミリキャノン砲1門を装備しただけなので、生産性は非常に高い。実際、実戦には大量の機体が投入され、連邦軍の物量作戦の一翼を担っていた。

だがその反面、対モビルスーツ戦には圧倒的に弱く、「ガンタンク」以上に移動砲台としての意味合いが強い。しかも、ボールは宇宙空間でしか運用できず、使い勝手が悪い。もともと数合わせとしてつくられたとはいえ、これほど捨て駒を前提にしたメカも珍しい。しかし、戦争というシビアな世界では、このような兵器の存在も必要なのだろう。

ホワイトベース隊に迫り来る恐怖の「赤い機体」

MS-06S

シャア専用ザク



SPEC

「ザク」の指揮官機。全高 17・5m。重量
56・2t。エースパイロットであるシャア・ア
ズナブル用にカスタマイズされた専用機。



機動性でガンダムを圧倒

ジオン軍のエースパイロットであるシャア・アズナブルは、地球連邦軍の「V作戦」を調査するため、中立のスペース・コロニー「サイド7」へ向かった。

しかし、調査のためにサイド7へ潜入したデニムとジーンの「ザク」は、連邦軍の新型モビルスーツ「ガンダム」によって撃破されてしまう。

たった1機を相手に2機のザクがやられたという事実を重く見たシャアは、さらなるデータ収集のためにガンダムを載せた連邦軍の新造艦「ホワイトベース」を追撃。

自らモビルスーツに乗り込み、ガンダムに戦いを挑むのであった。

劇中の第2話で初登場した「シャア専用ザク」は、緑を基調としたほかのザクとは異なる派手な赤を基調としたカラーリングと、指揮官機ならではのツノ（アンテナ・ブレード）の存在で、特別な機体であることがひとめでわかった。

また、ホワイトベースのパオロ艦長の口から、搭乗者のシャアが相当な実力者であることがうかが

マシガンが通用せず、ガンダムに対し肉弾戦を仕掛ける。ガンダムに蹴りを入れるシーンは、あまりにも有名だ。



え、シヤア本人の自信満々なセリフともあいまって、強敵の登場を強く印象づけた。

このとき、ガンダムを何とか操縦していたアムロ・レイは、勇敢にもシヤア専用ザクを迎撃する意思をみせる。しかし、シヤアが操るザクに対し、ガンダムの攻撃はかすりもせずには翻弄され、戦い自体は一方的な展開となった。

ところが、ジオン軍のザクと戦うことを前提に開発されたガンダムの装甲は、ザクの主兵装であるザク・マシンガンをもまったく受けつけない。

シヤアにとっては、モビルスーツを操縦する技量で圧倒していながら有効な攻撃手段がないという、なんとも歯がゆい状態に陥ることになった。

シヤアは、マシンガンが通用しないことを悟ると肉弾戦に切り替え、マシンガンを牽制に使用しつつ、ショルダータックルやキックなどで攻撃。なんとかガンダムにダメージを与えようと試行錯誤をしていた。

しかし、あまりに頑丈なガンダムには、これらの攻撃もまるで効果がなく、さすがのシヤアも「連邦のモビルスーツは化け物かー」と毒づくのだった。

▼ **E**ースパイロットだけに許された独自のカラーリング

シヤア専用ザクは、量産型のザクを元に製作された指揮官向けのザクで、30%ほど増している推力をはじめ細部を強化した改修機である。よって、ベースとなっているザクに比べ、飛び抜けて性能が違うという機体ではなかった。

武装面でも特殊な装備などは用意されておらず、量産型ザクと同様に接近戦用のヒート・ホークに、主兵装としてザク・マシンガンとザク・バズーカの、どちらかを選択するというのが普通であった。

劇中では、ザク・マシンガンで戦う場面が多かったが、ガンダムに対しては火力不足でまったく効果はなかった。

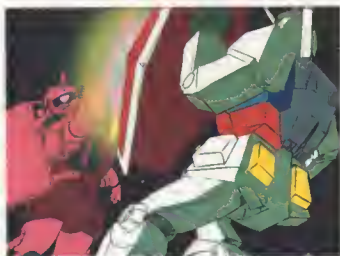
しかし、第3話で補給を受けたのちは、ヒート・ホークやザク・バズーカなどを装備して出撃し、ガンダムのハイパー・バズーカやシールドを破壊するなど、一定の損害を与えることに成功している。

しかし、ガンダムの搭乗者であるアムロが急速に操縦に慣れてきたことで、ガンダムは徐々にその性能を発揮しはじめ、ついには最後まで決定打を与えることができなかった。

とはいえ、ザクが装備している武器は、連邦軍の戦闘機や艦船を相手にすることを前提につくられたものであり、ザクをはるかに凌駕するモビルスーツとの戦いなど、まったく想定されていなかった。

むしろ、はるかに上回る性能をもつガンダムを相手に、本機が最後まで無傷だったことのほうが奇跡

マシンガンは通用しないが、バズーカやヒート・ホークでなら、ガンダムのシールドを破壊できる。



といえるのではないだろうか。

なお、シヤア専用ザクは通常のザクと異なり、緑ではなくワインレッドとピンクのカラーリングが施されているが、これはジオン軍では一部のエースパイロットに限り、独自の塗装を施すことが許可されていたためである。

戦場におけるエースパイロットの存在は、ともに戦う兵士にとっては心強いものであり、エース機の存在をひと目で確認できるようにすることは、一般兵士の士気を高める狙いがあると思われる。

▼「通常の3倍」伝説とシヤア専用機

シヤア専用ザクといえば、「通常の3倍」というフレーズを思い浮かべる人も多いはず。

これは、初登場の場面でホワイトベースのオペレーターであるオスカー・ダブリンが、「1機のザクは通常の3倍で接近します」と言っていたことから「シヤア専用ザクは、普通のザクの3倍で移動できる」といわれるようになったのである。

しかし、単純に普通のザクの3倍の機動性があるとする、ガンダムすら軽く凌駕してしまいうことになる。スペック的には、前述したように3割増し程度なので、「3倍速く動ける」というわけではない。

通常、軍隊では部隊単位で移動するため、「巡航速度」という規定された速度で進む。

そこで、巡航速度での移動を「通常」と考え、「シヤアは単機で全速突撃をかけたため、巡

航速度の3倍で移動した」とするのが大筋の解釈なようだ。

とはいえ、このときバオロ艦長は、オペレーターの報告を聞いただけでザクのパイロットがシャアであると判断している。

艦長が語った「ルウム戦役」において、シャアが搭乗していた前のザクは本機よりも性能が劣つたものであったとされていることから、彼が単に機体性能だけではなく、高い操縦技術によつて高速移動をして見せたのは、確かなことだと思われる。

なお、のちに登場するシャア専用機も本機の塗装を踏まえており、「赤い機体Ⅱシャア専用」という図式は受け継がれているが、「通常の3倍」といわれたのは本機のみで、「ズゴック」や「ゲルググ」には当てはまらない。

ちなみに、劇中当初からシャア専用ザクとともにホワイトベースを追っていたシャアだが、第12話でガルマ・ザビを死なせた責任を問われて一時更迭される。そしてこれを機に、シャア専用ザクは登場しなくなる。

しかし、のちに登場するシャア専用のズゴックやゲルググと比べても、本機が一番華々しく活躍したのは間違いなさだろう。

「通常の3倍」で迫るシャア専用ザク。真偽のほどはともかく、スピード感だけは格別で迫力があつた。



汎用性に優れた一年戦争の名機

MS-06F

ザク



SPEC

「一年戦争」初期に主力を務めた、ジオン軍の
量産型モビルスーツ。全高 17・5m。重量
56・2t。主な搭乗者はデニム、ジーン。



いわずと知れたジオン軍の主力機

ジオン公国と地球連邦が戦争をはじめてから約8ヶ月、中立のスペース・コロニー「サイド7」では、地球連邦軍の極秘計画である「V作戦」が行われていた。

しかし、これをキャッチしたジオン軍のエースパイロット、シヤア・アズナブルは、偵察の目的で部下を潜入させたのであった。

「ザク」は、いわずと知れたジオン軍の主力モビルスーツである。

劇中では、第1話の冒頭でいきなりザクの頭部がアップで映し出され、これが本機の、また「モビルスーツ」の初登場シーンとなる。コロニー内部へは、デニム曹長とジーンのザクが侵入したが、モビルスーツの部品を見つけるとジーン機が勝手に攻撃を開始してしまう。

デニム機もやむなく援護にまわるが、反撃を試みる連邦軍の兵器は、対空戦車やミサイル車などだったため、ザクは軽々と蹴散らしてモビルスーツの部品を次々と破壊していった。

ところが、この攻撃によって避難中であった民間

地球連邦軍が開発したガンダムは、ザクを凌駕する性能をもっており、太刀打ちできなかった。



人に死傷者がたため、憤りを感じた民間人の少年アムロ・レイが「ガンダム」に飛び乗ったことで、モビルスーツ同士の戦闘となった。

動き出したガンダムに対し、ジーン機がザク・マシンガンで攻撃を行うが、ガンダムの装甲はマシンガンをまったく受けつけなかったばかりか、手でザクの部品を引きちぎってしまうほどのパワーをもっていた。

あまりの性能に危険を感じ、ふたりは撤退しようするも時すでに遅く、ジャンプして逃げようとしたジーン機が一瞬で追いつかれ、ビーム・サーベルで機体を真つぶたにされてしまうと、仇を討とうと向かっていったデニム機も、あえなくコクピットを貫かれて撃破されてしまうのだ。

そしてこの戦いは、「史上初のモビルスーツ同士の戦闘」となった。

モビルスーツの有効性を実証した機体

地球連邦との開戦にあたって、ジオン公国はモビルスーツを開発し、「旧ザク」を完成させた。しかし、旧ザクは出力不足のために十分な運動性能を確保できなかったため、キシリア・ザビの強い要望もあって、より性能を向上した本機が開発されたのであった。

改良にあたっては、出力の向上と冷却装置が強化されたほか、旧ザクでは装甲内部に収容していた動力パイプを外側に出すことで、運動性能の向上をはかっている。

こうして誕生したザクは、ジオン軍の主力機として量産されることになり、ジオン公国はつ

いに地球連邦との戦争に踏み切った。開戦当初、地球連邦軍はジオン軍の3倍の戦力を有していたが、ザクを主力としたジオン軍は戦艦を主力とする連邦軍に大損害を与えて大勝。モビルスーツという、新たな兵器の威力をまざまざと見せつけられた連邦軍は、のちに「V作戦」を発動することになるのだ。

劇中でもサイド7に進入したザクを見たアムロが、「これがジオン軍のザクなのか」と言っていたことから、「モビルスーツのザク」の名は、民間人ですら知っているほど有名なもので、脅威的な存在だったと考えられる。

事実、サイド7の戦闘では、ミサイル砲などで迎撃に出た連邦軍が、たった2機のザクのためだけに全滅しており、ホワイトベースに残された正規軍人で、動ける者は10名にも満たないという有様だった。

モビルスーツという兵器が、いかに有効であるかを実証したシーンだったともいえるだろう。

高い汎用性と充実したオプション武装

ザクは汎用性の高い機体で、多少の改修で容易にカスタマイズが可能であり、オプションとしての武装や装備も充実していたことから、運用地の環境に

状況や相手に応じて、さまざまな武器を使用できる汎用性の高さも、ザクの売りのひとつ。



合わせて改修した、さまざまなバリエーション機が生きている。

ザクの武装としては、ザク・マシンガン、またはザク・バズーカを装備し、接近戦用にヒート・ホークを携帯するのが通常のようなのだ。また、地上ではクラッカーやミサイル・ポッドといったサポート的な武装も使用していた。

劇中でもっとも多く見られたのは、ザク・マシンガンを装備しているシーンだが、これは連邦軍の兵器が戦闘機や戦車といった小型のものであったため、弾丸をばらまいて命中率を高めていたためだろう。

また、艦艇である「マゼラン」や「サラミス」と戦う際には、より破壊力が大きいザク・バズーカを使用するか、ヒート・ホークで白兵戦を行ったようで、劇中冒頭に挿入されているナレーションのシーンでも、バズーカを装備している機体が確認できる。実際にバズーカを使用した場面としては、宇宙要塞「ア・バオア・クー」での防衛戦のシーンがあるが、それ以外では使用していなかった。

クラッカーやミサイル・ポッドは、ランバ・ラル隊に所属するザクが使用していたが、特にクラッカーはガンダムを跳ね飛ばすほどの爆風を発生させており、直接損害は与えていなかったものの、支援用としてはかなり大きい効果があった。

ミサイル・ポッドは、ガンダムに命中していなかったため威力のほどは不明だが、直撃すればかなりの損害があったものと考えられる。足に装着するため、行動を妨げることなく使い勝手は良好のようだ。

またランバ・ラル隊では、戦車「マゼラ・アタック」の砲塔部、浮上砲塔「マゼラ・トップ砲」をザクにもたせて使用していることもあったが、あくまで即席の武装であり、ザクの正規の装備ではない。

これは、友軍の支援を得られずに戦わなければならなかったための苦肉の策というべきもので、現地調達をモットーとするゲリラ戦法が本分の同隊ならではの装備といえる。

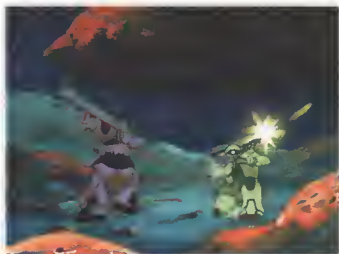
小型戦闘機「コア・ファイター」に対しては、マシガン銃床で叩こうとするシーンが何度か見られたが、これは耐久性に乏しい兵器に行う、一般的な攻撃方法だったと思われる。

「一年戦争」開戦当時は驚異的な兵器だったザクも、ザクと戦うことを前提につくられたガンダムの前ではまるで歯が立たず、民間人に過ぎなかったアムロが操縦しているにもかかわらず、その圧倒的な性能差によって撃破される運命となった。

また、ジオン軍でも新型モビルスーツを次々と開発したため、主力機の座を明け渡していくことになる。

しかし、新型機が登場してもザクを使い続けるベテランパイロットは多く、より優れた機体が登場する後年でも愛用している人物が存在するほど、汎用性と信頼性に優れた名機なのだ。

宇宙の主力機は「リック・ドム」に変わったが、ベテランパイロットの多くは慣れ親しんだザクに乗ったという。



ランバ・ラルも駆った白兵戦用モビルスーツ

MS-07B

グフ



SPEC

特殊武器のヒート・ロッドとフィンガー・バルカンをもつ。全高 18・2m。重量 58・5t。
主な搭乗者はランバ・ラル。



初めて登場した青い「新型」

地球に降りた強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、ジオン公国で最高権力を握るザビ家の一員にして、地球方面軍司令官であったガルマ・ザビによる攻撃を受ける。

しかし、密かにザビ家の打倒を狙うシャア・アズナブルの裏切りと、ホワイトベースクルーの奮戦により、ガルマは戦死することになった。

ガルマの兄にして宇宙攻撃軍司令官のドズル・ザビ中將は、ガルマの仇討ちをランバ・ラルに命じ、試作段階であった地上用新型モビルスーツ「グフ」を支給して地球へ派遣したのだった。

グフは、これまで登場していた「ザク」に似た形ながら、頭部にツノ（アンテナ・ブレード）が付いていたり、大きくせり出した肩のトゲなどが異なっているほか、濃い青のカラーリングという点もあって見栄えがよく、ファンも多い機体である。

劇中では、第12話で初登場。

これまで延々と登場してきたザクとは、若干ながらも異なる形状だったほか、ランバ・ラルという隊長クラスの人物が搭乗するということから期待も大

初めて全身が登場したシーン。崖の上で背後に雷が光るという演出は芝居がかっているが、やはり格好いいものだ。



きかった。

2機のザクをしたがえて崖の上に現れるシーンは、さながら子分を引き連れた御頭といった雰囲気で、かなりのインパクトがあった。

このとき、一見したところ武器らしいものもっていないが、のちに左手の指が機関砲になっていたり、右腕から伸ばしたヒート・ロッドをガンダムハイパー・バズーカに巻きつけ、電撃を流して破壊してみせるなど、予想外の攻撃を次々と繰り出した。

また、攻撃面だけでなく、これまでザクを一太刀で倒してきたガンダムのビーム・サーベルを、振り下ろされる寸前に左手で払いのけてみせるなど、軽快な動きでガンダムを圧倒している。

戦っていたガンダムのパイロットであるアムロ・レイも、「ザクなんかと違って、装甲もパワーも」とあらためて驚いており、ラルの「ザクとは違うのだよ、ザクとは！」というセリフともあいまって、グフはただのやられ役などではない、完全な新型モビルスーツであることを強く印象づけたのだった。

▼本領が発揮された地上での白兵戦

ジオン公国はスペース・コロニーに住む宇宙移民国家であったため、もともと地上で活動するためのモビルスーツは持つておらず、宇宙で使用していたザクを陸戦用に改修して使用していた。

グフは、「地上専用のモビルスーツを」という声に応じて、ザクの欠点を補って改修された機体である。

開発に際し、陸戦用ザクの問題であった機動性の向上や装甲の強化などが行われたほか、同時に地球連邦軍のモビルスーツとの戦闘を念頭において白兵戦用に固定武装を装備することになり、左手の指に5連装の75ミリ機関砲、右腕内部にヒート・ロッドを搭載。

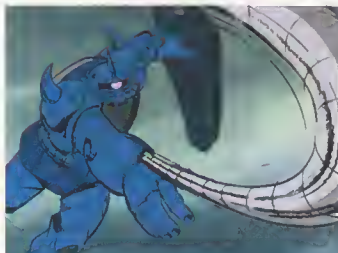
また、左腕部には大型のシールドを装備している。

左手の75ミリ機関砲は、ザクの標準武装であるザク・マシンガンよりも破壊力は小さいものの、このころの連邦軍の主力兵器は依然として航空機や戦車だったことを考えると、威力は十分といえる。5連装ということで、逆に命中率が高いという利点があったものと思われる。

劇中では、装甲の厚いガンダムにこそ大した効果は得られなかったものの、マチルダ・アジャンの輸送機「ミデア」隊を襲撃するシーンでは、かなりの損害を与えていた。

右腕内部のヒート・ロッドは、最長17・5 mまで伸びる伸縮自在の電磁ムチで自由に動かすことができる。

グフを象徴する武器であるヒート・ロッド。剣や斧ではなく、「ムチ」という点ににひかれた人も多いはず。



地面に潜り込ませて不意打ちを仕掛ける場面もあることから、ムチを振った慣性による動きだけでなく、かなり任意に動かせるようだ。

使い方としては、敵に巻きつけて電撃を流すことで、駆動回路にダメージを与えると同時にパイロットを感電させることができるほか、電流とともに発生する熱で対象を溶断することも可能となっている。

固定武装だけに劇中でもっとも使用された武器であり、「ガンキャノン」との戦いでは腕に巻きつけて電流を流してカイ・シデンを感電させ、応援に駆けつけたガンダムがやむを得ずガンキャノンの腕ごと破壊するシーンもあった。

また、セイラ・マスが搭乗するガンダムと戦った際には、砂に潜って待ち伏せした状態から、ガンダムのつま先を一瞬にして切断しており、物理的衝撃による破壊力も相当なものであるようだ。

ランバ・ラルが搭乗していた機体はYMS・07Bという先行量産型で、固定武装のほかにシールドの裏にヒート・サーベルも装備していた。

このヒート・サーベルは、ガンダムのシールドを一刀両断してしまうほど優れており、見た目も格好よい武器だった。だが、この後に劇中で登場する量産型のMS・07Bはサーベルを使用しておらず、ガンダムとの一騎打ちをするシーンが唯一サーベルを使用する場面となっている。

さらに、固定武装を内蔵しておらず、ザクと同じタイプの手を持つ、MS・07Aというタ

イブも存在する。これらの機体は、マ・クベ指揮下の鉦山地帯で登場し、本来はザクの装備であるヒート・ホークやザク・マシンガンといった武器でガンダムと戦っていた。

▽ド・ダイYSとの連携で空中戦もこなす

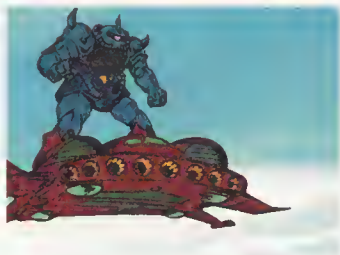
グフの頭部には、本来指揮官用の機体にのみ付けられる通信用のアンテナ・ブレードが付けられているが、これはグフの開発当初から、重爆撃機である「ド・ダイYS」との連携行動を考慮して設計されたためで、例外的にすべての機体に付けられている。

モビルスーツを載せて空を飛ぶという発想はなかなか画期的で、ガンダムも対応には苦慮していた。

劇中では、3機のグフがド・ダイYSに乗って戦闘機「ドップ」の編隊とともに出撃し、連邦軍の輸送機「ミデア」やガンダムに対し、自由に空を移動しながら戦っている。

第23話以後、劇中でグフが活躍する姿は見られなくなるが、未熟だったアムロが操縦していたとはいえ、量産機でありながら、最新鋭機のガンダムを幾度となく苦しめた性能と実績は、高く評価できるだろう。

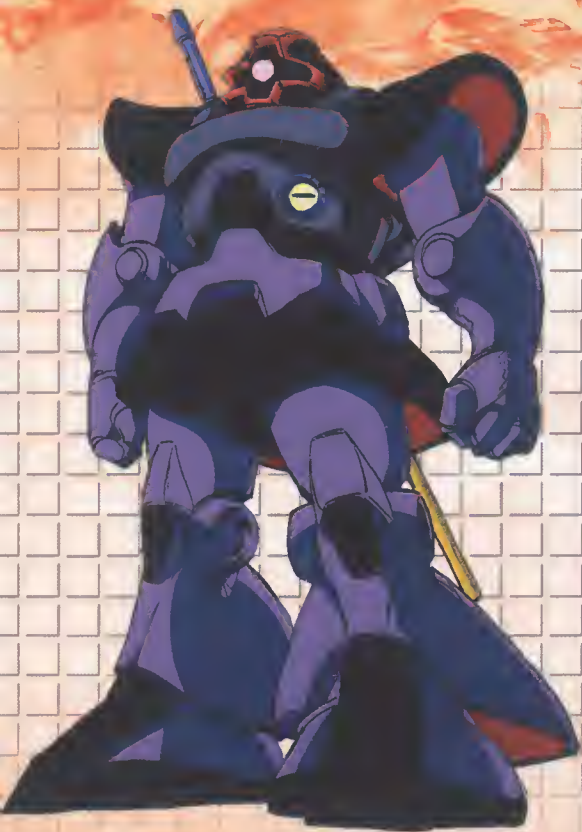
ドダイYSで自由に空を飛び回るグフ。Gファイターに乗ったガンダムと、空中戦を行うシーンも見られた。



三位一体の攻撃でガンダムに迫った重モビルスーツ

MS-09

ドム



SPEC

ジオン軍の陸戦用重モビルスーツ。全高 18・6m。重量 62・6t。主な搭乗者は、ガイア、マッシュ、オルテガ。



見た目と違う軽やかな動き

ランバ・ラル隊を撃退した強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、目前に迫った地球連邦軍の「オデッサ作戦」に参加するため、アジアを西へ向かっていた。

一方、オデッサ地区を統括するキシリア・ザビは、鉾山開発を担当している部下のマ・クベを支援するため、「黒い三連星」とともに新型モビルスーツ「ドム」を送り込んだのであった。劇中の第24話で登場したドムは、これまでの「ザク」や「グフ」とは違い、頭部が小さく全体的にどっしりとした、力強さを感じさせる重厚なフォルムをしていた。

また、黒い三連星と呼ばれるパイロットチームのガイア、マッシュ、オルテガも荒くれ者という感じで印象的だった。

この、ドムと黒い三連星との組み合わせは、「ガンダム」のパイロットとして成長を続けているアムロ・レイの新たな敵として、まったく不足のない相手となったのである。

機動巡洋艦「ザンジバル」で地球へ降り立ったガイアたち黒い三連星は、到着早々にドムで出撃して

ガンキャノンとガンタンクの攻撃を、すいすいとかわして進むドム。グフ以上の高い機動性をもった機体だ。



いく。そして、ホワイトベースを発見すると、早速攻撃を開始した。

このときアムロとガンダムは、セイラ・マスの訓練飛行で重戦闘機「Gファイター」と合体した「Gアーマー」形態で一緒に出ていたため、ホワイトベースからは「ガンキャノン」と「ガンタンク」が迎撃に出撃する。

しかし、見た目と違い、ホバー走行による高い機動性をもつドムは、ガンキャノンやガンタンの砲撃をやすやすとかいくぐってホワイトベースへ接近。

ガイア機がガンキャノンの相手をしている間に、マッシュ機とオルテガ機がホワイトベースに攻撃をかけたのである。

▼ガンダムに仕掛けた必殺技「ジェット・ストリーム・アタック」

黒い三連星のドムは、ガンキャノン、ガンタンクを翻弄しつつホワイトベースを攻撃していたが、そこへようやくGアーマーが登場。ガイア機は、Gアーマーの2連装ビーム砲を姿勢制御だけでかわしてみせ、アムロを驚愕させた。

Gアーマーは、いったん山陰でガンダムと分離し、ガンダムは単機で再び戻ってくる。このガンダムに対して、まず隊長であるガイア機が交戦したが、ガイアはわずかに戦っただけでガンダムの高い性能とパイロットであるアムロの技量を見抜くと、マッシュとオルテガを呼び戻す。

そして、彼らが得意とする三位一体攻撃の「ジェット・ストリーム・アタック」を仕掛ける

のだった。

ジェット・ストリーム・アタックとは、3機が一行に並ぶことで後列の機体の行動を予測できないようにし、波状攻撃をかけることで目標を確実に撃破するという、必殺技である。

このときは、ガンダムに対して、ガイアを先頭にマッシュ、オルテガの順で接近。

まずはガイア機がヒート・サーベルで斬り込み、続くマッシュ機とオルテガ機がジャイアント・バズでしとめる予定だった。だが、すべての攻撃をぎりぎりのところでかわされ、逆にオルテガ機のジャイアント・バズが破壊されてしまう。

しかし、手ごたえを感じたガイアは二回目の攻撃を決断。

ガイア機が拡散ビーム砲で目くらましを行いつつ突進するが、ガンダムはとっさにジャンプしてガイア機を踏み台にすると、二番手のマッシュ機のバズーカをかわしつつ、ビーム・サーベルをコクピットに突き立てた。

ガンダムの動きが止まったこの瞬間は、三番手のオルテガ機にとって絶好のチャンスだったが、マッセルダ・アジャンの輸送機「ミデア」が体当たりを仕掛けて割り込んできた。

ミデアが割り込んでこなければ、ジェット・ストリーム・アタックでガンダムを倒せた可能性はあった。



このためオルテガ機は、ミデアを破壊するも、ガンダムに追いうちをかけることができなかった。

こののち、地球連邦軍の「オデッサ作戦」に際し、マッシュの仇を討つべくガイアとオルテガは再びドムでガンダムと戦うが、あと一歩及ばず最後まで勝つことはできなかった。

▽ガンダムを破壊できるだけの十分な性能

宇宙世紀0076年、ジオン軍は地球侵攻作戦を前提とした、陸戦用モビルスーツの開発をはじめた。この際、地上を移動するうえでの速度の遅さが問題となったが、ツイマツト社が足に熱核ジェットエンジンを搭載して、ホバー走行で移動するモビルスーツを開発。

この機体のテスト結果が非常に良好だったことから、対弾性や空方面での改良を行ったのちに正式採用され、重装甲でありながら高い機動性をもつ重モビルスーツ、ドムが誕生したのである。

劇中でも、ホバーによる高速移動は、同じ陸戦用モビルスーツであるグフとは比べものにならないほど速く、砲撃タイプの機体であるガンタンクやガンキャノンは、砲撃の照準がつけられずかなり苦戦していた。また、装甲もザクよりはるかに強固になっており、ザクには有効だったガンダムの60ミリ機関砲も、ドムにはまるで効果がなかった。

重装甲になったためか、ドムはこれまでのザクやグフとは違って頭部が小さくなっており、胴体に固定されているため顔の向きを変えることはできないが、モノアイの稼働範囲を上下左

右の十字方向にすることで、広い視界を得ているようだ。

武装は、ヒート・サーベルとジャイアント・バズに加え、胸部に拡散ビーム砲を内蔵している。ヒート・サーベルは、劇中でもガンダムのシールドを切り裂いており、接近戦における決定打となる武器である。

ジャイアント・バズは、かつてガンダムのシールドを貫通したことがあるザク・バズーカよりも大口径であり、ガンダムに対して十分効果が期待できた。

胸部ビーム砲は威力こそ低いものの、劇中のように目くらましとしての効果もあり、一瞬の間が命取りになる戦場では、中途半端な威力の火器なによりもよほど効果がある装備といえる。

このように、ドムはガンダムを破壊できるだけの十分な性能をもった機体であった。ガンダムのパイロットが普通の人間なら、黒い三連星の勝利に終わっていただろう。

しかし、劇中のアムロには初めてニュータイプ能力が働く描写がされていた。

ドムはガンダムに敗れたのではなく、覚醒しつつあったアムロのニュータイプ能力に敗れたともいえるだろう。

ドムは、ホバー走行による高速移動ができるだけでなく、ジャンプ力もガンダムに負けないほどの性能があった。



サイコミュ兵器を搭載したジオン軍の最終モビルスーツ

MSN-02

ジオング



SPEC

ジオン軍のニュータイプ用試作モビルスーツ。
全高 17・3m。重量 151・2t。搭乗者はシャア・アズナブル。



「足」は宇宙では関係ない？

宇宙要塞「ソロモン」を攻略されたジオン軍は、宇宙要塞「ア・バオア・クー」を中心に、最終防衛ラインの形成を急いでいた。

その途上、ジオン軍のシヤア・アズナブルは、ニュータイプ少女ララァ・スンとともに、ライバルのアムロ・レイの「ガンダム」と交戦する。

だが、ニュータイプとして覚醒したアムロと、マグネット・コーティングによって強化されたガンダムは、彼の戦闘力をはるかに凌駕していた。

搭乗機の「ゲルググ」が大きな損傷を受けたシヤアは、ララァと彼女の乗る「エルメス」をも失ってしまふ。

失意のシヤアはア・バオア・クーへ帰還したが、ジオン軍は新型機の「リック・ドム」や「量産型ゲルググ」をはじめ、要塞内に残存するモビルスーツをすべて投入していた。

そのため、シヤアが使用できる機体は、エルメスのサイコミュをもとに開発中であつた、「ジオング」しかなかったのである。

腰部から上のみで登場したジオングは、ある意味での新型モビルスーツの登場シーンよりも衝撃的だった。



キシリア・ザビの命令でジオングに乗ることになったシヤアが、格納庫で見たものは、なんと腰から上だけの、足がないモビルスーツだった。

ジオングに搭乗して出撃したシヤアは、腕部の5連装メガ粒子砲で敵の艦艇を沈め、敵モビルスーツ隊のなかにガンダムを発見。以後執拗に追いつぎ、攻撃をかけるのだった。

しかし、アムロのニュータイプ能力は急速に拡大しており、ジオングの切り札ともいえる、遠隔操作による腕部の有線制御式メガ粒子砲と、頭部のメガ粒子砲を使ったオールレンジ攻撃をもつてしても、ガンダムに攻撃を当てることができない。

シヤアは、ジオングの性能をフルに發揮できていない自身のニュータイプ能力、そして着実に自分を追い詰めつつあるアムロに、あせりを感じはじめるのだった。

激しい戦いの末、ジオングは5連装メガ粒子砲でガンダムの左腕を破壊したものの、一瞬の隙を突かれビーム・ライフルの直撃を受けてしまう。

しかし、アムロが胸部のコクピットを狙ったため、シヤアは頭部を分離させて離脱。胴体は破壊されたものの、メガ粒子砲による反撃でガンダムの頭部を破壊し、ア・バオア・クー内部へ退避した。

頭部だけのジオングは、最後のチャンスを狙って待ち伏せしたが、シヤアの存在を感知したアムロは、機体から離れてオートパイロット機能でガンダムを前進させる。そして、ジオングをとらえたガンダムは真下からビーム・ライフルを発射。ジオングもメガ粒子砲で同時に攻撃し、相撃ちとなるのだった。

敵が接近する前に撃滅する

ジオン軍は、ニュータイプの優れた認識能力を兵器の運用にいかそうと、早くからサイコミュシステムを研究していた。そして、モビルアーマー「ブラウ・プロ」とエルメスの完成で、ようやく実用段階へ達した。

ジオングは、まだ大型であったサイコミュ機器を、なんとかモビルスーツに搭載しようというコンセプトのもとに、国名でもある「ジオン」の名を冠した機体として開発が進められた。

開発にあたっては、「ザク」をベースにした試験機を製作してデータ収集を行ったが、サイコミュシステムの小型化が不十分だったため、既存のモビルスーツより大型の、モビルアーマーに近い機体として設計されることになる。

また、足がある機体のブランも存在したが、足の代わりに大型のスラスタを取り付けて機動力を高め、宇宙限定で運用するブランが先行で進められることになった。

このブランで誕生したのが本機なのである。劇中、シャアがジオングに搭乗した時点では、機

一撃で戦艦を沈める威力の5連装メガ粒子砲を直撃させれば、ガンダムも無事ではすまなかっただろう。



体の完成度は80%とされており、実際に機体が登場したシーンでは、足がないことから「つくりかけ」の観があった。

しかし、シヤアを案内していた技術士官は「現状でジオングの性能は100%出せません」と断言し、足に関しても「あんなの飾りです！偉い人にはそれがわからんのですよ!!」と言い切っている。

本機は足がないプランで開発されたものだったため、彼の言葉は嘘ではなかったのだ。

武装には、有線制御式5連装メガ粒子砲を前腕部に装備し、メガ粒子砲を頭部に1門と腰部に2門の、計3門を搭載している。

劇中では指を握りこんでいるシーンもあり、マニピュレータとしての機能はあるようだが、サイズがほかのモビルスーツよりも大きいため、携行火器の流用はできない。

また、白兵戦用のビーム・サーベルをはじめ、ミサイルや機関砲なども一切装備しておらず、攻撃は完全にメガ粒子砲に頼っている。

とはいえ、前腕を切り離して遠隔操作することで、敵の視覚外から攻撃するオールレンジ攻撃が可能のため、敵に接近される前に撃滅するのが、本機の正しい運用法なのだろう。

▼ 単なる脱出用モジュールではなかった頭部

通常のモビルスーツとは異なり、ジオングには胸部と頭部の2箇所にコクピットが設置されている。

サイコミュ操作は頭部で行い、ニュータイプのパイロットはこちらに搭乗する。これは、貴重なニュータイプパイロットを守るため、頭部を脱出モジュールと兼用したからだ。一般のパイロットは胸部のコクピットに搭乗し、サイコミュ兵器の攻撃はコンピュータが担当することになる。

劇中では、胴体を破壊されたあと頭部のみで戦っていたが、それなりの運動性をもっていた。

また、メガ粒子砲を何発も発射しており、稼働時間もそこそこあるようで、単なる脱出モジュールとはいえない戦闘力がある。

さらに、体積が極端に小さくなっているため、被弾率もかなり低下している。ガンダムと相打ちにもっていったのは、この性能によるところが大きいだろう。

アムロのガンダムが能力を限界まで発揮していたのに対し、シャアのジオングは、機体性能をフルに引き出せていなかったことを考慮すると、本機はガンダムよりも優れたモビルスーツだったといえるかもしれない。

最後の場面で、メガ粒子砲は一撃でガンダムの右半身を溶かすほどだった。いかに高い火力だったかがうかがえる。



三たび戦場へ舞い降りた、赤い彗星の乗機

MS-14S(YMS-14)

シャア専用ゲルググ



SPEC

「ゲルググ」の先行生産機で、シャア・アズナブル専用機。全高 19・2m。重量 42・1t。基本性能的には一般機と差はない。



ガンダムに翻弄された不遇の傑作機

新型機のテストをするため、シャア・アズナブルの機動巡洋艦「ザンジバル」は、スペース・コロニー「サイド5」の「テキサス」コロニーへと侵入。コロニー内で「ガンダム」と「ギャン」が対決していたことを知ったシャアは、ようすを見るために新型機に搭乗して出撃する。それが、彼の三番目の専用機である。

登場早々、「ゲルググ」はガンダムと同じくビーム・ライフルを撃ち、ビーム・ナギナタを華麗にさばいてガンダムを追いつめるという、新型の性能を存分に発揮する戦いを見せつけた。

ただ、ギャンとの戦いでガンダムはビーム・ライフルを使い切り、さらに激しい砂嵐で視界が不鮮明というシャアにとっては有利な条件にもかかわらず、当時のアムロ・レイがニュータイプ能力に覚醒していたことは不運であった。先読みされて、効果的な攻撃を与えられないのだ。

せっかく新型機を駆ったにもかかわらず、シャアはガンダムに苦戦を強いられ、結局ゲルググは胴部に損傷を受けて逃げ帰ることとなる。

ジオン軍で初めてビーム・ライフルを標準装備。ただ、劇中でその凄さをあまりアピールできていないのは残念。



そして、シャア専用ゲルググはこの後、「エルメス」が導入される戦闘には必ず同伴することになるが、マグネット・コーティングを施されたガンダムにことごとく苦戦。二度の戦闘では、それぞれ左腕、右腕をガンダムにバツサリと斬り落されており、正直エルメスの援護がなければ、確実に撃破されていたに違いないだろう。

ただし後述するが、ゲルググ自体はもともと高性能を誇る機体である。にもかかわらず劇中の印象としては、シャア専用モビルスーツ3体中（「ザク」「ズゴック」「ゲルググ」）で一番ガンダムにやり込められている。

それはとりもなおさず、アムロがニュータイプに目覚め、シャアの実力を超えたからであり、機体のスペックのせいではない。量産機ともども、ゲルググは不遇の傑作機といえる。

▽ ジオン軍で初めてビーム・ライフルを標準装備したハイスペックモデル

ゲルググは、ザクに代わる次期主力モビルスーツとして開発され、大戦末期にロールアウトした機体だ。量産機に先駆けて、先行生産された25機のゲルググのうちの1機がシャアへ受領されることとなり、彼の専用機として活躍する（ちなみに、残りの24機はジョニー・ライデンが所属する「キマイラ隊」へと配備されている）。

つまり、一般機がまず存在して、それをエースパイロット用のカスタム機としたほかのシャア専用機とは異なり、シャア専用ゲルググは一般機の量産前に先行して受領された機体となる。そのため、実は基本性能的には一般機と差はない。

カスタマイズされていないとはいえ、ゲルググは、もともと「一年戦争」最高の傑作機といわれる機体である。ジェネレータ出力もスラスター推力もガンダムを凌駕する数値をたたきだしており、重量はガンダムより軽量。しかもジオン軍で初めてガンダムと同じくビーム・ライフルを標準装備という、革新的で基本性能の高いハイスペックモデルである。

残念なのは、そんなポテンシャルを劇中ではほぼ発揮できず、アムロのガンダムにいいように翻弄されていたこと。せめて、シャアの操縦技術にあわせてチューンナップされていれば、もつと戦果をあげられたのかもしれないが、残念ながら戦局の悪化は、ジオン軍にそんな余裕さえ与えてくれなかった。

ただ、実はシャア専用ゲルググは、ア・バオア・クーでシャアが「ジオング」に乗り込んだドックへ収容されている。

ガンダムとの戦いで敗れたあとにそこで修理され、ア・バオア・クーでの激戦を終えたシャアは、これに乗って小惑星基地「アクシズ」へと向かう艦隊と合流した、というのが通説となっている。そのため、劇中では描写はないが、「シャアの一年戦争時代最後の乗機」として位置づけられたことは、この不遇の機体にとって少しは救いになったかもしれない。

ビーム・ナギナタを両刃で扱うことは難しいのだが、シャアは見事に使いこなしていた。高い技量ゆえの芸当だ。



時代を超えて活躍した一年戦争の傑作機

MS-14A

ゲルググ



SPEC

「ザク」に代わる次期主力モビルスーツとして
開発された量産機。全高 19・2m。重量 42・
1t。搭乗者は一般兵。



▽一年戦争後に待っていた活躍の場

宇宙要塞「ア・バオア・クー」での激戦中、「ザク」や「リック・ドム」に混じって緑のカラリングをした「量産型ゲルググ」も姿を現す。

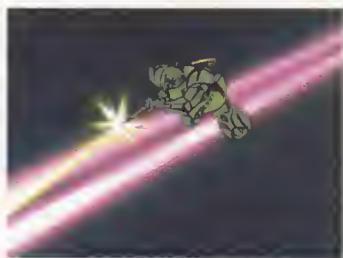
シヤア専用機後の、第42話から登場するという、かなり遅いデビューのゲルググだが、劇中では支援用重戦闘機「Gアーマー」に立ち向かって撃破されるなど、ほとんど活躍していない。この遅れたデビューに反して、ゲルググは「二年戦争」時代で最高の傑作機といわれている。

そのポテンシャルを十分発揮することなく、劇中ではあつという間にいなくなってしまう。しかし、実は『ガンダム』以降の作品で活躍していることが多い。その代表的なものが『機動戦士ガンダムZZ』でのゲルググだ。

まず、アフリカでジウドー・アーシタたちが砂漠で出会った女性、マサインガバが駆る赤いゲルググは、砂漠という特殊な地形を活かした戦法でガンダムチームの3機を翻弄。

レプリカ（修復品）ながら、すばやい動きと巧妙な罠で「百式」や「ガンダム Mk・II」といった次世

本来、ガンダムを超えるスペックをもつ機体だが、劇中ではその実力をほとんど発揮できていない。非常に残念。



代機を窮地へと追いつめていった。

さらに、アフリカ解放戦線でゲリラ活動を続ける「青の部隊」でも、青いゲルググを配備。こちらにもレプリカながらジャイアント・バズやビーム・ナギナタを駆使して、ジュードの「Zガンダム」や、ガデブ・ヤシン率いる部隊と激戦を繰り広げた。

特にエロ・メロエの駆るゲルググは、修理直後にもかかわらず、ビーム・ナギナタで何体もの「ディザート・ザク」を華麗に撃破し、多大な戦果をあげている。

どちらのゲルググも、一年戦争当時の機体というロートルにもかかわらず、新世代機と堂々とわたりあう基本性能の高さを見せている。「本来、ゲルググはこれだけできるんだ」といわんばかりの大活躍だ（ちなみに『機動戦士Zガンダム』などでもゲルググは登場）。

一年戦争よりも後年で大活躍するゲルググは、時代を経てそのポテンシャルが実証された、非常に珍しい機体なのである。

▽ 換装システムにより多様なバリエーション機が登場

ゲルググは、「ザク」に代わる次期主力機として開発された量産モデル。シャア専用機の項でも述べたが、ゲルググは、量産機にもかかわらず、スペック的には「ガンダム」を凌駕し、ビーム・ライフルも標準装備している。

このビーム・ライフルは、本体の開発よりも3ヶ月遅れて完成しており、それが結果的にゲルググの実戦投入を遅らせている。しかし、そこまでこだわったビーム・ライフルを量産機に

装備したところ、ゲルググのアイデンティティのひとつなのである。

また、ゲルググは、必要にあわせてバックパックを換装させるシステムを採用している。バックパックの換装と簡単な改造をするだけで、ゲルググは「高機動型ゲルググ」や「ゲルググ・キャノン」といったバリエーション機に切り替わるのだ。

本来の高い基本性能・武装に加えて、この換装システムによる柔軟性は、ガンダムよりもポテンシャルが高いといえる。総合的に見ても、ゲルググはハイスペックモデルなのだ。

そんなゲルググだが、結局、一年戦争ではあまり大きな戦果をあげることはなかった。というのも、ゲルググが実戦に投入された時期は、すでに一年戦争でジオン軍の劣勢が確実な大戦末期であった。

当然、配備された数は少なく、さらに、熟練パイロットの多くが戦死したことから人員不足で、正規のパイロットではない学徒動員兵が搭乗したため、機体の実力を十分発揮することなく撃破されてしまうことも多かった。

こうしたさまざまな要因がからみあって、ゲルググはジオン軍を勝利に導くことなく、終戦を迎えるのであった。

遅れてきたルーキーのゲルググは、登場自体も少ない。戦艦「グワジン」入港時のカットは、貴重なシーンのひとつ。



稀代の謀略家が愛した白兵戦用高性能機

YMS-15

ギャン



SPEC

ジオン軍の試作モビルスーツで、白兵戦に優れたモビルスーツ。全高 19・9m。重量 52・7t。搭乗者はマ・クベ。



▼ 謀略家のマ・クベが搭乗

ジオン軍の宇宙要塞「ソロモン」は、激しい戦いのすえに陥落した。ソロモン攻略戦を終えた強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、周辺宙域に逃れた残敵の掃討任務にあたっていたが、スペース・コロニー「サイド5」にある「テキサス」コロニーの付近でジオン軍の高速重巡洋艦「チベ」を発見する。

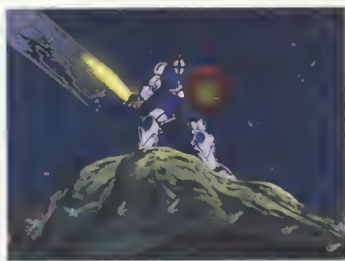
しかし、チベではキシリア・ザビに報いようとホワイトベースを待ち受けるマ・クベが、策略を巡らせていたのであった。

ホワイトベースとの接触を予想通りと語ったマ・クベは、「ガンダム」が現れたらテキサス周辺に誘い込めと部下に命令すると、自ら「ギャン」に搭乗して出撃。一足先にテキサスへ向かい、爆薬や浮遊機雷などを仕掛けてガンダムを待ち受けるのであった。

支援用重戦闘機「Gファイター」と「Gアーマー」形態で出撃したガンダムは、Gファイターと分離してマ・クベ配下の「リック・ドム」と戦いつつ、気づかぬうちにテキサス近辺へと誘い込まれる。

リック・ドムと戦っているガンダムを射程に捕らえ

ガンダムを誘い込み、岩に仕掛けた爆弾でしとめようとするマ・クベだったが、シールドを大破させるに留まった。



たギャンは、シールド・ミサイルで牽制して自らの位置を明かして爆弾を仕掛けた岩石にガンダムを誘い、爆発でしとめようと画策する。

さらに、間一髪で爆発から逃れていたガンダムを見つけると、テキサス内部へと誘い込んで決着をつけようとするのだった。

テキサスへ侵入したガンダムは、マ・クベが仕掛けた爆弾やギャンの浮遊機雷、ハイドポンプなどに引っかけりつつも、ニュータイプ能力が覚醒したパイロットのアムロ・レイが、大掛かりな仕掛けはすべてかわして前進。途中でシャア・アズナブルの「ゲルググ」と交戦したが、マ・クベがシャアを止めたために、大した損傷もなくギャンと対峙した。

ギャンがビーム・サーベルでガンダムに接近戦を挑むと、ゲルググとの戦いでビーム・ライフルを使い過ぎていたガンダムもビーム・サーベルで応戦。白兵戦で決着をつけることになったのであった。

▽得意な白兵戦にもち込むも、技量差で敗れる

ギャンは、「ゲルググ」と同時期に開発された機体で、次期主力モビルスーツの座を争ったとされる。

しかし、ギャンが白兵戦に主眼を置いて開発されたモビルスーツであったため、次期主力機にはより汎用性に優れたゲルググが採用されたという。

ギャンの武装は、ビーム・サーベルとミサイル・シールドのみだが、ビーム・サーベルは貫

通力を重視した出力が高いもので、連邦軍のものより強力であった。また、ミサイル・シールドには、ニードル・ミサイル60基と浮遊機雷であるハイドポンプが25基内蔵されている。射撃武器こそ貧弱だが、試験的にアクチュエーターを増強する流体バルス・アクセラレーターが導入されており、白兵戦能力はかなり高い機体となっている。

なお、劇中ではマ・クベが「ギャンは、私用に開発していただいたモビルスーツだ」と言っていることから、彼自身が開発に関わっていたという可能性もある。

外見は中世の騎士を思わせる形状をしたギャンだったが、パイロットであるマ・クベは謀略家の印象が強い指揮官であり、その戦い方も畏を仕掛けて誘い込むなど、騎士道からはかけ離れたものであった。

しかし、いざガンダムと白兵戦に突入すると、もともと接近戦が得意な機体だったこともあってか、鋭い突きを繰り出してかなり善戦。ギャンのビーム・サーベルの出力は、ガンダムのそれを凌駕しており、とらえることさえできれば十分勝機はあったのである。

しかし、ガンダムが二刀流になった途端に劣勢となり、頭部に若干損傷を与えたものの敗れ去ってしまふ。やはり、マ・クベでは荷が重かったのだろう。

ギャンの能力は高かったが、参謀タイプのマ・クベとパイロットとして戦ってきたアムロでは、技量に差があった。



大火力で地球連邦軍を震えあがらせた巨大モビルアーマー

MA-08

ビグ・ザム



SPEC

ジオン軍の大型モビルアーマー。全高 59・6m。重量 1021・2t。量産が計画されていた。主な搭乗者はドスル・ザビ。



戦局を一変させる脅威の戦闘力

地球連邦軍は、ジオン軍の宇宙要塞「ソロモン」攻略を開始した。第13独立艦隊としてティアンム艦隊に組み込まれた強襲揚陸艦「ホワイトベース」も、先鋒として作戦に参加。そして、連邦軍の新型巨大兵器「ソーラ・システム」は、ソロモンに大打撃を与えることに成功する。ソロモンを指揮するドズル・ザビは、残存兵力を結集して反撃を試みるも、ソロモン陥落は時間の問題と悟る。そして、妻子を脱出させると、自らは巨大モビルアーマー「ビグ・ザム」に乗り込み出撃するのであった。

起動したビグ・ザムは、ソロモン内部に侵入してきた連邦軍の「ジム」と「ボール」を、大火力で一瞬にして撃破してみせる。しかし、あまりに高い火力のために基地の損傷も激しく、また防衛線がすでに崩壊していたことから、ソロモンの防衛はもはや不可能となっていた。

そこでドズルは、残存する艦艇をすべてソロモンから離脱させると、自身のビグ・ザムを敵艦隊に対して特攻させることを決意する。

ビグ・ザムは、主力のティアンム艦隊に突撃を開始。

艦艇のビーム砲が主力である宇宙世紀において、1フィールドを展開したビグ・ザムは半ば無敵ともいえる機体だ。



ティアンム艦隊は砲撃をかけるが、ビーム攻撃を受けつけないビッグ・ザムはそのまま突き進み、機体の周囲に内蔵したメガ粒子砲や機体前部の大型メガ粒子砲で、連邦軍の艦艇を次々と撃沈していく。

ついには、ティアンム提督の旗艦も撃沈させ、その圧倒的な火力で連邦軍兵たちを震えあがらせたのであった。

地球連邦軍本部ジャブロー攻略用に開発される

ビッグ・ザムは、次第に悪化していく戦況を覆すため、地球連邦軍本部「ジャブロー」を攻略しようと開発された機体であった。

開発に際しては、基地そのものを攻撃するための圧倒的な火力と、想定しうる反撃に耐えるための優れた防御力が要求され、驚異的な大火力をもつ試作機が開発された。

前部には艦艇を一撃で沈める大型メガ粒子砲を、機体の周囲には28基ものメガ粒子砲が装備されており、360度全方向への攻撃が可能となっている。

また、脚部に装備されたクローは、射出することで対空防御が可能なほか、近接防御として105ミリ機関砲を装備している。

防御機構としては、Iフィールド・ジェネレーターを搭載しており、中長距離からのビーム攻撃を完全に無効化することが可能となった。

ただし、ミサイルや砲弾など実体のある射撃兵器に対しては、通常通り装甲で耐えるしかな

く、至近距離からのビームにも無力であるため、ある程度の護衛機は必要である。

また、これらの装備を稼働させるために膨大な出力が必要となったため、機体内部には超大型熱核反応炉を4基も搭載することとなり、全高60mにも及ぶ機体をもつ巨大モビルアーマーとなつてしまった。

当初は、本機を量産化して宇宙から降下し、ジャブロー付近の森林を焼き払うと同時に迎撃部隊を殲滅。基地を制圧するプランだったといわれている。

劇中でも、ビグ・ザムの性能は十分に実証されており、ティターンズ提督の第三艦隊に対して甚大な被害を与えていた。しかし、その巨体ゆえに支

援用重戦闘機「Gファイター」の「Gアーマー」形

態はクローで止めたものの、分離した「ガンダム」に

までは対応できず、ビーム・サーベルで破壊されてし

まったのだった。しかしこれは、Gファイター搭乗

のスレッガー・ロウの死と引換えに、あのアムロのガ

ンダムがやっと倒したといわざるをえない。

ドズルの「ビグ・ザムが量産の暁は、連邦なぞあつ

という間に叩いてみせるわ」の言葉通り、量産型ビグ・

ザムがまにあつていれば、おそらく地球連邦軍の勝利

はなかつたであろう。

巨体ゆえに死角も生まれやすく、機体真下からの攻撃に対しては、クローを射出して防衛するしかないようだ。



「ソロモンの亡霊」と恐れられたララァ・スン専用機

MAN-08

エルメス



SPEC

遠隔攻撃が可能なジオン軍のニュータイプ専用モビルアーマー。全長 85・4m。重量 163・7t。搭乗者はララァ・スン。



▽ガンダムと互角の戦いを繰り広げる

宇宙要塞「ソロモン」を攻略した地球連邦軍は、ここをジオン公国へ侵攻するための足がかりとすべく、艦隊を集結させていた。

一方、ジオン軍のシャア・アズナブルは、ニュータイプを研究しているフラナガン機関の少女、ララァ・スンと、ニュータイプ専用モビルアーマー「エルメス」の性能テストを兼ねて、ソロモンに駐留する連邦軍に対し攻撃を仕掛けていた。

エルメスは、はるか遠方から脳波によって遠隔操作された小型のビーム砲台、ビットだけを飛ばして攻撃するため、連邦軍はエルメスの実態がまったく掴めず、「ソロモンの亡霊」と呼んで恐れていた。パイロットであるララァのニュータイプ能力が高かったこともあり、エルメスは連邦軍の戦艦2隻を撃沈したほか、「ジム」やソロモンの砲台などを撃破。初陣にしては、大きな戦果をあげた。

しかし、サイコミュで脳波を受信する際に逆流が生じてパイロットを刺激するため、これを調整した結果遠距離でのビットの操作は不可能となり、以後は敵を

高い機動性のエルメスは、強化されたガンダムと激しい射撃戦を展開。ほぼ互角の戦いを繰り広げていた。





アムロが搭乗するガンダムにこそ通じなかったが、ビットによる攻撃は艦艇をたやすく沈める攻撃力をもっていた。

目視できる距離で運用することになった。

艦艇への攻撃では大きな戦果をあげたエルメスだったが、ニュータイプとして覚醒していたアムロ・レイが搭乗する「ガンダム」との戦いでは、ビットのコントロール自体を読まれて撃ち落とされていた。

しかし、本体に装備したメガ粒子砲を使つての攻撃では、マグネット・コーティングによって運動性が強化されたガンダムを相手に、ほぼ互角の勝負をしており、搭乗者であるララの戦闘経験を考えれば、かなり優秀な働きをしたといえる。

実戦配備された初のニュータイプ専用機

ジオン軍では、早くからキシリア・ザビがニュータイプの存在に興味を示し、フラナガン機関と呼ばれるニュータイプ研究所で、さまざまな研究を行っていた。そのなかで開発されたのが、ニュータイプ用のモビルアーマー「ブラウ・プロ」である。しかし、ブラウ・プロはニュータイプ用といいつつも、通常のパイロットでも操縦できる機体であった。

これよりさらに一歩進め、完全にニュータイプ専用機として開発されたのが、エルメスなのである。武装としては、機体全面に据えられたメガ粒子砲2門と、脳波によって遠隔操作する

小型飛行砲台ビット12基を搭載している。ビットはそれぞれビーム砲を装備し、取り付けられた多数のバーニアによって、極めて高い運動性能を発揮。また、小型のジェネレータを内蔵することで長時間稼働できるほか、モノアイを搭載しており、搭乗者にとらえた映像を伝達している。さらに、射出したビットを回収することも可能で、エルメス自体がビットの運用を基幹とした機体であることがわかるだろう。なお、機体内部には高速で回転するジャイロを搭載しており、この重心を変化させることで機体制御を行うが、操縦はビットと同じくサイコミュシステムで行っている。

劇中では、連邦軍の艦艇やジムなどを遠距離からビットで沈めており、目標に気づかれずに先制攻撃を行えるということもあって、かなり有効な兵器であった。しかし、ビットでの攻撃もガンダムには通用せず、逆にほとんど撃ち落とされてしまった。

エルメスは、メガ粒子砲での攻撃に切り替えてガンダムと戦ったが、高い機動性とララのニュータイプ能力で、ほぼ互角といえる状態だった。

最終的には破壊されてしまったが、それはシャア・アズナブルをかばったためであり、機体性能という点では決してガンダムに劣ってはいなかったのである。

シャアやセイラ・マスが戦闘に割り込んでいなければ、エルメスが沈むことはなかったかもしれない。



難攻不落のジャブローから二度も帰還した英雄機

MSM-77S

シャア専用ズゴック



SPEC

水陸両用モビルスーツ、ズゴックのシャア・アズナブル専用機。全高 18・4m。重量 65・1t。一般機より性能を向上させている。



「赤い彗星」、再び

マッド・アングラー隊が地球連邦軍本部「ジャブロー」の入口を発見したことにより、急遽敢行されることになったジャブロー攻略作戦。この作戦に参加する部隊のなかには、シャア・アズナブルの機体もあった。それこそが、「シャア専用ズゴック」である。

赤い彗星の乗機らしく赤色のズゴックは、「ガウ」攻撃空母より地上へ降下し、先遣隊の「ズック」たちと合流。二面作戦でジャブローの地下へと侵入し、破壊活動を開始する。

そして、ガンダムの前に現れた赤いズゴックは、戦

車「61式戦車」を豪快に放り投げるわ、機動力を活かしてすばやく走り回るわ、の猛攻を見せる。極めつけに、連邦軍の量産型モビルスーツ「ジム」の懐に一気に飛び込んで、アイアン・ネイルでジムの土手っ腹を一撃で串刺して倒してしまふ。打突だけでコクピットを貫くそのパワフルさは、勢い余ってジムの背中まで露出してしまっているアイアン・ネイルが如実に物語っている。肉弾戦でこれだけ力強さと恐怖心を印象づけたモビルスーツが、かつてあっただろうか。

そして、瞬く間に起きた惨劇のあと、時間はゆっくり

ジムを一撃で倒したパワフルな戦闘は、モビルスーツ同士の肉弾戦を経験したシャアならではの芸当だろう。



りと流れる。爆光のなかで不気味に光るモノアイ、ゆらりと不敵に立ちあがるたたずまい。それは、一般機のズゴックでは出し得ない、エースパイロットの風格そのものだった。劇中でも屈指の名シーンとなったこの戦いは、高い操縦技術を持つシヤアの戦場復帰を強くアピールするとともに、ズゴックの真の恐ろしさを証明した。

そして、ガンダムとの待望の激突となるのだが、この戦いは、両者がほんの二、三手合わせたただけで、ウッディ・マルデンのホバークラフト「ファンファン」に邪魔され、メインカメラに直撃を受けたシヤア専用ズゴックは撤退を余儀なくされてしまう。

また、この後、シヤア専用ズゴックは、「アッガイ」とともにジムの工場や強襲揚陸艦「ホワイトベース」を爆破する工作活動を行うためにジャブローに再び潜入する作戦に参加。ただ、このときは作戦が失敗に終わったため、仲間を避難させるために一度だけガンダムに特攻を仕掛けただけで、ともにガンダムと戦うことはなかった。

とはいえ、シヤアの現場復帰を強烈に印象づけたシヤア専用ズゴックの存在は、ホワイトベース隊に戦慄と畏怖を植えつけた。赤い彗星は再び、戦場へと解き放たれたのだ。

▽ 難攻不落のジャブローで奇跡に近い戦果をあげる

シヤアの乗るズゴックは、S型と呼ばれるもので、もともと完成度の高い一般のズゴックの性能を向上させたアップグレードモデルだ。一般機よりもジェネレーターを高出力化して、機動性の強化、装甲の軽量化などを施している。

武装に関しては一般のズゴックと同じで、240ミリロケット砲、メガ粒子砲、アイアン・ネイルを装備。ただしシャアの乗機は、シャアの操縦技術の高さから、圧倒的な戦闘力を発揮している。特に、前述のジムを一撃で倒したアイアン・ネイルによる打突攻撃は、フレキシブル・ペロウズ・リム（水陸両用モビルスーツに共通して採用されている、腕部分の多重関節機構）を最大限に活用したことによるもので、シャアでしか成しえない芸当だといえる。

そんなズゴックS型は、シャアが乗機としていることからわかる通り、もともと指揮官用として生産された。しかし「一年戦争」の末期には、一般兵向けの量産機もS型に移行されている。もちろん、その戦闘力の高さを買われてのことだが、大戦末期といえば主戦場は宇宙。結果的に、ズゴックS型がさほど華々しく活躍できたわけではないようだ。

とはいえ、シャア専用ズゴックにかぎっていえば、二度にわたり、難攻不落といわれた地球連邦軍本部のジャブローに潜入し、無事帰還することに成功している。この奇跡に近い戦果をあげたことは、賞賛に値する。

同機は、「シャア専用ザク」ともども、歴史に名を残す英雄機といっていいただろう。

一般機とはけた違いの動きを見せるシャア専用ズゴック。戦いが長引けば、ガンダムとの勝負は熾烈を極めたはず。



水陸両用機でもっとも高い完成度を誇った傑作機

MSM-07

ズゴック



SPEC

水陸両面で高い機動性を実現した、水陸両用モビルスーツ。全高 18・4m。重量 65・1t。主な搭乗者はカラハ。



海からの第二の刺客

マッド・アングラー隊は、ベルファスト基地に寄港中の強襲揚陸艦「ホワイトベース」にスパイを潜入させるべく、陽動作戦を敢行。この作戦に「ゴッグ」とともに投入されたのが、新たな水陸両用機「ズゴック」だ。

水陸両用モビルスーツの脅威がまだ鮮烈に残るなかで現れた、新たな海からの刺客は、ゴッグとは異なる印象を与える機体だった。

顔がなく、ボディ上面を一周するつり目がちのモノアイレール。逆三角形にシェイプされたボディライン。攻撃的な3本のアイアン・ネイル。機能美を感じる秀逸なデザインをしており、怪獣的フォルムの多い水陸両用機のなかにあって、洗練されている観が強い。

そして、実際の戦いでは、ズゴックはゴッグを上回る善戦ぶりを見せつける。潜水艦「ユーコン」とゴッグの援護射撃により港に上陸したズゴックは、海面と陸上を巧みに移動しながら、腕部メガ粒子砲や頭部ミサイルで「ガンキャノン」に対して猛攻。さらには、懷に飛び込んで、ガンキャノンの両腕をクローで挟み

ハヤトのガンキャノンを手玉に取るズゴック。腕を引きちぎろうとするそのパワーは、まさに脅威。



込んで引きちぎろうとしたり、「ガンタンク」に見事な低空の体当たりを食らわせたり、「ガンダム」を海中に引きずり込んで怒濤のミサイル攻撃をしたりと、圧倒的なパワーと機動力を披露するのだった。たった1機でRXシリーズ3機にそれぞれ有効な攻撃をしたことは、一定の評価をしていいだろう。

こうして、見事な暴れっぷりを披露したズゴックは、劇中では主にマッド・アングラー隊の作戦のなかで投入される。大西洋でのホワイトベース追撃戦では、「グラブロ」に同伴して数機が出撃し、海中からホワイトベースを攻撃するという地の利を生かした戦法を展開した。

特に、水面から水しぶきをあげ、それを自然の盾としながら射撃を行う戦法は、水陸両用機の恐ろしさを見事に表したものだといえる。

こうして、海を舞台とする戦闘で実力を遺憾なく発揮したズゴックは、ゴッグをパワーファイタータイプとするなら、テクニカルタイプといったところだろう。

▽水陸両用機のハイスタンダードモデル

ズゴックは、ゴッグの次に開発がはじまった水陸両用モビルスーツで、後発で開発がはじまった「アッガイ」よりも遅れて完成したものの、最終設計においてゴッグの実戦データをもとに改良されている。そのため、ズゴックは水中陸上の両面で高い機動性を実現し、水陸両用モビルスーツのなかでもっともバランスが取れた機体となった。一説には、ズゴックの陸上での機動性は、陸戦用「ザク」と同程度だったといわれている。

武装は水陸両用モビルスーツ共通ですべて内蔵武器のみとなっているが、実弾武器、ビーム兵器、近接武器がバランスよく装備されている。

頭部には、対空能力にも優れた240ミリミサイル砲。両腕にはゴッグのものよりも収束率が高く、高い自由度と貫通力を誇る内蔵型のメガ粒子砲。格闘用には、多重関節機構のフレキシブル・ペロウズ・リムを採用した、両腕の先端にある3本の鋭いアイアン・ネイル。いずれも攻撃力的に申し分ない優秀な武器を備えている。水陸両用機のなかでは、一番理想的な武器を備えているといっていだろう。

ちなみに、ズゴックは「アッガイ」と同様に、手が爪状のため、「ザク」のように搭乗者を手に乗せてコクピットから地上に降ろすことができない。そのため、コクピットのハッチはエレベーター式になっている。

ところで、これだけ完成度の高いズゴックは、結局「一年戦争」時代にバリエーション機と後継機が数機登場したのみで、モデルとして発展しなかった。

これはもちろん、水陸両用機自体が時代のニーズに合わなくなったことがその原因だ。しかし、本機の完成度を鑑みると、時代の波がそれをかき消してしまったことは残念でならない。

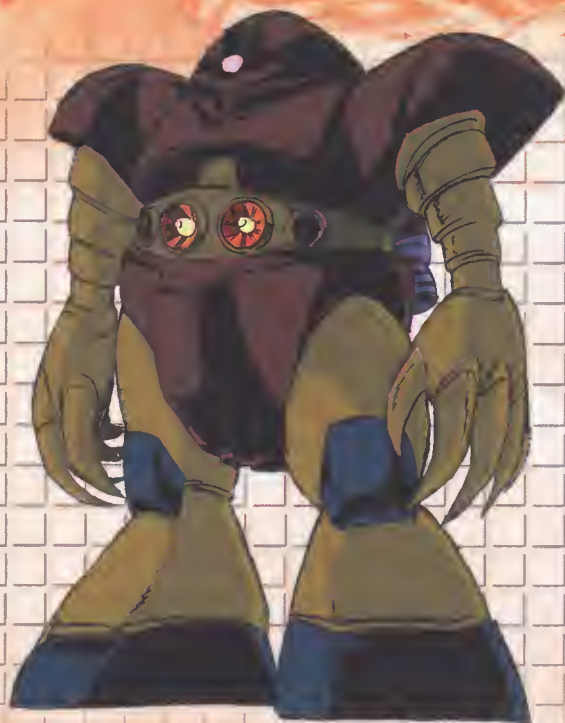
水しぶきをあげながら水面にジャンプし、その中から姿を現してビーム射撃。水陸両用機の真骨頂ともいえる攻撃だ。



ガンダムを凌ぐパワーをもった水陸両用のエポックモデル

MSM-03

ゴツグ



SPEC

ジオン軍初の本格的な水陸両用モビルスーツ。
全高 18・3m。重量 82・4t。主な搭乗者は
コーカ・ラサ。



海を舞台に鮮烈デビュー

オデッサ作戦後、ベルファスト基地で修理を受けていた強襲揚陸艦「ホワイトベース」。前線に復帰したシヤア・アズナブルが配属されたマッド・アングラー隊は、これをチャンスとして奇襲攻撃を仕掛ける。その作戦の先兵として投入されたのが、水陸両用モビルスーツ「ゴッグ」である。

物語も中盤へとさしかかると、次々にジオン軍の新兵器が登場するが、それまでマルチに活躍していた「ザク」に比べると、運用される地形や戦局に応じて性能が特化されたモデルが増えている。

そんななかでも、この「水陸両用モビルスーツ」はもともと局地戦向けといえる存在で、ジオン軍の兵器中ではかなり特異な部類といえる。

それまでモビルスーツが苦手としていた水中での活動をメインとし、さらに陸上でも運用可能な水陸両用モデル。その記念すべき第一号として、最初に登場したゴッグは、その形状が今までのものと比べると明らかに異質であった。

流線型の太いフォルムにイカリ肩、逆矢印型の顔、

ハイパー・ハンマーさえ軽くあしらうパワー。肉弾戦だけなら、ゴッグはガンダムを遥かに凌ぐ性能だといえる。



鋭いツメを有する巨大な両手。兵器的な印象が強いザクに比べると、ゴックはまるで特撮映画の怪獣である。しかし、そのフォルムが伊達でないことは、劇中の活躍を見れば明らかだ。

機雷にビクともすることなく、海中を不気味に潜航し、巨大な爪を立てながら大量の水しぶきをあげて陸上へと上陸。

そして、それまで艦艇だけの武器と思われていたメガ粒子砲をボディから発射して、ベルファスト基地周辺を破壊しまくるわ、「ガンダム」のバルカンを両手で簡単に受け止めるわで、初登場にして圧倒的なパワーと頑丈さを見せつけた。

しかもガンダムの新兵器、ハイパー・ハンマー（強化版ガンダム・ハンマー）をいとも簡単に両手でキャッチするという荒技まで披露する。

そして、さらにここからゴックの真骨頂。ガンダムを水中へと誘い出すと、それまでの鈍重な動きとは打って変わり、まるで獲物を狩らんとするサメのようにすばやく動き回り、ガンダムをタックルや爪で弄ぶ。まるで「水陸両用モビルスーツとはこういうものだ！」といわんばかりに活躍し、鮮烈なデビューを飾る。

▽ オプションなどいらぬ、頼れるのは口のボディのみ！

水中でも運用できるモビルスーツの開発は、「一年戦争」開戦前からジオン公国のなかで進められていたらしい。地球の表面積の約7割を占める海を制することこそ、地球侵攻の要と考えられていたのだろう。

それが、ジオン軍の地球侵攻が本格化したことで実験も実施され、実用機もようやく完成。そして初の量産機として採用されたのがこのゴッグである。

ゴッグの武器は、腹部から発射する魚雷とメガ粒子砲、機雷を無力化するフリージーヤードなどがあるが、なかでも巨大な爪（アイアン・ネイル）は攻撃力がズバ抜けている。というのも、水陸両用モビルスーツはその運用方法から、武器を携行することなく敵地に潜入することになるため、内蔵武器や肉弾戦での戦い方を余儀なくされてしまう。しかし、内蔵ビーム兵器は、当時の技術力ではどうしても出力不足で、メイン武器とはいいがたかった。

そのため、アイアン・ネイルは対モビルスーツ戦の要となることから、ゴッグの手もあれだけ巨大なものとなったのだ。しかし、そんなゴッグも実戦を重ねるうちに、陸上での活動時間が短いことや、対空攻撃ができないなどの弱点が露呈し、急速に後発の「ズゴック」に水陸両用モビルスーツの主力量産機の座を奪われることになる。

しかし、水陸両用モビルスーツとして先陣を切り、肉弾系の戦闘スタイルでガンダムと対等に渡りあったゴッグは、一定の評価に値する。ザクとは異なる系統の、偉大なるエポックモデルなのである。

アイアン・ネイルによる破壊力は拔群。強固なルナ・チタニウム合金を装甲に使うガンダムにさえ、穴を開ける。



姿や動きがユーモラスな廉価版水陸両用機

MSM-04

アツガイ



SPEC:

コストを抑えた、廉価版水陸両用モビルスーツ。
全高 19・2m。重量 91・6t。主な搭乗者は
アカハナ。



愛らしいフォルムの人気者

地球連邦軍本部「ジャブロー」攻略作戦に失敗したシャア・アズナブルは、工作部隊とともにジャブローへの再潜入を行う。このとき、工作部隊が乗機としていたのが「アッガイ」である。監視用のトーチカを手早く破壊したその機体は、なんともユーモラスな姿をしていた。ずんぐりむっくりなボディ。やけに大きな頭部は胴体に固定され、その先端にはタコ型の口。そして「ズゴック」や「ゴッグ」よりも短い手足。全体的に、今まで登場した水陸両用モビルスーツのなかでもっとも愛らしい印象を受ける。

「シャア専用ズゴック」に率いられたアッガイは、見事ジャブロー内部への潜入に成功。そして二班に分かれた工作部隊のうち、待機組のアッガイは、工作部隊の作戦失敗を受けて陽動攻撃を開始する。ロケット砲などで周辺施設などを破壊する間に、無事工作部隊は乗機に戻り、直ちに撤退を開始した。

しかしこのあと、アッガイたちには悲劇が待ち構えていた。出撃した「ガンダム」が追撃してきたのだ。背中から、なす術もなくビーム・ライフルやビーム・サーベルで撃破されていく4機のアッガイ……。戦果と

手早くトーチカを撃破。子供が玩具で遊んでいるかのようなその姿は、愛くるしさを感じさせる。



しては、ジャブロー潜入に成功するも、作戦にも撤退にも失敗しただけとなった。

そのやられっぷりも、背後からの袈裟斬りや脳天からの唐竹割りなど、見事に悲惨なものばかり。これだけ情けなさを感じる機体というのとはかにない。まさに悲劇の機体といえるだろう。ちなみに『機動戦士ガンダムZZ』やOVA『機動戦士ガンダム第08MS小隊』にもアツガイは登場する。前者はハマーン・カーンが乗り込み、ジュドー・アーシタの「ズゴック」と交戦、後者は「陸戦型ガンダム」の頭部をふつとばすという戦果をあげている。どちらも『ガンダム』に比べると、遥かに活躍している。

すでに「萌え」の概念をもち込んでいたモビルスーツ

アツガイは、コストがかかりすぎる水陸両用モビルスーツの廉価版を模索して開発されたものだ。「ズゴック」よりもあとに開発がはじまったにもかかわらず、「ザク」から流用した部品が多く、ズゴックよりも完成は早かった。

こうして完成したアツガイは、モビルスーツとしては初めて複座式コクピットを採用し、しかもザクと操縦感覚が似ていたため、水陸両用機の操縦訓練機として使用されることも多かった。また、ザクのジェネレーターを流用して水冷式に改造したため、結果的に廃熱度が低くなっている。これによって、熱センサーに対してはステルス性が高くなり、偵察任務などにも使用された。

武装としては、頭部に105ミリバルカン砲、右腕にはアイアン・ネイル、左腕には6連

装ロケットランチャー、両腕の中央にはそれぞれ機関砲を装備。

また、アッガイの多重関節機構フレキシブル・ペロウズ・リムは、ほかの水陸両用モデルと比べるとかなりの伸縮性がある。ジャブロー内部で天井にアイアン・ネイルを突き立てた移動法は、その性能を最大限にいかしたものだといえる。

ところがアッガイは、陸上での運動性は高いものの、水陸両用機としては装甲が薄く、火力も低かった。しかも見た目に反して実は、「ゴッグ」より全長が高く、重量も重い。ガンダムと比べてもかなり大きいのに、戦闘力が低くては、的のように撃破されたのもうなずける。

しかし、アッガイのアイデンティティはそこではな

い。思い返してほしい。四つん這いでトーチカを破壊する姿や、岩陰に体育座りで潜む姿（正確には劇中ではなくイラストだが）、右腕を伸ばしてまるで猿のよう移動する姿など、ユーモラスで、かわいらしささえ覚えはしないだろうか。

そのうえ、見事なやられっぷりも加わり、アッガイには今でいうドジっ子的な「萌え」に通じるものがあるのだ。

戦果は残せなかったが、逆に残せなかったからこそ、アッガイの人気は不動なのかもしれない。

多重関節機構の伸縮性は非常に高い。腕を使って体を振り子のようにして逃げる姿は、まるで猿だ。



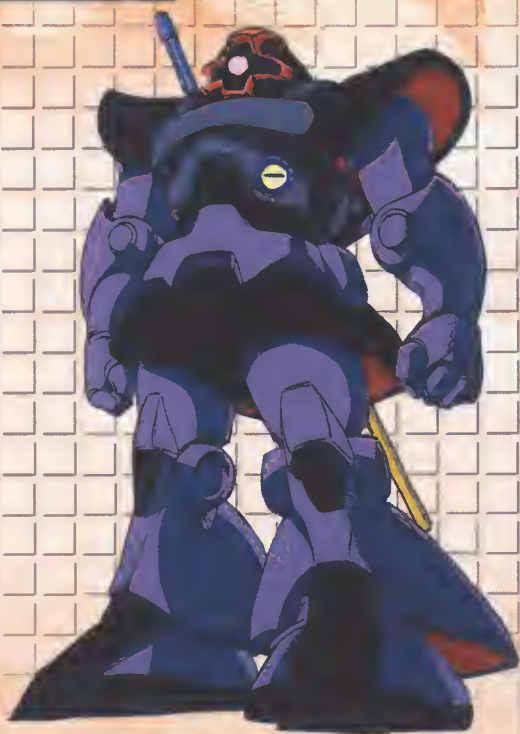


「ドム」との違いはスカートや脚部のロケット。劇場版「めぐりあい宇宙編」でのみ、認識することができる。

MS-09R

リック・ドム

ゲルググの穴を埋めるべく宇宙用に改修されたドム



SPEC

「ドム」のホバーユニットを熱核ロケットに換装して、宇宙用にした機体。全高 18・6m。
重量 62・6t。主な搭乗者はバタシャム。



12 機全滅の汚名とともに…

強襲揚陸艦「ホワイトベース」を追うシャア・アズナブルは、機動巡洋艦「ザンジバル」に乗り込み、「ビグロ」に追撃戦を行わせる。それに同伴したのが「リック・ドム」だ。

「ドム」と同様にジャイアント・バズを駆使して戦ったものの、支援用重戦闘機「Gファイター」のメガ粒子砲で撃沈。それがデビューであった。

これ以降、リック・ドムは「ザク」同様、やられ役街道を突き進むことになる。その最たるものが、コンスコン艦隊のリック・ドムだろう。スペースコロニー「サイド6」の「バルダ」コロニーから出港するホワイトベースを襲うも、ガンダムたちに次々と撃墜され、終わってみれば12機が3分未満で全滅という悲惨な結末となった。アムロ・レイのニュータイプ能力のためではあるが、これでやられ役のイメージが決定的となる。

もともとリック・ドムは、開発が遅れた「ゲルググ」の穴を埋めるべく、ドムを宇宙用に改修した機体である。武装や機体は基本的に変わず、ホバーユニットをロケットに換装し、脚部やスカートに装備している。そんな急場しのぎの機体にもかかわらず、生産性も操縦性も優れており、大戦後期には多数が配備された。

ただし劇中では、ジオンの劣勢に呼応するかのように、見せ場なく倒れるシーンが激増。最終回で宇宙要塞「ア・バオア・クー」に不時着したホワイトベースの後部エンジンをジャイアント・バズで破壊し、引導を渡したことが、せめてもの救いである。

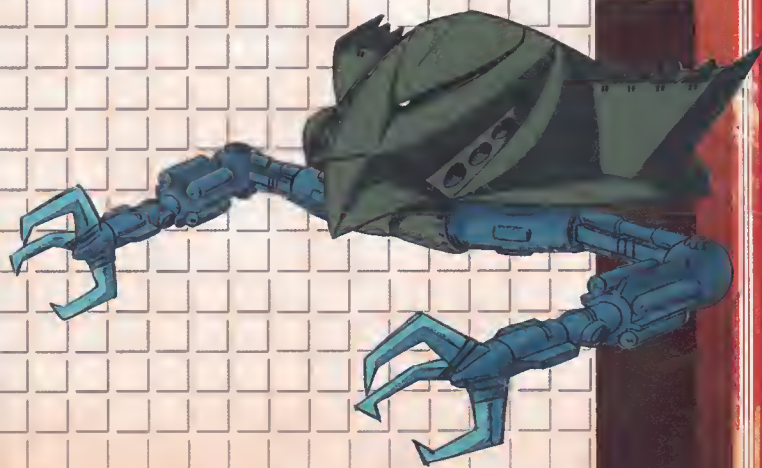


モビルスーツを圧倒するスピードが持ち味。ただし、上げた加速の分だけ、武器の命中度が落ちしまうのが弱点だ。

ビグロ

MA-05

アムロ・レイを失神させた宇宙のスピードマスター



SPEC

宇宙空間での高速戦闘を目的として開発された、宇宙戦用モビルアーマー。全長 45・5m。重量 125・5t。搭乗者はトクワン。



高加速を誇る一撃離脱ファイター

強襲揚陸艦「ホワイトベース」を追撃する機動巡洋艦「ザンジバル」は、実戦テスト中のモビルアーマーを出撃させる。それが「ビグロ」だ。高速戦闘に優れたこの機体は、そのスピードをいかした戦法でガンダムを翻弄。しかも、偶然とはいえ巨大なクローでガンダムを引っ掛け、アムロ・レイをその加速度によるGで失神させている。しかし、あと一步のところまで追いつめながら、ガンダムの反撃を受け撃沈してしまう。

ビグロは、宇宙空間における高速戦闘をコンセプトに開発されたモビルアーマーで、宇宙戦用モビルアーマーとしては第1号となる。実用テストが終了したのち、14機が生産された。

武装としては、口ばしのような機首にはメガ粒子砲を、ボディ上側面にはミサイル・ランチャー、下部前方には接近戦用のクローを装備。主に対艦攻撃作戦において、一撃離脱戦法を駆使して活躍したという。

ちなみに開発したのは、「ズゴッグ」を開発したMIP社で、「グラブロ」はこのビグロをベースに開発されている。また、バリエーション機としては「ビグロ・マイヤー」や「ビグ・ラング」などのほか、発展機として「ヴァル・ヴァロ」という機体も誕生している。ビグロは意外にも、モデルとしてある程度枝葉が分かれているのである。

そういう意味ではスピードマスターというファイトスタイルは、モビルアーマーとしては「エルメス」に次ぐ成功例だったといえるのかもしれない。

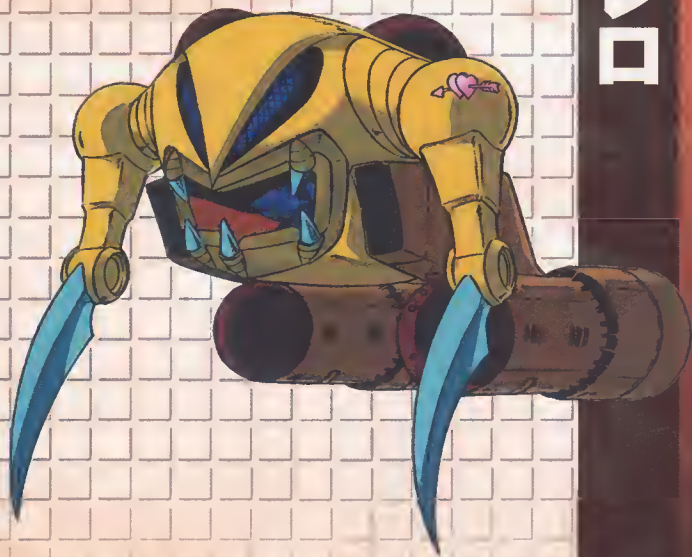


ビーム兵器を長時間連射できることは、ザクレロの長所だ。ガンタンクを手玉にとれたのも、そのおかげである。

ザクレロ

MA-04X

上司の仇討ちに現れた、異形のモビルアーマー



SPEC

高速、高火力を実現するために試作された宇宙戦用モビルアーマー。全長、重量ともに不明。搭乗者はデミトリー。



▽廃棄処分決定を乗り超えて戦場で散る

「ガンダム」との戦闘で、「ビグロ」とトクワンを失った機動巡洋艦「ザンジバル」から、強襲揚陸艦「ホワイトベース」に向けて1機のモビルアーマーが出撃する。

上司の仇討ちにと、無断で出撃したデミトリイの乗る「ザクレロ」は、拡散ビーム砲やヒートナタを駆使し、「ガンタンク」を翻弄。さらには、支援用重戦闘機「Gファイター」のBパーツと合体したガンダムを相手に、関節に傷を与えるなど善戦するが、コンピュータで簡単に予測できるという致命的な運動性の弱点をつかれて四散した。

ザクレロはビグロよりも先に開発がはじまった宇宙戦闘用モビルアーマーだ。しかし、度重なる設計変更とメーカーの不手際から大幅に完成が遅れたうえに、メインエンジンとバーニアの推力不足で加速度や運動性は劣悪という結果に終わっている。そのため、テストを終えても正式採用されず廃棄が決まった悲劇の機体なのである。なお、武器としては、拡散ビーム砲やヒート・ナタ、ミサイルランチャーなどを装備。そこそこ攻撃力はあったようだ。

また、ザクレロを語るうえで欠かせないのが、特徴的な顔だ。つり目がちな複眼式のメインカメラに、拡散ビーム砲を発射する大きな口は、ユーモラスさを感じさせる。一応あの顔は威嚇目的だったのではといわれているが、真偽のほどは定かではない。

そんなザクレロは、結局大した戦果もないまま宇宙の塵となった。しかし、廃棄が決まっていた本機が実戦で戦えたことは、本望に違いない。

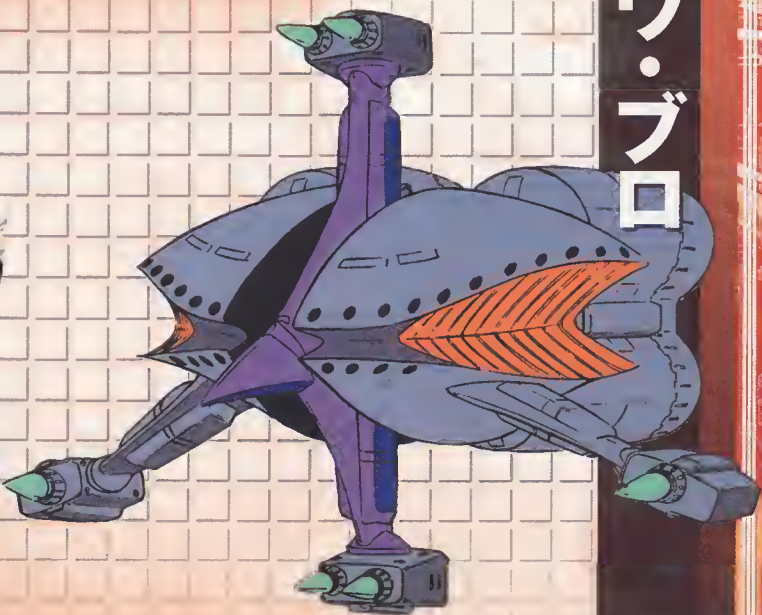


敵にとっては、思いがけない方向からメガ粒子砲を放たれる。後年にスタンダードとなる戦闘スタイルを生んだ。

ブラウ・ブロ

MAX-03

ニュータイプ専用機の先駆けとなった開拓者



SPEC

ニュータイプ専用モビルアーマーの第1号機。
全長 62・4m。重量 1735・3t。主な搭乗者
はシャリア・ブル。



ニュータイプ専用機の礎となる

支援用重戦闘機「Gファイター」を「Gアーマー」形態にして偵察中、偶然遭遇した謎の機体が「ブラウ・プロ」だ。しかし、このときのブラウ・プロは、機能テスト中に故障を起こしており、その性能を十分発揮することなく、Gファイターと分離した「ガンダム」の前にあえなく撤退する。その後、同機にはシャリア・プルが乗り込み、再びガンダムたちと交戦。今度は巧みなオールレンジ攻撃により、ガンダムをオーバーヒートさせるという戦果をあげる。あの無敵を誇ったガンダムを限界まで追いつめたことは、ニュータイプ専用機の有効性を最高の形で実証したといえよう。

ブラウ・プロは、ニュータイプ専用モビルアーマーの第1号機で、史上初めてサイコミュを搭載した機体である。機体は3つのユニットに分離し、それぞれ独立して機動することもできるため、機体の損害を最小限に抑えたり、パイロットの保護を優先することが可能となっている。また、本機最大の特徴は、有線式サイコミュシステムによるオールレンジ攻撃で、あらゆる方向からメガ粒子砲を繰り出すことができる。このニュータイプ専用機ならではの攻撃スタイルは、のちのサイコミュ搭載機の常道となっている。

結局2機ともガンダムに敗れたが、ブラウ・プロの実戦で収集されたデータは、「エルメス」や「ジオング」にフィードバックされた。ブラウ・プロは、ニュータイプ専用機の偉大な開拓者といえるだろう。



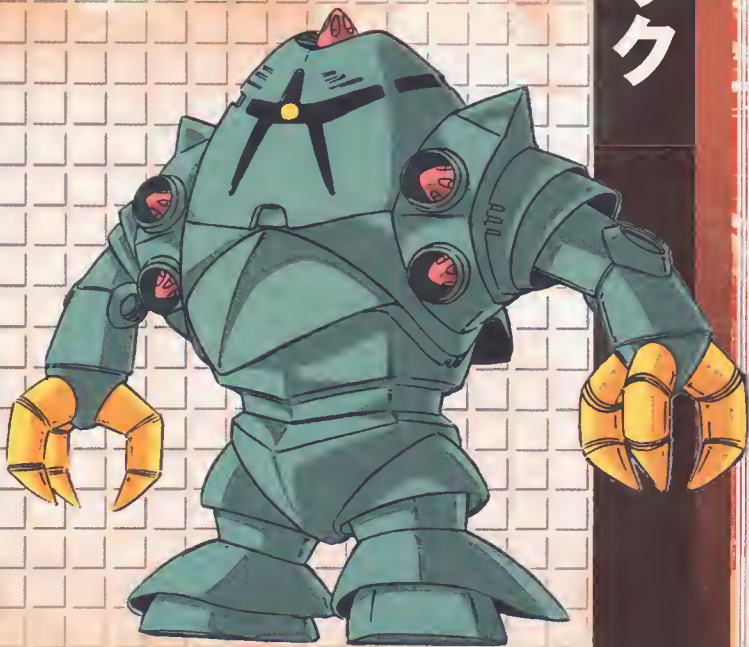


コンセプトからすれば、モビルスーツと直接戦うのではなく、遠距離からの支援攻撃で真価を発揮する機体だった。

ゾック

MSM-10

遠距離からの支援攻撃を得意とする水陸両用機



SPEC

ジオン軍の水陸両用モビルスーツ。全高 23・9m。重量 167・6t。移動砲台的な機体で、主な搭乗者はボラスキニフ。



▽前後対称というユニークな形状

南米の地球連邦軍本部「ジャブロー」へ到着した強襲揚陸艦「ホワイトベース」。しかし、密かにこれを尾行していたジオン軍のシャア・アズナブルは、基地の入口を突き止めると大規模な攻撃作戦を展開する。このとき、アマゾン川からの侵入部隊として新たに登場したのが「ゾック」である。

モビルアーマーへの過渡期に開発されたゾックは、メガ粒子砲を多数装備した火力重視のモビルスーツだ。ずんぐりした体型や大きく大の字状に入っている頭部カメラ（モノアイ）の溝や、前後にせり出した整流殻（フェアリングシエル）などがかなり印象的だが、最大の特徴は前後どちらから見ても、同じ形状をしているという点である。

ゾックの武装は、両肩の前後に4門ずつ計8門搭載されたメガ粒子砲と、頭部のフォノンメーザー砲のみだが、「ザク」の4倍近い出力のジェネレーターを搭載しており、連射することもある。水中では、フェアリングシエルの調整によって機体周辺の抵抗を調節することで、水陸両用モビルスーツのなかで最高の整流効果を持った機体となった。

劇中では、2機の「ゴッグ」を引き連れてアマゾン川をすいすいと進んで基地へ侵入。外壁と周辺の連邦軍戦車を前面両肩のメガ粒子砲で破壊して、火力の高さを見せていたが、「ガンダム」との戦いでは自慢のメガ粒子砲もあっさりジャンプでかわされ、コクピットを撃ち抜かれてしまった。



ガンダムをクローでとらえて足を破壊したが、水中での優位性から油断し、隙を突かれてヨグビッドを破壊された。

グラブロ

MAM-07

ジオン軍初の水中用モビルアーマー



SPEC

「ビグロ」をベースに開発された水中用モビルアーマー。全長 40・2m。重量 324・1t。搭乗者はフラナガン・ブーン。



▼水中専用の威力をまざまざと見せつける

北アイルランドのベルファスト基地で補給を終えた強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、南米へ向けて発進した。

シヤア・アズナブルの潜水艦部隊はこれをとらえていたが、北アフリカの視察があるため追うことができない。フラナガン・ブーンは、モビルアーマーによる追撃を進言し、シヤアから「グラブロ」を借り受けると、2機の「ズゴック」とともにホワイトベースを追った。

ジオン軍では、特定の運用に限定したモビルアーマーの開発が、複数同時に進められていた。グラブロは、水中用モビルスーツとともに開発が進められていたモビルアーマーで、先行開発されていた「ビグロ」をベースとしたことから、わずかな期間で完成した。推進力は、水陸両用モビルスーツと同じ熱核水流エンジンを使用。これを6基搭載し、高速移動を可能としている。武装には、7連装魚雷発射管と対空ミサイルランチャーを2門ずつ搭載。大型クローも装備している。劇中では、対空ミサイルでホワイトベースや支援用重戦闘機「Gファイター」を損傷させており、かなり高い命中精度を発揮していた。

ガンダムとの戦いでは、左腕でガンダムの右足をとらえており、水中での機動力はかなり高いようだ。また、抵抗力の高い水中でガンダムを振り回すほどのパワーがあり、右足を破壊して追い込んでいる。

しかし、僚機が破壊されたことに気を取られ、ビーム・サーベルで倒されてしまった。

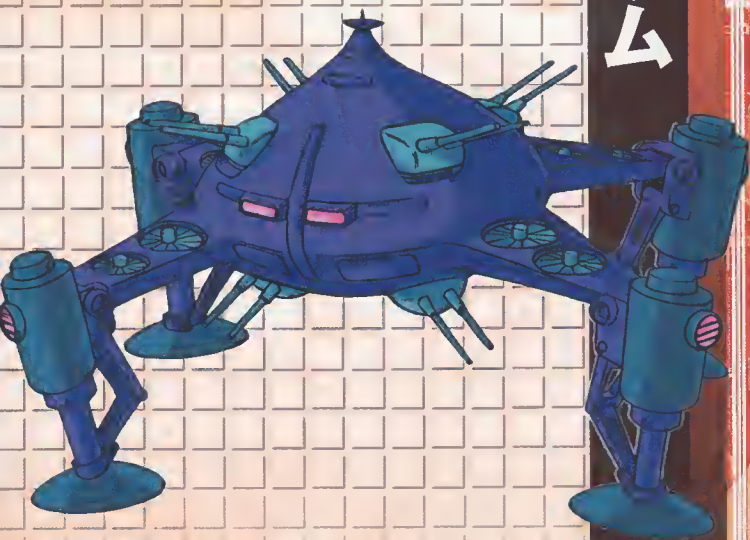


ガンダムの驚異的な性能の前に敗れたアッザムだが、データはのちに登場するモビルアーマーにいかされた。

アッザム

MAX-03

必殺技でガンダムを苦しめたモビルアーマーの原型



SPEC

モビルアーマーの原型となったジオン軍の試作機。全高 24・0m。重量 300・0t。主な搭乗者はマ・クベ、キシリア・ザビ。



必殺のアッザム・リーダーのはずだったが……

強襲揚陸艦「ホワイトベース」艦長、ブライト・ノアと衝突したアムロ・レイは、「ガンダム」を持ち出し脱走。そして、自身の力をクルーに認めさせようと、オデッサ方面軍指揮官のマ・クベが管理していた鉱山へ、単独で攻撃を仕掛けた。マ・クベは、基地を訪れていたキシリア・ザビとともに、モビルアーマーのテストを兼ねて「アッザム」で出撃するのだった。

アッザムは、もともと月面に配備されていた移動式対地攻撃兵器「G87ルナタンク」を元に、地上で運用可能な移動砲台として開発された機体である。内部には、空中を浮遊するためのミノフスキークラフトと大出力のジェネレーター4基を搭載し、さらにホバーエンジンを装備して、空中での活動を補助している。

武装としては、2連装メガ粒子砲8門を搭載。円盤状の機体上面と下面に1対ずつ、計4箇所 に装備しているほか、電磁波と高熱によって敵を破壊するアッザム・リーダーを、機体底部から放出することができる。このアッザム・リーダーは、まず触媒となる細かい粒子を目標周辺に降りかけ、次に投下する磁場発生装置からワイヤーを艦状に降ろして目標の動きを封じ、最後に高周波を当てるという仕組みである。

劇中では、ガンダムを相手にアッザム・リーダーを仕掛け、4000度にもなる高温と高周波で攻撃したが、「ザク」ならとうに破壊されている状況になってもガンダムが正常に動けたため、とどめを刺しそこない逆に撃破されてしまった。



ガンダムにシヨルタータックルを仕掛ける、ガデムの旧ザク。「素人め、間合いが遠いわ」と、攻撃をヒットさせた。



旧ザク

MS-05

モビルスーツの原点となったジオン軍初の量産機

SPEC

世界初の軍用モビルスーツ。全高 17・5m。
重量 50・3t。シンプルな形をしている。主な
搭乗者はガデム。



開戦当初は、700機以上投入された

スペース・コロニー「サイド7」を脱出した強襲揚陸艦「ホワイトベース」に対し、ジオン軍のシャア・アズナブルは、さらなる追撃をかけていた。

しかし、シャアの部隊はサイド7で2機のザクを失ったほか、もともと別の作戦からの帰還途中だったこともあり、ミサイルをはじめとする弾薬が底をついていた。

そのため、シャアが指揮する軽巡洋艦「ファルメル」は、ガデムの補給艦「パプア」から補給を受けることになる。第3話となるこのエピソードで、補給中のファルメルに対してホワイトベース隊が「ガンダム」と小型戦闘機「コア・ファイター」、「ガンタンク」で攻勢をかけ、パプアを撃沈する。補給物資をファルメルへ届けたものの自分の艦を沈められたガデムは、ガンダムに対し一矢報いようと「旧ザク」で立ち向かうのであった。

旧ザクは、地球連邦軍との戦いに向けてジオン軍が初めて軍事用に開発したモビルスーツで、この機体を用いて各種のテストや戦術研究を行い、兵器としてのモビルスーツ体系を確立した。

武装に105ミリのザク・マシンガンやザク・バズーカ、ヒート・ホークを装備し、開戦当初では700機以上が投入された。しかし、出力不足などから十分に性能が発揮できず、より強化された「ザク」の開発に移行。以後は第二線での任務に投入された。

そんな時代遅れの旧ザクで、ガデムはガンダムにシヨルダータックルをヒットさせた。モビルスーツ戦が、性能だけではないという証といえるだろう。

兵器として誕生した モビルスーツの黎明期

地球連邦政府に独立戦争をしかけたジオン公国は、モビルスーツとミノフスキー粒子のおかげで緒戦を制することができた。ミノフスキー粒子を散布して地球連邦軍のレーダー網を封じ、モビルスーツによる接近戦で戦艦を撃破していったのだ。汎用性の高いモビルスーツは、確かに画期的な兵器ではあったが、単純な機動力でいえば戦闘機のほうが上といえる。レーダーや赤外線を妨害できるミノフスキー粒子がなければただの大きいであり、そこまでの脅威とはならなかっただろう。

さて、新兵器は敵に真似されるのが常で、地球連邦軍もモビルスーツを開発した。対モビルスーツ戦を想定した「グフ」を「ガンダム」の登場まもなく投入したことから、連邦軍がモビルスーツを開発することは、ジオンも予想していたと思われる。しかし、それまで「ザク」と戦ってきた連邦軍とは異なり、自国でモビルスーツを開発したジオン軍には対モビルスーツ戦のノウハウがあまりなかった。もちろん、ザク同士の模擬戦などでデータ収集などを行ったであろうが、ザクをはるかに超えた、それこそエースパイロットですら驚愕する性能をもった、ガンダムのようなモビルスーツの出現は、まったく予想していなかったに違いない。

また、戦場が宇宙から地球上に移ったため、ジオン軍もスペース・コロニーとはまったくことなる地上環境に対応せねばならず、本来汎用性が売りだ

ったモビルスーツも、使用する環境に合わせたさまざまなタイプを開発する必要がでてきたのだ。

ジオン軍では多種多様なモビルスーツやモビルアーマーが誕生することになったが、これはモビルスーツを先に実用化したジオンでさえ、まだまだ手探りの状態だったためといえる。その反面、地球連邦軍が開発した機体は「ガンダム」、「ガンキャノン」、「ガンタンク」と「ジム」、「ボール」のわずか5種類である。ボールはともかく、地球という多様な環境をかかえる連邦軍のモビルスーツは、それだけ汎用性が高くジオン軍のものより優れていたといえる。この点については、ガンダムが宇宙・地上・水中と、どこでも運用できたこと、子供が操縦するガンダムが、訓練を積んだ兵士が操縦するザクを撃破したことでも証明できる。つまり、連邦軍がガンダムの開発を成功させた時点で、ジオン軍は新兵器モビルスーツの存在というアドバンテージを、すでに失ってしまったのだ。

歴史が示すように、戦争は国力が高いほうが圧倒的に有利である。新兵器のアドバンテージを失った時点で、国力で劣るジオン公国の敗北は決していたのだ。「二年戦争」は終了したが、ミノフスキー粒子の存在によりモビルスーツは戦場の主役であり続け、ジオン軍の技術も地球連邦軍の手によって受け継がれていった。

第2章

機動戦士
Zガンダム

ゼーダ

「一年戦争」終結から7年。地球連邦軍内部ではジオン公国の残党狩りを名目に、エリート特殊部隊「ティターンズ」が設立された。

しかし、軍内部での発言力を徐々に強めていったティターンズはやがて専横を振るうようになる。この事態を憂慮した人々は、反地球連邦組織である「エウーゴ」を結成。ついに両組織は本格的な戦闘状態に突入した。

この戦いでは、ティターンズ、エウーゴともに、アナハイム・エレクトロニクス社製のモビルスーツを使用したほか、木星船団「ジュピトリス」や、ジオン残党の小惑星基地「アクシズ」軍のモビルスーツが参戦した。

機体の高性能化が要求されるにともない、可変機が多さが目立つようになったのも、「グリプス戦役」の大きな特徴である。

■ ティターンズ

ジオン残党狩りのため、地球連邦軍内で設立されたエリート部隊。構成員の大半が地球の出身で、スペースノイド（宇宙移民者）に対し特権意識を持っている。

■ エウーゴ

スペースノイド（宇宙移民者）たちの相互援助を目的とする組織だったが、一部の急進派が軍事企業と手を結んだ結果、軍事組織的な色合いが強くなった。

■ アクシズ

火星と木星の間にあるアステロイドベルトに位置する、ジオン公国が建設した小惑星基地。移動も可能となっている。

■ 強化人間

サイコミュを搭載したモビルスーツやモビルアーマーの操縦者として、人工的につくられたニュータイプ。投棄や心理操作によって能力を引き出しているため、情緒不安定な者が多い。

■ ムーバブル・フレーム

機体を支える骨格を内包したフレーム構造のこと。このフレームによって機体の可動部を増やすことが可能となり、可変機構の簡略化が進んだ結果、続々と可変機が開発されることになった。

■ ガンダリウムγ

アクシズのジオン軍技術者が開発したモビルスーツ素材。「ガンダム」で使われたルナ・チタニウム合金が改良され、「ガンダリウム合金」と呼ばれることから、さらに改良された素材だと考えられる。

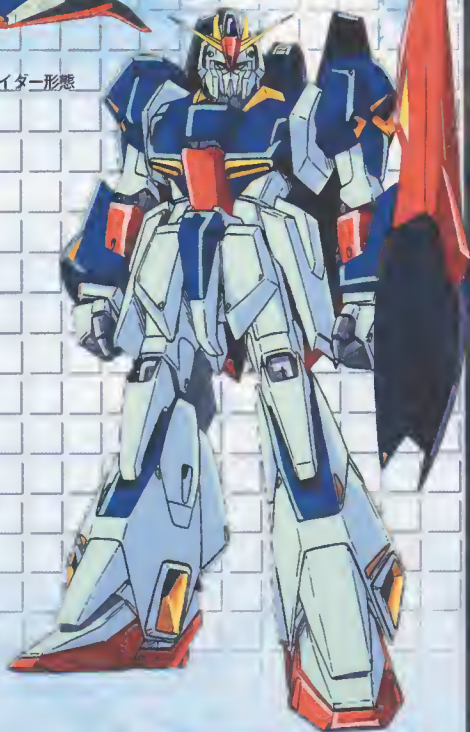
抜群の加速性能を誇る、エウーゴの象徴的可変機

MSZ-006

Zガンダム



ウェイブライダー形態



SPEC

エウーゴが開発した可変試作モビルスーツ。全高19・8m。重量28・7t。主な搭乗者はカミーユ・ビダン。



▽初のバイオセンサー搭載機

「ガンダム Mk・Ⅱ」のパイロット、カミーユ・ビタンは、意識を通じ合った敵の強化人間フオウ・ムラサメの手引きによって、シャトル用のブラスターを奪取し、宇宙へ上がった。宇宙へ戻ったカミーユだったが落ち着く間もなく、ジェリド・メサの「ガブスレイ」を迎撃に出撃。

マウアー・ファラオが遅れて参戦してきたため、ガブスレイが1機であると思い込んだカミーユは絶体絶命の危機を迎えるが、「Zガンダム」を受領して戻ってきたアポリー・ベイとファ・ユイリイたちの到着によって救われた。

第21話で初登場となったZガンダムは、これ以降、カミーユがパイロットを務めることになり、ガンダム Mk・Ⅱにはエマ・シーンが搭乗することになる。カミーユのZガンダムは、高速移動が可能なウエイブライダー形態とモビルスーツ形態を使い分け、強襲巡洋艦「アーガマ」隊の中核として活躍。

ティターンズの基地「キリマンジャロ」攻略戦では、大気圏に落下した「百式」をウエイブライダー

劇中終盤では、ニュータイプ能力の描写が随所に見られたが、物理的に性能がアップしたのはZガンダムだけだ。



形態で回収しつつ、そのまま大気圏へ突入するなど優れた機体性能も見せつけた。

最後の戦闘では、Zガンダムに搭載された簡易型サイコミュのバイオセンサーがカミーユのニュータイプ能力と感応し、ビームを弾くバリアーを形成したり、ビーム・サーベルを巨大化させるなどの現象も見られた。

また、「ジ・O」との最終決戦では、死者の念を取り込んだZガンダムが不思議な力でジ・Oの動きを封じ、ウェイブライダー形態のZガンダムで体当たりするという、超常的な戦いを見せている。

ちなみに、数ある歴代ガンダムのなかでも独特の顔をしているため、「ゼータ顔」と呼ばれファンも多い。

▼カミーユ・ビダンの設計で誕生

Zガンダムは、エウーゴと協力関係にあったアナハイム・エレクトロニクス社が、「リック・ディアス」の完成後に発動した「Zプロジェクト」によって開発した機体のひとつである。

当初、機体開発は難航していたが、エウーゴが奪取したガンダム Mk・II のムーバブル・フレームを採用し、カミーユの設計案を取り入れることで、開発の目処がたったという。

ムーバブル・フレームとは、外骨格（モノコック）となる装甲版で機体を支えるのではなく、人体という骨に相当するものを内包することにより機体を支える骨格構造のこと。

関節の稼働範囲の拡大や、可変機構の搭載が容易になるという利点があるため、これ以後に

開発されたモビルスーツには、どこかの部位で必ず使用されているといえるほど、一般的になった技術である。

推進力には、脛部に2基の熱核ジェットロケットエンジンを、背面にロングテールバーニアスタビライザーを搭載している。

本機は、もともと地球連邦軍本部「ジャブロー」の攻略を念頭に、ウェイブライダー形態での一撃離脱戦法を主眼において開発されたという経緯があり、加速性能に関しては大気圏内外を問わず高い性能を発揮する。

ウェイブライダー形態は、超音速の飛行で発生する衝撃波を機体下面に集中させ、これに波乗りするようなスタイルで飛行することから、この名がつけられた。

ウェイブライダー形態では、機体角度を調整してシャトルのように降下することで、単機での大気圏突入も可能となっており、劇中でも、百式を載せて地球へ降下する場面が見られた。

また、ウェイブライダー形態にはサブ・フライト・システムとしての機能もあり、劇中では前述した大気圏降下の場面のほか、無人のZガンダムに百式

ラスボスともいえるジ・Oを、ウェイブライダー形態の体当たりで撃破するという結末は、かなり衝撃的だった。



を乗せたクワトロ・バジーナが、遠隔操作で操縦していた。

なお、カミーユの設計案というのは、第6話でアーガマのコンピュータを使って設計していたもの。しかし、これが採用されたのもエウーゴがガチガチの正規軍というわけではない、柔軟な組織だったからだろう。

武装には、頭部に60ミリ機関砲2門、腰部にビーム・サーベル、両腕部に2連装グレネードランチャーを搭載。携行火器として、ビーム・ライフルとハイパー・メガ・ランチャーが用意されている。腕部のグレネードランチャーは、直撃させればモビルスーツを破壊できる威力をもっており、単なるサブウェポンというわけではない。

ティターンズのモビルスーツ「ハンブラビ」の海ヘビ（電磁兵器）にヒントを得たのか、劇中における「キュベレイ」との戦闘では、爆発しない弾頭にワイヤーをつけて発射し、キュベレイの腕に絡ませて引き寄せ、ビーム・サーベルでしとめようとするシーンもあった。

ビーム・ライフルとハイパー・メガ・ランチャーは、ビーム・サーベルとしての機能ももっており、射撃武器を構えたままとつさに使用できる利点がある。

劇中でも、ガブスレイやキュベレイとの戦いで使用していた。これらの銃器は、ウェイブライダー形態でも機体にそのままマウントされるので、火力が低下することはない。また、この形態では、ビーム・サーベルの刃を形成させずに、ビーム・ガンとして使用することが可能。

出力は低いものの、モビルスーツの腕部を破壊できる程度の威力はもっており、劇中ではビーム・サーベルで斬りかかる「ハイザック」の腕を破壊し、「メタス」を援護していた。

左腕のシールドは、ウェイブライダー形態時に機首となる部分で非常に頑丈にできており、最終決戦ではジ・Oのコクピットを突き破っていた。

『機動戦士ガンダムZZ』へも受け継がれた名機

「グリプス戦役」を戦い抜いたZガンダムは、続編の『機動戦士ガンダムZZ』にも登場している。当初は、この作品の主人公であるジウド・アーシタが搭乗。のちに、エウ・ゴの志願兵ルー・ルカがメインパイロットを務め、各地を転戦した。

最後は、小惑星「アクシズ」をめぐる戦いのなか、グレミー・トトとブルツが搭乗する「クイン・マンサ」の攻撃により大きな損傷を受けたため、搭乗者のルーは「ZZガンダム」で脱出。行動不能になったZガンダムはアクシズ内に置き去りにされた。

Zガンダムは操縦にクセがあったともいわれるが、簡易型サイコミュのバイオセンサーを搭載することでそれも緩和され、当時では最高水準の性能をもつ機体となった。ふたつの作品にわたって使われたのもうなずける、名機だったといえるだろう。

『ガンダムZZ』では素人の子供、ジウド・アーシタが搭乗するが、高い性能のお陰で一人前に成長していく。



モビルスーツ史に多大な影響を与えたグリプス戦役の雄

RX-178

ガンダムMK-II

ティターンズカラー



エゥーゴカラー

SPEC

ティターンズが開発した汎用試作機。全高 18・5m。重量 33・4t。主な搭乗者はカミーユ・ビダン。

▼ 黒いガンダムの衝撃

ティターンズが新型機をテストしているという、スペースコロニー「グリーン・ノア2（グリプス）」へと潜入したクワトロ・バジーナは、黒を基調とするモビルスーツを目撃する。それが「ガンダムMk・II」だ。しかも、Mk・IIは3機も製造されていた。

ついにガンダムが量産された。そんな夢を感じさせるファースト・インプレッションのはずだが、Mk・IIはクワトロに対してバルカンを発砲するわ、グリプス内に侵入した「リック・ディアス」に攻撃を仕掛けるわ、周囲の民間人やコロニー内であることなど問答無用で暴れまわる。

Mk・IIのデビューは、前作の英雄機の面影を微塵も感じさせないものだった……。

このあと、カミーユ・ビダンがMk・IIの3号機に無断で搭乗したことで、結果的にクワトロたちはMk・II2機の奪取に成功する。それはたとえば、悪の手先から囚われの英雄が救出されたようなものだった。

これ以降、Mk・IIは徐々にガンダムらしくなるのだが、その前に「黒いMk・II」には、残酷な

コロニー内で人に向けて発砲する黒いMk・II。本機の第一印象は、色のイメージ通り不穏な行動が目立つ。



運命が待ち構えている。

それは、カミーユが黒い Mk・Ⅱに乗るとき、彼の両親が目の前で死ぬことだ。

偶然とはいえ、そんな悲惨な場面にしか出会えないことを鑑みると、黒い Mk・Ⅱは、ティターンズという悪魔に呪われた機体なのかと思わずにはいられない。

▽ガンダムの栄光、再び！

その後、ティターンズのエマ・シーンの裏切りによって3機ともエウーゴに奪取された Mk・Ⅱは、うち1機が戦力として投入され、黒いティターンズカラーから、ガンダムらしい白色に塗り替えられる。これが俗にいうエウーゴカラーの Mk・Ⅱだ。

ちなみに、まだカミーユがパイロットに正式採用されていないため、白い Mk・Ⅱの初陣と2戦目はクワトロが搭乗している。

白い Mk・Ⅱ & カミーユのデビュー戦はやや遅く、スペース・コロニー「30パンチ」宙域でのライラ・ミラ・ライラの「ガルバルディβ」との戦闘になる。

熟練パイロットとの戦いにもかかわらず、カミーユは彼のニュータイプ能力をもつてして、終始ガルバルディβを圧倒し、これを撃破することに成功。敵のライラも自らをオールドタイプとして認めるほど、この戦いはカミーユの秘めた実力を示すものとなった。

この華々しい戦果のあとも、カミーユは白い Mk・Ⅱに搭乗して活躍する。もちろん、これは彼の実力だけでなく、Mk・Ⅱのポテンシャルもあつてのことだ。

特に運動性能においてはズバ抜けており、劇中ではさまざまなシーンでその実力を見せつけている。

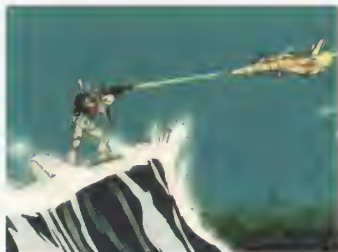
月面でのガルバルディβ戦では、バーニアもふかすことなく宙高くジャンプし、敵機を翻弄。「アッシマー」戦では、「百式」とのコンビネーションでアッシマーに追いつくほど超高度へと飛びあがって空中戦を行った。その場所を選ばぬ活躍ぶりは、まさに、かつてのオールラウンダー「ガンダム」の再来といえる。

また、Mk・IIは支援機とのコンビネーションも非常に目立つ。サブ・フライト・システム「フライングアーマー」や「ド・ダイ改」に乗れば、よりすばやい機動性と運動性を発揮。大気圏突入時という危険な状況のなかで交戦を行うなど、ほかを圧倒する戦いぶりを見せている。

そして、第22話から登場した専用強化装備「Gデイズエンサー」と合体することで、「スーパーガンダム」へと強化。可変モビルスーツ並みの機動性と、高い火力で激戦をくぐり抜けていく。

なお、カミーユが「Zガンダム」に乗るようになったタイミングで、ガンダム Mk・IIの搭乗者はエマ・シーンへと移行。戦艦「ラーディッシュ」へと配

Mk・IIとフライングアーマーの相性はよかった。この実戦データが、Zガンダム開発にいかされている。



備され、強襲巡洋艦「アーガマ」のサブに回ることが多くなる。

それでも、スペース・コロニーの核バルスエンジンを爆破して、グラナダへのコロニー落としを阻止したり、ティターンズとの最後の激戦では破損した左腕にシールドをくりつけた状態で「バラス・アテネ」を撃破するなど、随所で多大な戦果をあげている。

こうして主役の座を奪われながらも、Mk・IIは「グリプス戦役」終盤まで活躍した。しかも、続編の『機動戦士ガンダムZZ』（第一次ネオ・ジオン戦争）でも、主にエル・ビアンノが搭乗して、ガンダムチームの中核を担っている。

「クイン・マンサ」によって小惑星基地「アクシズ」内部で大破するまで、最新鋭のモビルスーツたちと戦ったMk・IIは、一定の評価ができるのではないだろうか。

▼モビルスーツ史に燦然と輝くエポックモデル

ガンダムMk・IIは、ティターンズが自らの行動を正当化するためにその設立にあわせ、ガンダムの次世代機を開発した汎用試作機である。暴徒鎮圧用モビルスーツ「ジム・クウエル」をベースに、開発主任であるフランクリン・ビダンのもとで、純粋な地球連邦系技術者のみで完成させている。

こうして完成したMk・II最大の特徴というのが、史上初めてムーバブル・フレームを採用していることである。これまでのモビルスーツと違いこのフレームは、要するに、人間のような骨格構造をもたせ、これとフレームに動きを連動させる機能をもった装甲を取り付けるこ

とで、装甲の支えがなくても機体そのものが維持できるシステムである。

これによりモビルスーツがより軽量化され、メンテナンスも簡単になり、駆動効率が高まったことは、モビルスーツ史的に非常に大きなエポックだといえる。

そんな Mk・II にとつて、旧式っぽい点といえるのが、装甲材にガンダリウム^①を使用していないことだ。ティターンズは、ガンダムで使われたルナ・チタリウム合金は使用していたものの、当時の連邦軍側の技術をして新素材の研究はなかなか進まなかったようだ。

また、武装も、頭部バルカンポッド、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカと、非常に標準的。突出した火力を持ち合わせているわけではない。このへんが「マイナーチェンジ」や「所詮 Mk・II か」などと揶揄されてしまう由縁だ。

しかし、Mk・II が総合的に優秀な機体であることに変わりはない。しかもムーバブル・フレームは、いわゆる可変モビルスーツの根本的な技術となり、可変機構を容易にした一因となっている。このフレームなくして、可変機があればどの隆盛を極めることはなかったといえるだろう。

Mk・II が、モビルスーツ史に与えた影響は決して少なくないのだ。

エマが搭乗してからは、スーパーガンダム状態での戦果が大きい。ロングライフルの火力は絶大だ。



ガンダムMk-IIをパワーアップさせる支援戦闘機

FXA-05D

Gディフェンサー

脱出コクピットカプセル



月面都市「フォン・ブラウン」制圧を目的とする、ティターンズのアポロ作戦。その迎撃準備を進める強襲巡洋艦「アーガマ」に、「メタス」とともに配備されたのが「ガンダム Mk-II」用の強化装備「Gディフェンサー」である。

ヤザン・ゲーブル部隊に苦戦する Mk-II を援護するべく、カツ・コバヤシが本機に乗って出撃。両機は合体して「スーパーガンダム」となり、ロングライフルでジャマイカン・ダニガンンの重巡洋艦「アレキサンドリア」のブリッジを吹き飛ばしている。その火力の高さを十分に知らしめる初陣といえるだろう。

Gディフェンサーは、装甲が弱めな Mk-II の強度を補うべ



[スーパーガンダム]

く開発された。合体すれば推力も航続距離も強化され、大火力のロングライフルによる長射撃も可能。そして、巡航形態の「Gフライヤー」、モビルスーツ形態の「スーパーガンダム」に使い分けることができる。

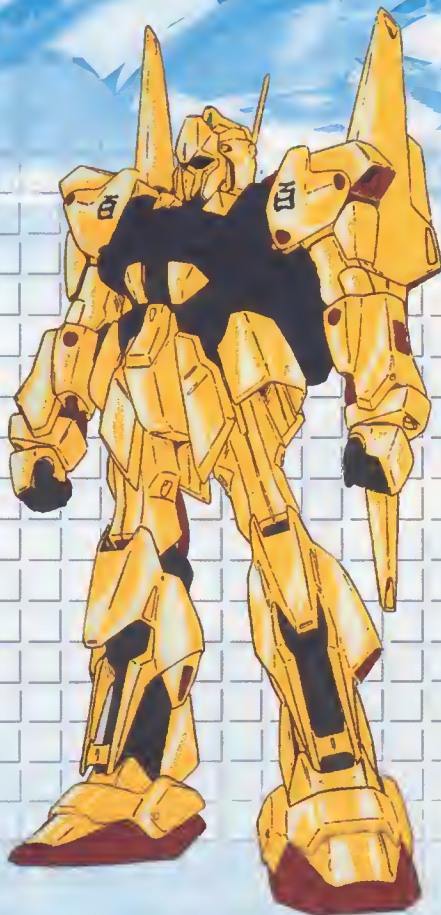
なお、スーパーガンダムになる際は、コクピットブロックが分離し、小型戦闘機「脱出コクピットカプセル」となる。ただし、武装はレーザーだけと貧弱で護身的なものだ。

単機では決してポテンシャルは高くないGディフェンサーではあるが、時代遅れになりつつあったMK-IIを見事にハイクオリティモデルに再生させたことは、大いに意味があったといえる。

ワンアンドオンリーの黄金の機体

MSN-100

百式



SPEC

エウーゴの汎用試作モビルスーツ。全高 18・5m。重量 31・5t。主な搭乗者はクワトロ・バジーナ。



金色の輝きは対ビーム塗装

第9話で、月面都市「グラナダ」に係留されているティターンズの戦艦を奪取するため、クワトロ・バジーナが乗り込むのが、新型モビルスーツの「百式」だ。

この百式は、エウーゴとアナハイム・エレクトロニクス社が共同で進めていた高性能モビルスーツ開発計画「Zプロジェクト」の一環として製造されたという経緯をもっている。

本機を語るうえで欠かせないのが、やはり、全身が金色という特異性だろう。戦場では不利となる、目立ちすぎるカラーリングだが、もちろん意味もなく、このような派手な色になっているわけではない。百式の機体表面には、対ビーム・コーティング効果のある塗料が実験的に塗られており、その塗料のせいで金色の輝きを放っているのだ。

さて、先に百式はZプロジェクトの一環として開発されたと書いたが、それゆえ、本機は、のちに開発された「Zガンダム」と非常に密接な関係を持っている。たとえば、百式のムーバブル・フレーム（骨格構造）は、本来、Zガンダム用に試作されたものだが、強度に問題があり、結局、Zガンダムでは不採用と

見るからに派手な外見で、基本構造の強度不足を指摘される百式だが、ガンダム Mk - II を肩に乗せたこともある。



なっている。また、Zガンダムに採用されている可変機構も、当初の予定では百式で実現するはずであった。しかし、これも強度の問題などにより断念したという経緯がある。

このように、Zガンダムの試作機としては数々の欠陥を抱えていた百式だが、基本性能は高く、一機のみ生産ではあったが、戦場で高い成果をあげることとなる。

▽高い運動性でクワトロバジナの操縦に応える

戦場における百式は、優れた汎用性からさまざまな状況で活躍を見せたが、基本的には高い運動性をいかした近接攻撃をもっとも得意としていた。その運動性をいかすために、シールドも持たず、装甲も極限まで削るという極端な設計思想でつくられているのだ。

そのため、全身を覆う金色の対ビーム・コーティング塗装は、多少なりとも低い防御力を運動性を犠牲にせずにあげるための工夫なのである。

とはいえ、所詮、対ビーム・コーティングは気休めだ。ビームの直撃を受ければひとたまりもない。そういう意味で百式は、敵の攻撃を事前に察知し、瞬時に反応できるクワトロぐらい高いレベルのパイロットでなければ乗りこなせない、乗り手を選ぶモビルスーツといえる。

運動性に重きを置いているせいか、武装のほうも、百式は少々軽めだ。固定武装は、頭部の60ミリバルカン2門と、腰部に2基のビーム・サーベルを装備しているのみ。

携行武器に関しても、基本は、専用ビーム・ライフルと、「リック・デias」と共用のクレイ・バズーカぐらいしかなく、いまひとつ心もとない。

さすがに、これだけでは火力不足を感じたのか、メガ・バズーカ・ランチャーという百式とほぼ同じ大きさの大型ビーム砲を使用することもあった。

これは、モビルスーツに、モビルアーマー並の火力を持たせることを目的に設計されたもので、事実、劇中では一撃でモビルスーツ数機を沈める戦果をあげている。

だが、威力に比例してエネルギー消費量も大きく、連続使用しようと思えば、もう1機モビルスーツをエネルギー供給用に随伴させなければならないなど、その運用には、かなり難しいものがあつた。そのため、実際にメガ・バズーカ・ランチャーが活躍する機会は、それほど多くはなかった。

登場が比較的初期であつたにもかかわらず、「グリプス戦役」の最後まで百式が第一線で戦い抜けたのは、なによりも機体のポテンシャルが高かつたからだろう。

最終的には「キュベレイ」との戦いで大破するとはいえ、百式は、至近距離から放たれたキュベレイのフアンネルを回避して見せている。

これは、ニュータイプであるクワトロの操縦に因應られるだけの運動性能を、百式が持ち合わせていたゆえである。

戦艦「ドゴス・ギア」を狙う、メガ・バズーカ・ランチャー。運用の難易度は高いが、威力は絶大である。



次世代ガンダムとして開発されたエウーゴの新型機

RMS-099(MSA-099)

リック・ディアス

クワトロカラー

ノーマルカラー



SPEC

エウーゴの量産機。全高 18・7m。重量 32・2t。主な搭乗者はクワトロ・バジーナ、アポリー・ベイ、ロベルト。



▼ 乗り手を選ばぬ名機

3機のモビルスーツが不気味な駆動音を立てて、スペース・コロニー「グリーン・ノア2」(グリーン・ノア)への潜入を図ろうとしていた。まるで『ガンダム』第1話の「ザク」を思わせるシーンでデビューする、その機体こそ「リック・ディアス」だ。

その後、クワトロ・バジーナの乗る赤いリック・ディアスと、黒いカラーリングの2機は、強襲巡洋艦「アーガマ」の援護射撃を受けてスペース・コロニー「グリーン・ノア1」への潜入に成功。コロニー内での空中戦において、すばやい動きで「ジムⅡ」を翻弄し、これを次々に撃破する。

その華麗な戦闘ぶりは、ティターンズのパイロットをして「まるで赤い彗星だ」と言わしめるものであった。そしてクワトロたちは、見事「ガンダム Mk・Ⅱ」の奪取に成功する。

いくら新型とはいえ、敵の懐にまんまと侵入し、さらに Mk・Ⅱ 2機を奪取する手際は見事としかいえない。この作戦は、本機のポテンシャルと、クワトロの実力を存分に見せつけるものとなった。

その後、クワトロのリック・ディアスは、フランク

急降下から地上すれすれで停止し、敵機を地面に激突させるなど、機動性の高さをいかした芸当まで披露した。



リン・ビダンの裏切りによって戦場で大破してしまう。しかし、健在なアポリー・ベイ、ロベ
ルトの乗機は、クワトロがほかの機体に取り換えたあとでも、基本的にはその脇を固める形で
出撃し、月での地球連邦軍戦艦奪取作戦や、連邦軍本部「ジャブロー」攻略戦などで活躍して
いる。また、本機が月面都市「アンマン」で、すべて赤いカラーリングになってからは、エマ・
シーンなどのさまざまなパイロットが搭乗する機会も多くなる。

特に、アポリーが宇宙にあがって乗り手を失った本機は、もち主以外のパイロットによって
意外な戦果をあげている。カミーユ・ビダンが搭乗した際には「ギャプラン」を、アムロ・レ
イが搭乗した際には、「アッシマー」を撃墜している。この、乗り手を選ばぬ活躍ぶりは、ま
さに本機が名機であることの証だといえよう。

▽ガンダムの技術を受け継ぐ三番目の機体

リック・ディアスは、エウーゴとアナハイム・エレクトロニクス社が極秘に共同開発した量
産機である。「二年戦争」での「ガンダム」と「リック・ドム」の長所を取り入れており、「ド
ム」を思わせるフォルムはこれに起因しているようだ。そして本機は、クワトロによって小惑
星基地「アクシズ」からもたらされたガンダリウム^①を、モビルスーツとして初めて装甲材と
フレームに採用。機体を大幅に軽量化することに成功し、その機動性の高さを実現させる要因
のひとつとなっている。このことから、本機の開発コードは「^②ガンダム」とされており、ガ
ンダムの技術を継ぐ三番目の機体、という意味がこめられている。

ちなみに、「リック・ディアス」という名前は、クワトロが喜望峰を発見したバーソロミュー・ディアスから取って、ゴロ合わせで命名している。

武装としては、頭部にバルカン・ファランクスを、腰部にビーム・サーベルを装備し、手にはクレイ・バズーカやビーム・ピストルを携行している。ビーム・ピストルは背中のウェポンラックに取り付けることもでき、しかも背中に装備した状態のまま後方への射撃を行うことも可能だ。また本機は、同時期に開発されたガンダム Mk・IIと比較されることが多い。実際、Mk・IIがティターンズにとつての次世代ガンダムを目指した旧地球連邦系技術陣による機体なのに対し、リック・ディアスはエウーゴにとつての次世代ガンダムで、旧ジオン系技術陣による機体である。両者は相対する関係だと見てよい。

実力も伯仲しており、オフエンス面では Mk・II に劣るが、ディフェンス面においては本機のほうが上だったらしい。そんな次世代ガンダムを目指した両機が、偶然にもエウーゴで共闘することは、実に運命的である。

そして、本機は高性能モビルスーツ開発計画「Z プロジェクト」の走りとなり、カラバの「ディジェ」の開発ベースにもなっている。

リック・ディアスで一番華々しい活躍をあげれば、アッシマーの撃破に尽きる。自由落下中の空中戦は見事だ。

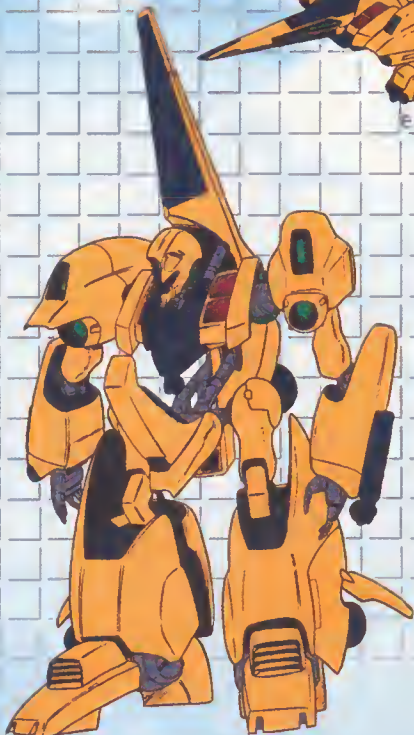




メタスの頭部メインカメラは、水平と垂直に動く。2機のモニアイによって構成された独特のデザインをしている



モバイルアーマー形態



SPEC

エウーゴの試作可変モビルスーツ。全高 18・1m。重量 27・8t。主な搭乗者はファ・ユイリイ。

MSA-005

メタス

モビルアーマー形態の一撃離脱を主眼とした可変モビルスーツ



▽グリプス戦役を奇跡的に戦い抜く

第22話でレコア・ロンドが強襲巡洋艦「アーガマ」に、「ガンダム Mk・Ⅱ」用の強化装備「G デイフェンサー」とともに届けたのが、「メタス」である。

ちなみに、このときレコアは、ヘンケン・ベッケナーから、エマ・シーンへのプレゼントも同時に託されていた。

そんなメタスは、アナハイム・エレクトロニクス社が進めていたZプロジェクトのなかで試作された可変モビルスーツで、「Zガンダム」とはまた別の可変機構を持っている。

だが、可変機構の試作段階ゆえに、腹部が剥き出しになった数本のフレームだけで支えられているという脆弱さは、実戦では致命的な強度不足であった。

また全体の装甲も薄く、機関出力も低い本機は、どこまでいっても試作機の域を超えないモビルスーツであったといえるだろう。とはいえ慢性的な戦力不足に陥っていたエウーゴにとっては、貴重な戦力として運用され続けた。

装甲の薄さから接近戦向きではなく、かといって長距離支援攻撃を可能にする強力な火器を持つているわけでもないメタスの実戦における理想的な運用方法は、モビルアーマー形態の高加速能力をいかした一撃離脱戦であろう。しかし、実際には、頻繁に乱戦に巻き込まれていた。それでも、ときには「ジ・O」や「キュベレイ」とまで交戦しながら、「グリプス戦役」を最後まで戦い抜くことができたのは、奇跡的といえるだろう。

ジムシリーズ初のガンダリウム合金装備機

MSA-003

ネモ

ネモの武装は運用面を考えて、ビーム・ライフルはジムⅡと、ビーム・サーベルはリック・ディアスと共用している。



SPEC

エウーゴの量産型モビルスーツ。全高 18・5m。重量 36・2t。主な搭乗者はカツ・コバヤシ。



リック・ディアスの穴を埋める量産機

カミーユ・ビダンの「ガンダム Mk・II」やクワトロ・バジーナの「百式」などのエウーゴ主力部隊は、地球連邦軍の艦艇を奪取する作戦に出る。その入れ違いに、守備が手薄になった強襲巡洋艦「アーガマ」を襲撃する、カクリコン・カクーラー率いる「ハイザック」隊。その際、アーガマを護衛していたのが「ネモ」だ。

ネモは、「ジムⅡ」の後継機としてアナハイム・エレクトロニクス社が開発し、エウーゴ、およびエウーゴの支援組織であるカラバに配備された量産型モビルスーツである。

本来、エウーゴは、コスト高の「リック・ディアス」の穴を埋める量産機として、アナハイム社の「マラサイ」を想定していた。だが、政治的駆け引きの結果、マラサイはティターンズに配備されることとなり、急遽、その代わりとしてネモが回ってきたという経緯がある。

性能的に特筆すべき点は、「ジム」シリーズとして、はじめてガンダリウム合金が使用されていることだろう。

そのおかげで、耐久力はジムⅡを完全に凌駕している。また、照準機系は「ジム・スナイパーカスタムⅡ」を基本としているため、照準能力も非常に高い。

劇中では、地球連邦軍本部「ジャブロー」攻略戦で主力機として運用されたのが、最大の活躍場面であろうか。その後も、エウーゴの戦力として使用され続けはしたものの、結局、最後まで全体の主力量産機にはなれなかった。



開発ベースはリック・ドミアスのため、基本性能は高い。しかし、陸戦用として特化したものはない。



デイズヘ

MSK-008

アムロ・レイが搭乗した、非ガンダム系モビルスーツ

SPEC

カラバの試作陸戦用モビルスーツ。全高 18・4m。重量 33・9t。主な搭乗者はアムロ・レイ。

KARABA

陸戦用のリック・ディアス!?

図らずも、ティターンズの基地「キリマンジャロ」攻略戦に降り立った「Zガンダム」と「一式」を出迎えたのが、アムロ・レイの乗る「ディジェ」であった。

ディジェは、エウーゴが地球に置いていった「リック・ディアス」を改造してつくられたモビルスーツである。

改造のポインントは、高い汎用性をもっていたリック・ディアスの装備を、有重力、大気圏内用に変更し、外装を換装することで陸戦用モビルスーツに特化したことである。

実質、新規開発のモビルスーツではなく、リック・ディアスの改装にすぎないためか、劇中には1機しか登場していない。武装も基本的には、リック・ディアスのものが流用されているが、独自の装備には、「一年戦争」のジオン軍の名機「ゲルググ」を思わせるビーム・ナギナタもあった。ちなみに、ディジェ自体のフォルムもゲルググによく似ており、不思議な共通性を感じさせる。

大気圏内での飛行能力も付与されているが、実際には、サブ・フライトシステムである「ド・ダイ改」に乗って戦うことがほとんどであった。

そういうところからも明らかだが、ディジェの設計思想、運用計画は非常に曖昧で、そのために、あまり活躍しきれなかったモビルスーツであるといえる。少なくとも、一年戦争の英雄アムロの乗る機体としては役不足といわざるを得ないだろう。

最後までつきま続ったジオン軍の残像

RMS-106

ハイザック



SPEC

地球連邦軍の汎用量産型モビルスーツ。全高
18・0m。重量 38・7t。主な搭乗者はジェ
リド・メサ、カクリコン・カクーラー。



地球連邦軍の「ザク」

スペースコロニー「グリーン・ノア」から強奪された「ガンダム Mk・II」を追うため、ティターンズのジェリド・メサが率いたのが、「ハイザック」の部隊である。

だが、エウーゴの強襲巡洋艦「アーガマ」の援護射撃に阻まれ、その任は果たせなかった。ハイザックは、「二年戦争」終了後に地球連邦軍が次期主力量産機として最初に開発したモビルスーツである。

しかし、新規開発とはいえ、ハイザックは、その名前や外見からすぐわかるが、連邦軍系モビルスーツの系譜に位置するのではなく、連邦が一年戦争で敵対したジオン軍の名機「ザク」を原型としている。設計思想の異なる、連邦軍系モビルスーツの技術とジオン軍系モビルスーツの技術を折衷することは簡単なことではない。

結局、ハイザックはジオン軍のザクを基本とし、装甲やジェネレーターのみを連邦軍の技術で強化した、ザクの発展・改良型ともいえるべきモビルスーツであった。

ガンダム Mk・IIを取り戻すため出撃したハイザックだが、たやすく撃沈。その点は、やられ役らしい量産機ではある。



敵対勢力の主力機であったモビルスーツを引き継ぎ、発展させるというのは異例であるが、それだけザクの量産機としての性能が認められていた証であろう。

また、地球連邦の上層部には、一年戦争緒戦で圧倒的な戦果をあげたザクに対する畏怖が根強く残っていたものと思われる。

とはいえ、この「地球連邦軍の開発したジオン軍系モビルスーツ」というねじれの中途半端さは、のちのちまでハイザックについてまわることになる。

どこまでもつきまとうジオンの残像

性能面から見たとき、ハイザックとザクの最大の違いは、ザクでは不可能だったビーム・ライフルやビーム・サーベルといった携行ビーム兵器の使用が、ハイザックでは可能となっていることである。これは、ジェネレーターの強化によるところが大きい。

しかし残念ながら、ハイザックのジェネレーター出力では、ビーム・ライフルとビーム・サーベルの同時使用は不可能であった。このへんにも、設計思想の中途半端さが現れているといえるかもしれない。

ちなみに、携行ビーム兵器の実用は連邦軍のほうがジオン軍より早く、「ガンダム」や、量産機の「ジム」で実現している。

普通に考えれば、その技術が、ハイザックにも転用されたと考えるのが合理的であろう。だが、ハイザックの携行ビーム兵器使用には、ジオン軍で初めてビーム・ライフルを装備し

ていた「ゲルググ」の技術が直接転用されているという説も存在している。それほど、ハイザックの基本設計は、ジオン寄りということなのである。

もう一点、ハイザックの特徴をあげるとすれば、初めて全天周囲モニター・リニアシートが導入されたモビルスーツであるということだろう。

のちのモビルスーツのほとんどに導入されることとなるこの装備は、パイロットにとっては、視認性と搭乗性を格段に向上させるものであり、以後、欠かせないものとなる革新的な発明であった。

それが初めて導入されたモビルスーツであるという点において、ハイザックはモビルスーツ開発史における、ひとつのエポックメイキングであったといえるだろう。

そのほかの点においては、高い汎用性なども含め、ハイザックはザクの設計思想を忠実に受け継いだモビルスーツであった。

武装のオプション化という設計思想もザクから受け継いでおり、右肩部にはオプションマウント用のラッチを設けたシールドを設置。腰部ラッチには3連装ミサイルポッドを2基接続することも可能な仕

グリプス戦役で唯一の水中用モビルスーツのマリン・ハイザック。かつてのゴッグやズゴックと比べ、性能は劣る。



様となっている。

また、左肩部に格闘戦用のスパイクを装備している点も、ザクそのままのデザインである。カラーリングに関しては、連邦軍一般で使用された機体は青、ティターンズではジオン公国カラーを思わせる緑に塗装されている。

ティターンズ使用のハイザックの塗装がジオン軍のザクに酷似しているのは、そもそもティターンズがジオンの残党狩りのために設立された組織であり、旧ジオン兵への心理的效果を狙ったものとされている。だが、このカラーリングの面から見ても、やはり、ハイザックを連邦軍のモビルスーツと呼ぶのには違和感が残ることは否めない。

▲ハイザックが量産機として定着しなかった理由

その違和感は、地球連邦軍の将兵たちも拭えなかったようだ。結局、ハイザックは、次期主力モビルスーツとして期待されながらも、浸透しきる間もなく、あとから開発された「マラサイ」や「バーザム」といったモビルスーツに、その地位を奪われてしまうのである。

使いやすさの点では現場のパイロットからは好評価も得ていたし、中距離支援型の「ハイザック・キャノン」やエース用である「ハイザック・カスタム」などのバリエーションも開発されている。だが、どこまでいってもジオンの残像が残るハイザックは、連邦軍にとって、現場の士気を高める機体ではなかったのだらう。それが、量産機としてハイザックが定着しなかった最大の理由である。



のちに、用途廃止となったハイザックは、民間に払い下げられるようになり、モビルスーツ愛好家のための趣味の機体となった。

劇場版『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』では、派手なカラーリングが施された、民間用「ホビー・ハイザック」の姿を見ることができるとのこと。

これが、ハイザックという機体にとって幸福なことなのか、不幸なことなのかは判断が難しい。しかし、ハイザックの原型となったザクが、一年戦争末期まで前線で活躍をし、ジオン軍のシンボルとして愛され続けたのとは対照的であったことだけは間違いない。

やはり、地球連邦軍の開発したジオン軍系モビルスーツという歪みは、最後までハイザックにつきまとった呪いであった。

だが、一年戦争後の地球圏は、連邦軍内部でもエウ・ゴとティターンズに分裂し、さらにネオ・ジオンも胎動。そして、そこにアナハイム・エレクトロニクスなどの軍需産業などが絡んでくるという混沌とした状態であったのだ。一年戦争のときのように、簡単に敵味方がわけられる状態ではない。

そういう意味では、ハイザックは状況の犠牲となった不遇な機体であるということもできるだろう。

武装を排除され、スポーツや個人の趣味用に民間に払い下げられたハイザック。



圧倒的加速性を発揮した華麗なるドッグファイト

ORB-005

ギャプライン

モビルアーマー形態



SPEC

オーガスタ研究所でテストされた可変試作機。
全高 19・8m。重量 50・7t。主な搭乗者は
ロザミア・バダム、ヤザン・ゲーブル。



群を抜く空中戦での活躍

大型輸送機「スードリ」に合流するべく、ニュータイプ研究機関「オーガスタ研究所」よりロザミア・バダム隊が出撃。その隊長機となるのが「ギャプラン」だ。ロザミア隊は合流する前、偶然カラバの大型輸送機「アウドムラ」を発見したため、これを急襲する。

そしてギャプランは、2本の可動式バインダーを駆使して、空中での急加速や急降下、急な方向転換など、「アッシマー」を上回る動きを発揮し、メガ粒子砲でアウドムラを執拗に攻撃する。さらには、応戦に出た「ガンダム Mk・II」が背中に飛びつくと、一瞬の隙を突いてモビルスーツ形態に変形して逆襲。

あと一步で Mk・II を撃墜というところまで追いつめたものの、「百式」による邪魔が入ったことと、エネルギーの使い過ぎで撤退を余儀なくされる。

その後、単機での単独行動が災いし、カラバ隊によって大破してしまったが、改良されたギャプランがアポロ作戦直後の月面都市「フォン・ブラウン」でも登場。これが、ヤザン・ゲープルの乗る機体である。

月面を偵察中だったギャプランは、「ハイザック」

空中戦での姿勢制御能力は、群を抜いている。モビルスーツ形態での自由落下状態ですら、機動性が高い。



部隊とともに強襲巡洋艦「アーガマ」を奇襲。大気圏内同様、圧倒的な運動性を武器にしたドッグファイトを展開するだけでなく、変形を駆使して距離に応じて戦法を使い分けるなど、ヤザンによる操縦技術によって圧倒的なポテンシャルを見せつけた。

このヤザンのギャプランは、その後の月面都市「グラナダ」へのコロニー落とし作戦やアーガマ追撃戦などに参戦。

シールドも兼ねたバインダーで敵の攻撃を受け止めたり、ビーム・サーベルの二刀流で敵を圧倒するなど、接近戦でもその強さを示している。

劇中では、結果的に戦況変化のなかで戦線離脱してしまったが、終止、「Zガンダム」相手にひけをとらない戦いをしていたことは、賞賛に値する。

Zガンダムと双壁をなす、可変モビルアーマーの雄

ギャプランは、オーガスタ研究所でテストされた、地球連邦軍の可変試作モビルアーマーである。大きな推力を武器に、主に一撃離脱戦法をコンセプトに開発された機体で、本来は宇宙戦用として設計されている。しかし、大気圏内でも運用でき、モビルアーマー形態で大気圏内の単独飛行が可能なおから超高度迎撃機としても使用された。だが、開発当初は加速時に強いG（重力の値）がかかるため、実質的にギャプランは強化人間にしか扱えない機体だった。だが、のちに改良され、一般兵でも操縦できるようになっている。

本機のもっとも特徴的な部分が、両腕に取り付けられた可動式のバインダーだ。

これを噴射することによって、優れた加速性と急激な姿勢制御を実現しており、劇中でもこれを最大限にいかしたドッグファイトを展開している。

さらに、このバインダーはスラスターだけでなく、シールドやビーム砲も兼ねている。攻防の要をすべて兼用したユニットというのも、モビルスーツ史においても極めて稀で、ギャプランのアイデンティティーそのものがこれだといっても過言ではない。

ほかの武器としては、ビーム・サーベルを2本装備しているが、これは基本的には緊急用のものとされている。しかし、劇中での活躍を見れば、その有効性は十分だったようだ。

また、長距離移動の際にはモビルアーマー形態でブースターユニットを装着して移動することもできる。これも大気圏内外を問わず使用可能で、しかも大気圏離脱さえも可能とされている。

しかし、ギャプランはやや大型のこともあり、小回りが利かない。ヤザンをして「動きが硬い」と言わしめるのはそのせいだが、しかし総合的に見れば加速性に優れた高性能な機体だといえる。

ギャプランは、あのZガンダムと肩を並べるほどの戦闘機と人型兵器が一番理想的に融合した可変機といえるだろう。

得意ではない狭い空間での接近戦で、Zガンダムをあと一歩まで追いつめていることは、本機の実力を証明している。



ユニークな姿に支えられた、大気圏内最高の空戦モデル

MRX-044

アツシマー

モビルアーマー形態



SPEC

地球連邦軍初の可変試作モビルアーマー。全高
19・3m。重量 41・1t。主な搭乗者はブラン・
ブルターク、アジス・アジバ。

▽空 飛ぶ円盤、アメリカ大陸に襲来

地球連邦本部「ジャブロー」攻略作戦に失敗したエウーゴは、カラバの力を借りてケネディ空港からシャトルでパイロットを宇宙へあげようとしていた。そこへ、連邦軍の部隊が攻撃を仕掛けてくる。その指揮官機となるのが、ブラン・ブルタークの「アッシマー」である。

水面すれすれに飛ぶその機体は、巨大な円盤のような奇怪な形をしており、まるでかたつむりの殻を思わせるものだった。

アッシマーはそのまま単独で空中を飛行し、対地攻撃で空港を爆撃する。空を自在に飛び回り、モビルスーツ形態への変形もこなす本機は、縦横無尽に周囲を圧倒。

サブ・フライト・システムを出撃させていないエウーゴ側にとって、この戦いは不利というほかになく、苦戦を強いられたあげく、ロベルトの「リック・ディアス」が撃破されてしまう。そして、アッシマーは、発射したシャトルを超高高度まで追尾するという荒技まで披露する。しかし、変形途中の胸部を「ガンダム Mk・II」に攻撃され、あえなく撤退する。その後、

空を飛べない機体にとって、単独で飛行できるアッシマーの対地攻撃は恐怖以外のなにものでもない。



プランのアッシマーは、北アメリカ大陸での大型輸送機「アウドムラ」を追跡するように、ここにあるごとに出撃。圧倒的な飛行能力と機動性を武器に、エウーゴのモビルスーツを翻弄する。特に、ギャプランで襲撃したあとの出撃ではアウドムラを、ロケット発射作戦では Mk・II をあと一歩で撃墜するところまで追いつめた。しかし、それらは、アムロ・レイの活躍で未遂に終わる。そして最後は、アムロのリック・ディアスによって撃破されてしまう。しかし、見た目のユニークさに反して、アッシマーの脅威は計り知れないものがあつた。空からの恐怖。そんな言葉がふさわしい機体である。

ちなみに、アッシマーはこの戦いで降いくつか生産され、一部がティターンズに運用されている。それがダカールでの議会を警備していたアッシマー隊で、クワトロ・バジーナがダカールで演説を行っている最中、エウーゴの部隊を迎撃していた。

このなかでも一番活躍していたのがアジス・アジバのアッシマーで、通信施設へ向かう「ハイザック」に体当たりをしてこれを食い止めたり、「Zガンダム」のピンチに「バイアラン」の前に立ちのぼってこれを阻止するなど、意外な見せ場が多かつた。本機のユニークなデザインの印象もあるせいか、こうした悪役ではないアッシマーもまた妙に似合っている。

▼ 戦闘機も顔負けの飛行能力

アッシマーは、単独で大気圏内を飛行可能な可変モビルスーツである。地球連邦軍初の可変試作機で、主にモビルアーマー形態での運用に重点を置いて開発されており、垂直離着陸が可

能な戦闘機的な発想に、モビルスーツ形態への変形を付加させたものだといえる。

また、本機は生産性やコストパフォーマンスにも優れており、地上防空用戦力として多数生産されている。

本機最大の特徴は円盤形のモビルアーマー形態で、これは機体構造自体に空力特性を持たせたりフィティングボディとなっている。その形状と熱核ジェットエンジンを採用しているおかげで、アッシマーは戦闘機とは比べものにならないほどの飛行能力と大推力を実現している。また、アッシマーは駆動部にマグネット・コーティングを施行していることで、わずか0・5秒で変形することができる。

武器は大型ビーム・ライフルしかないが、これはどちらの形態でも使用することができる。しかも火力も高いので、敵機にとっては十分脅威だったといえる。また、劇中では敵機のビーム・サーベルを奪うなどの場面が見受けられており、近接武器がないなりに、ある程度は戦い方でカバーできたようだ。

ただし正直アッシマーは、空中戦で、後発のギャプランには及ばない。しかし、もともとギャプランが宇宙用だったことを考えると、大気圏内においてアッシマーは最高の空戦戦力だといえる。

モビルスーツ形態でも飛行性能はかなり高く、空中で自在に移動しながら攻撃するシーンが多く見られた。



サイコミュを搭載した「破壊の巨人」

MRX-009

サイコ・ガンダム



モビルフォート形態

SPEC

サイコミュが搭載された、ニュータイプ専用可変モビルアーマー。全高40・0m。重量214・1t。搭乗者はフォウ・ムラサメ。



△ フォウ・ムラサメの運命を翻弄した「黒いゆりかご」

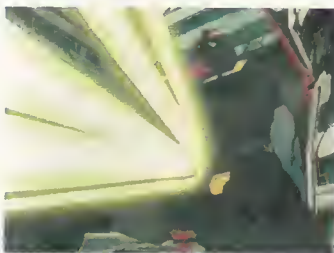
カラバの巨大輸送機「アウドムラ」を追撃する、巨大輸送機「スードリ」に、ニュータイプ研究機関「ムラサメ研究所」から新型機が到着した。黒いカラーリングのその機体は、ピラミッドを思わせる異様な形をしており、しかもあまりの巨体さゆえにドックに入らず、スードリにつり下げられて輸送される。これが「サイコ・ガンダム」の登場であった。

サイコ・ガンダムは、突如ホンコン・シティへと現れ、巨体をビル群のなかへと沈めつつ進軍。カミーユ・ビダンの「ガンダム Mk・II」を発見するや、街中にもかかわらずメガ粒子砲を轟砲する。しかもそのボディはビームを跳ね返し、さらにはビルを破壊しながら、なんとモビルスーツ形態へと変形。ビルに手をかけて出現したサイコ・ガンダムは、Mk・IIの倍以上はあろうかという巨体だった。

「破壊の巨人」と呼ぶにふさわしい本機は、なおも破壊行動を止めず、ホンコンを瞬く間に火の海にした。その威圧感と暴挙ぶりは、まるで怪獣映画そのものであった。

そんな圧倒的な強さを誇るサイコ・ガンダムだった

ホンコン・シティを破壊しまくるサイコ・ガンダム。その姿は、狂える鉄巨人といったところだろうか。



が、カミーユの放つブレッシャーに気圧され撤退してしまう。サイコミュシステムで強くつな
がれた搭乗者、フォウ・ムラサメと本機の関係は、彼女のメンタルが反映される弱さがあった
のだ。

二度目のホンコン攻撃やアウドムラ襲撃でも、終止カラバを圧倒しながら、本機が Mk・
II を撃墜できていないのはそのせいである。その後、カミーユと恋仲になったフォウが命を賭
してカミーユを救ったため、サイコ・ガンダムはスードリとともに太平洋へと散った。

しかし、この激闘から数ヶ月後、サイコ・ガンダムはティターンズの基地「キリマンジャロ」
攻防戦で、フォウとともに再び敵として姿を現す。脳波コントロールによる遠隔操作も可能な
2号機が製作されていたのだ。しかし戦闘中、ジェリド・メサの「バイアラン」のビーム・サ
ーベルからカミーユをかばい、フォウは死亡。本機も活動不能となってしまふ。フォウにとっ
てサイコ・ガンダムは、悪夢しか見せない黒いゆりかごでしかなかったのである。

▽ 操縦者の精神的なコンディションに左右される不完全さ

サイコ・ガンダムは、ティターンズがニュータイプ専用機として開発した可変モビルアーマ
ーである。その容姿はガンダムに似ているものの、全高は通常のモビルスーツの倍以上という
巨体を誇っている。本機は、地球連邦軍初の本格的なサイコミュ搭載機で、火器管制から機体
制御にいたるまでサイコミュによって操作される。しかも、遠隔操作までサイコミュで行うこ
とができる。そのため、搭乗者に過大な精神的負担をかけ、実質的には強化人間専用機となっ

ている。

本機のモビルアーマー形態はモビルフォートレスと呼ばれ、巨体ゆえに輸送が困難な本機をミノフスキー・クラフトによって空中浮遊させることで、現場への移動を容易にさせている。また、Iフィールドを搭載し、ビーム攻撃をもともしない。そのためデフエンス面では、ほぼ鉄壁だったといつてよい。

サイコ・ガンダムの武器はすべて内蔵型となっている。ボデイには3連装拡散メガ粒子砲、頭部の口には小型メガ粒子砲、また計10基ものビーム砲を装備している。圧倒的な火力を誇るが、残念ながらビームは装備されていない。

全体的に見れば、本機の化け物じみた実力は群を抜いている。しかし、操縦者もマシンの一部のように扱う本機のコンセプトは、操縦者の精神的なコンディションに左右されるといふ不完全さもある。実際、エウゴのエースパイロットを倒したなどの実績はない。しかし、それはフォウに人間らしさが残っていたからにはかならない。

サイコ・ガンダムの機微は、彼女の苦悩そのもの。そういう意味で、本機はサイコミュ搭載兵器の功罪を訴え続けた存在だったのかもしれない。

内蔵ビーム砲の多さはハンパではない。ほぼ死角のない攻撃網、圧倒的な火線はグリプス戦役の機体中でも群を抜く。



可変機時代の到来を宣言した偉大なる先駆者

PMX-000

メッサーラ

モビルアーマー形態



SPEC

資源採掘用大型艦「ジュビトリス」で開発された試作可変機。全高 23・0m。重量 37・3t。
主な搭乗者はハブテマス・シロッコ。

V 迫りくるバプテマス・シロッコの脅威

謎の敵に襲撃を受けている、往還シャトル「テンプレーション」の救出に出撃した「百式」と「ガンダム Mk・Ⅱ」の前に、巨大モビルアーマーが姿を現す。ブースターを噴射して宙域を駆け抜け、間隙を縫うようにしてテンプレーションに一撃を加え、あつという間にその場を去っていった。この機体が「メッサーラ」である。

そして本機は、地球連邦軍本部「ジャブロー」攻略作戦中のエウーゴ艦隊にむけて出撃する。1機のみながら陣営の背後をついたことで、巡洋艦「サラミス改」を撃沈し、「ジムⅡ」を2機同時撃破するなど、華々しい戦果をあげる。さらには迎撃に出た「リック・ディアス」とMk・Ⅱの目の前で、モビルスーツ形態へ変形。両肩には大型ブースターユニット。ボディに埋もれた頭部には、スリットの間で不気味に光るモノアイ。紫を基調としたカラーリング。鋭角的なデザインのボディ。その巨大な人型は、戦場に畏怖ばかりをまき散らすものだった。

その恐怖の姿を鼓舞するかのようには、メッサーラはさらに攻撃の手を緩めない。ビーム・サーベルでリッ

圧倒的な推進力を武器に、戦場を駆けるメッサーラ。ジムⅡ2機を同時撃破するなど、ポテンシャルは桁違いだ。



ク・ディアスの右腕をたたき落とす。再びモビルアーマー形態に変形して、猛スピードで戦場を駆け抜ける。しかし、この戦いの最中、シロッコはクワトロ・バジーナのプレッシャーに嫌気がして戦線を離脱。可変モデルの強烈なインパクトだけを残し、メッサーラはその場を去るのであった。本機はその後、長らく劇中には登場しなかった。

しかし、シロッコのメッサーラは「ガブスレイ」の性能テスト中への乱入という形で復帰。そして、サラ・ザビアロフが搭乗して「Zガンダム」を迎撃したり、レコア・ロンドが搭乗してスペース・コロニー「サイド2」の「21バンチ」コロニーへの毒ガス作戦などに投入された。奇しくもシロッコを愛する女性たちによって操られており、本機はまるで彼への忠誠心を試すようなポジションとなっている。いろいろな意味でメッサーラは、シロッコの脅威を示しながら「グリプス戦役」を駆け抜けたのである。

▼木星の強い重力下での運用を想定し、抜群の機動性と加速性を誇る

メッサーラは、シロッコが設計し、資源採掘用大型艦「ジュビトリス」内で製作された可変モビルアーマーである。木星の強い重力下での運用を想定し、大出力のスラスタユニットを搭載しており、機動性や加速性は群を抜いている。

しかも脚部や尾部にもスラスタがあるため、機体スベックよりも推進力は高く、実際の総推進力はあるの「ギャプラン」をも凌駕している。また、機体の各所にはスタビライザーもあり、全高30mという巨体にもかかわらず、運動性もかなり高い。



本機は可変機としては最初期にムーバブル・フレーム（骨格構造）を採用しており、0・5秒で変形することができる。可変機のスタンダードなスタイルはこの機体をきつかけにはじまったといつてよい。ちなみに、本機は木星から地球への帰還中に製作されているため、実際に木星圏内で運用されたわけではないようだ。

武装は、腕部ミサイルポッド、腕部クロー、脚部クロー、ビーム・サーベルなどを搭載している。一番特徴的なのが、スラスターユニットに内蔵された大型メガ粒子砲。高い火力を誇るのもちろんのこと、ジョイントによって広い射角で放つことができ、ビーム・サーベルで敵を斬りつけながらメガ粒子砲を撃って追い撃ちするといった奇抜な戦法もこなすことができる。

そんな、ハイスベックなメッサーラは、実は劇中で撃墜シーンが確認されていない。にもかかわらず、後進機に席を譲るようにして、なぜか戦場からフェードアウトする。しかし、「可変モビルアーマー」という新たなコンセプトの機体の存在はインパクトを残した。

メッサーラは、その後のグリプス戦役において、可変機が全盛を極めることを宣言した偉大なる先駆者だったといえるだろう。

巨体のわりに運動性能はかなり高い。モビルスーツ形態でZガンダムの攻撃を避けるなど、なかなかの芸当である。



アーガン隊を何度も窮地に追い込んだ可変モビルスーツ

RX-139

ハンブリアビ

モビルアーマー形態



SPEC

ティターンズの試作可変モビルスーツ。全高19・9m。重量34・6t。主な搭乗者はヤザン・ゲープル。



Zガンダムを撃墜寸前にまで追い込む

ティターンズの戦艦「アレキサンドリア」の攻撃を受けた、強襲巡洋艦「アーガマ」隊は、激しい戦闘の末になんとかこれを退ける。そして傷ついた船体の修理と補給のため、月面都市「フォン・ブラウン」へ入港した。

しかし、パプテマス・シロッコからアーガマ破壊の命を受けたサラ・ザビアロフも、新型可変モビルスーツ「ハンブラビ」でフォン・ブラウンへ来ていたのだった。

第31話で初登場したハンブラビは、尖った三角錐の頭や上下一対になったモノアイ、ヒレのような部品など独特の形状をしており、かなり印象的なモビルスーツだ。初登場時はメカニックを同行して出撃しており、フォン・ブラウンへ到着したときの会話からも、試運転を兼ねていたようすがうかがえる。

このときはサラが搭乗したが、その後、アレキサンドリアからパプテマス・シロッコの戦艦「ドゴス・ギア」へ転属となった、ヤザン・ゲーブルの搭乗機となっている。

ヤザンがパイロットになった直後の戦闘では、カミ

ほかのモビルスーツとはかなり形状が異なる機体だったが、その活躍ぶりはこれまでのどの敵機よりも凄いものだった。



「ユ・ビダンの「Zガンダム」を圧倒し、あわや撃墜というところまで追い込む活躍を見せた。しかし、小惑星「アクシズ」から発進してきたハマーン・カーン率いる「ガザC」の部隊に阻まれ撤退した。

このうち、ヤザンが呼び寄せたラムサス・ハサとタンケル・クーパーもハンブラビに搭乗し、3機編隊で行動するようになり、これ以降、優秀なパイロットを得たハンブラビは機体性能を如何なく発揮し、幾度となくZガンダムを窮地に追い込むのだった。

▽ 白 兵戦に優れ、安定した機動性をもつ機体

ハンブラビは、ティターンズの拠点である「ゼダンの門」(旧宇宙要塞「ア・バオア・クー」)で製作された、可変モビルスーツである。同時期に開発されていた「ガブスレイ」が、複雑な変形機構と大出力、高火力をもった機体なのに対し、ハンブラビは単純な変形機構に通常のモビルスーツほどの火力と、量産機に近い性能の試作機であった。

しかし、搭載しているロケットモーターの燃焼効率が非常に優秀だったため、安定した速度で機動性を保ちつつ、長時間の作戦行動が可能であった。

武装には、射撃武器として両腕に1門ずつ内蔵されたビーム砲と背面に装着されたビーム・キャノン2門を装備。変形時にはビーム・キャノンが主力となるが、モビルスーツ形態でも上部にスライドさせることで正面への攻撃が可能のため、劇中では主力武器となっていた。

腕部のビーム砲はモビルアーマー形態でも射撃が可能で、追いすがるZガンダムに対し、

逃げながら使う場面もあった。

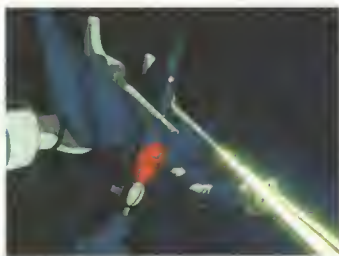
白兵戦用としては、ビーム・サーベル、腕部に装着したクロウ、海ヘビ（電磁兵器）、機体背面下部のテールランスなどが装備されている。

主に使用していたのはビーム・サーベルだったが、腕部のクロウは押さえ込まれた場合や変形時に使用しており、使用頻度も高かった。テールランスも、密着した敵に使用するもので、劇中で「メタス」を破壊している。

海ヘビは、ワイヤーで敵を捕捉し、電流を流す武器だが、相手の動きを止めるという意味も大きく、3機編隊による連携攻撃で「リック・ディアス」を撃破する場面も見られた。

3機編隊での初出撃で使用していたクモの巢は、この海ヘビと同じワイヤーを網状にしたもので、展開した網で相手の動きを止めて、海ヘビ同様に電流を流して攻撃する武器だった。また、フェダーイン・ライフルやビーム・ライフルを装備して出撃していたが、これはあくまで借りもので、正規の装備ではないようだ。ハンブラビは、飛び抜けて優れた機体ではなかったが、優れたパイロットに性能を引き出された結果、高い戦果をあげることができたといえるだろう。

ビーム・キャノン、モビルスーツ形態でも真正面に射撃が可能で、白兵戦をしながら撃てるという利点があった。



複雑な変形機構と高火力の武器が魅力の可変機

RX-110

ガブスレイ

モビルアーマー形態



SPEC

ティターンズの試作可変モビルスーツ。全高
18・5m。重量32・6t。主な搭乗者はジェ
リド・メサ、マウアー・ファラオ。



▽ガンダムMkⅡを追いつめる

地球へ取り残されていたカミーユ・ビタンと「ガンダムMk・Ⅱ」は、恋仲となったティターンズの強化人間、フオウ・ムラサメの手引きで宇宙へ帰還した。一方、ティターンズの戦艦「ドゴス・ギア」では、パプテマス・シロッコのもとに配属となったジェリド・メサとマウアー・ファラオが、新型モビルスーツ「ガブスレイ」のテストを行っていた。

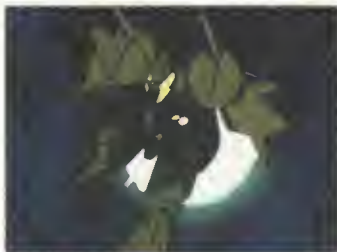
カミーユの存在をプレッシャーとして感じ取ったシロッコの命で、ジェリドが索敵に出撃。優れた機動力で、エマ・シーン搭乗の「リック・ディアス」を翻弄し撃破すると、ビーム・ライフルをかわしつつMk・Ⅱの背後を取るなど、戦いを優勢に進める。

しかし、ジェリドが余裕を見せたため、援軍に現れたアポリーが搭乗する「Zガンダム」のメガ粒子砲に被弾。自機を破壊してマウアー機に乗ったジェリドは、Zガンダムの追撃を振り切って撤退した。

結果として、Mk・Ⅱにとどめをさし損なったばかりか、ガブスレイ機を失なった。

初登場の演習のシーンでは、ジェリドとマウアーが

これまでのジェリド搭乗機とは異なり、ガブスレイは、カミーユのZガンダムを相手に堂々と渡り合った。





ガブスレイの主力武器であるフェダーイン・ライフル。長い銃身からビームの刃を形成し、サーベルとして使える。

軽快な運動性能を披露。モビルアーマー形態は虫を思わせる形状で、ファンの間でも好みが分かれる機体だ。その後のジェリドは、あっさり撃退されていたこれまでとは違い、新型のZガンダムに乗り換えたカミーユと戦いながら、逆にZガンダムを追い込むシーンも見られた。このことから、かなり高い性能であることがうかがえる。

コストが高く、量産できない機体

ガブスレイは、シロツコの設計をもとに小惑星基地「ルナツー」で開発された可変モビルスーツである。「ルナツー」で開発された可変モビルスーツである。本機は試作機だが、同時期に開発された「ハンブラビ」に比べて非常に複雑な変形機構をもっており、機体の整備がしにくいという問題があった。また、高火力の射撃武器の装備などで機体の製造コストが高額なこともあり、とても量産機には適さない機体だったのである。よって、劇中に登場したのは、ジェリドとマウアーの機体のみだった。

武装には、頭部に機関砲を1門と両肩にメガ粒子砲を内蔵し、腕部には2本ずつ、計4本のビーム・サーベルを装備。携行火器として、大火力のフェダーイン・ライフルが用意されている。メガ粒子砲は、戦艦の機銃座のように基部から動くため、広い射角をもっている。フェダ

ライン・ライフルは、艦艇の残骸を一撃で破壊するほどの威力があり、本機の主力武器となっていた。また、銃床のリミッターを外すことで、ビーム・サーベルとしての使用も可能となっている。フェダーイン・ライフルは大型で両手で使用するため、このビーム・サーベルで戦うシーンが意外と多かった。

モビルアーマー形態では、各所のアーマーを前面に展開して耐弾性を増しているほか、22基のスラスタをすべて後方の一点に向けてすることで、驚異的な加速性能を得ている。またメガ粒子砲はもちろん、フェダーイン・ライフルも下部にマウントすることで使用可能となっており、火力はまったく落ちることはない。

このほか、脚部に内蔵されたクローアームも使用可能でモビルアーマー形態でも接近戦も可能となっている。モビルスーツの手足程度なら握りつぶせるほどのパワーをもつが、実はモビルスーツ形態でも脚部のみを変形させて使用することができる。劇中でも敵を完全に押さえ込む場面が見られた。

このように本機は、可変機のなかでも、かなり優秀な部類に入る。より優れたパイロットであれば、さらなる戦果をあげられたことだろう。

Zガンダムにはかわされたが、脚部のクローアームで敵を押さえ込めば、ほぼ確実にしとめることができる。

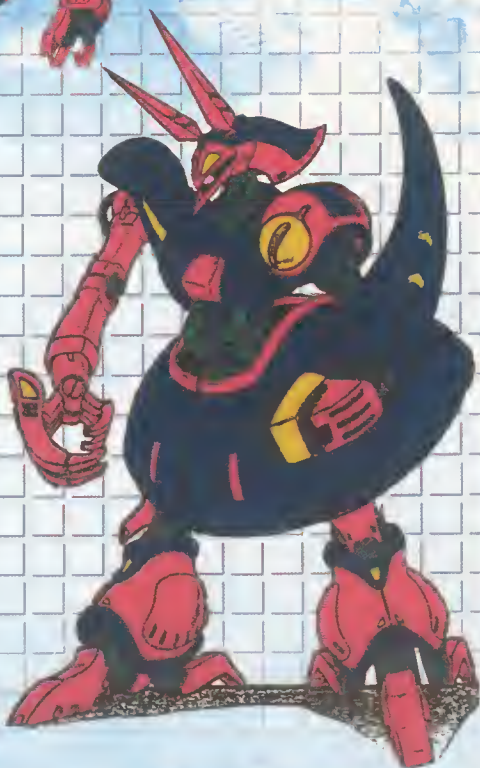


グラブプロをベースに開発されたニュータイプ用モビルアーマー

NRX-055

バウンド・ドック

モビルアーマー形態



SPEC

ティターンズのニュータイプ専用可変モビルアーマー。全高 27・3m。重量 82・7t。主な搭乗者はロザミア・バダム。

特異な形で人気のあるモビルアーマー

ティターンズは、コロニー・レーザー「グリプス2」を移動するため、陽動作戦としてスペース・コロニー「サイド2」の「21パンチ」コロニーへ毒ガス攻撃を仕掛ける。

表層意識をロザミイとして強襲巡洋艦「アーガマ」に潜入していた、ティターンズの強化人間ロザミア・バダムは、本来の人格を取り戻すと戦艦「ドゴス・ギア」へと戻り、同じく強化人間であるゲーツ・キャパとともに、可変モビルアーマー「バウンド・ドック」のテストを行う。

第42話で初登場したバウンド・ドック。最初に目にするのはモビルアーマー形態だが、卵を思わせるようなツルンとしたフォルムをしていた。モビルスーツ形態も、頭部がキツネのような形状をしており、これまでに登場した可変機とは違い、どこか可愛らしさすら感じる機体だ。

ロザミア機とゲーツ機の2機が登場したが、サイコミュの調整をしていた科学者のローレン・ナカモトが「能力査定をしなければ」といつていたように、まだまだ調整段階の機体でもあった。

また、ゲーツ機にはゲーツのほかにナカモトも搭乗

特異な形からか、活躍のわりに人気の高いバウンド・ドック。モビルアーマー形態は、どこか愛嬌すら感じられる。





パイロットが精神不安定な強化人間だったため、戦闘シーンがあまり見られなかったのが残念だ。

▽グラブロをベースに開発される

バウンド・ドックは、ジオン軍の水中用モビルアーマー「グラブロ」をベースに開発された機体で、ニュータイプ研究機関のひとつである「オークランド研究所」で調整された。

普通の人間も動かすことはできるが、機体制御にサイコミュを使用するニュータイプ用の機体であるため、ニュータイプか強化人間でなければ、性能をフルに発揮することはできない。

しており、戦闘に出るというよりはロザミアを監視する目的で使用されていた。そして、機内からロザミアの脳波レベルの調整を行っていた。

21バンチコロニーをめぐる戦いで、ロザミア機が「Zガンダム」と交戦したが、彼女の精神が不安定だったため、あまり本格的な戦闘にはならなかった。ゲーツ機は、レコア・ロンドの「パラス・アテネ」と交戦するシーンがあったが、「サイコ・ガンダム Mk・II」に乗り換えていたロザミアが戦死した影響を受け、精神に異常をきたしてこれまたほとんど戦うことなく終わった。最終決戦では、ジェリド・メサがロザミア機

下半身が大きく上半身が極端にスリムなのは、モビルアーマー形態時に上半身を下半身内に収納するため、その影響か左右非対称という特異な形状をしている。

武装は、ビーム・ライフルとビーム・サーベル、左腕部に内蔵した拡散メガ粒子砲のみと非常にシンプルだ。ただし、右手がマニピレータではなくクローになっているので、どのみち携行兵器はひとつしか装備できないため問題はないようだ。

モビルアーマー形態で頭部にあたる箇所は、実は左腕のアーマー部分であり、頭部は完全に下半身に収納されてしまう。そのため、左腕の先端にも小さなモノアイがついている。

また、モビルアーマー形態では、ビーム・ライフルが右側面に装着され、そのまま使用することができる。頭部にあたる左腕に内蔵された拡散メガ粒子砲もそのまま使用できるので、火力的にはまったく落ちることはない。

劇中の戦闘では、ほぼモビルアーマー形態で戦っており、高い運動性能で攻撃をかわしつつ、ビーム・ライフルを使用していた。

「百式」との戦いでは、ビーム・ライフルをほとんど受けつけないなど防御面でも高性能だっただけに、パイロットに恵まれなかったのが惜しまれる。

どちらの形態でも火力は同じのため、射撃戦ならモビルアーマー形態のほうが表面積が小さい分、有利といえる。



モビルフォートレス形態



MRX-010

サイコ・ガンダム Mk II

さらに凶悪・鉄壁になった悪魔のガンダム

SPEC

ニュータイプ専用機「サイコ・ガンダム」の二代目。全高 39・98m。重量 187・8t。主な搭乗者はロザミア・バダム。





破壊の巨人、再び降臨

月面都市「グラナダ」への小惑星基地「アクシズ」落下を阻止せんとする、強襲巡洋艦「アーガマ」。そのアーガマに向けて戦艦「ドゴス・ギア」から、巨大な機体が出撃する。「サイコ・ガンダム」の二代目、「サイコ・ガンダム Mk-II」だ。

「Zガンダム」を視認すると、本機は本格的に猛攻を開始するが、搭乗者のロザミア・バダムの不安定な精神状態が終始本機を翻弄。最後には無差別にメガ粒子砲を乱射しながらアーガマに突っ込むものの、Zガンダムに頭部を撃ち抜かれ撃破されてしまう。

大破したと思われた本機はその後、「機動戦士ガンダム ZZ」に再登場。ダブリンへのコロニー落としの直後、強化人間のブルツォがサイコ・ガンダム Mk-II に搭乗し、アーガマに攻撃を仕掛けてきたのだ。

このとき、「グリプス戦役」には見せなかったモビルフォートレス形態での飛行も初披露。さらには、「キュベレイ Mk-II」に対抗してリフレクター・ビクトを展開したり、「ZZガンダム」には有線式サイコ

初代機の2倍もの砲門からメガ粒子砲を乱射する、サイコ・ガンダム Mk-II。四方に火線が広がり、死傷はない。



ミュハンドをお見舞いするなど、本来の性能を存分に發揮する。なにしろZZガンダムのエンジンが焼けてしまうほどだ。火力と機動性は驚異的だったに相違ない。

そして、ZZガンダムをあと一步まで追いつめたが、そこへエルピー・ブルのキュベレイMk・IIが乱入。彼女の放つ思念をまとったキュベレイMk・IIが、もろとも自爆しようとするが、それによって中破されてもおサイコ・ガンダムMk・IIは稼働していた。そして、ブルの死に怒るジュード・アーシタの思念によるハイパービーム・サーベルに一刀両断されて、ようやく大破する。結局、戦果は大したことはなかったが、初代機をさらに凶悪にしたその姿は忘れることができない。

▼初代機からの戦闘データを蓄積し、戦闘マシンと化した悪魔

サイコ・ガンダムMk・IIは、サイコ・ガンダムの欠点を見直して再設計された巨大可変モビルアーマーである。そのため、サイコミュ搭載、Iフィールド、モビルフォートレス形態への変形など、初代機と多数の共通点が見受けられる。

しかしスペックだけを見ると、スラスタ推力は3倍以上に跳ね上がり、機体重量も軽量化と、初代機を上回る機動性を有している。ちなみに、コクピットである頭部は、脱出ユニットにもなっている。

加えて、サイコミュ搭載機の特徴でもあるビット兵器も装備している。このリフレクター・ビットは、敵のビーム砲を反射しつつ、攻撃もできるという攻防一体の兵器となっている。

そのほかの武器も、初代機よりパワーアップしており、メガ粒子砲は全身に20基装備。さらに腕には、有線式のサイコミュハンドを採用しており、手の部分を開けばビーム・ソードが飛び出す仕組みになっている。オールレンジ攻撃も、近接攻撃もこなせるようになったことで、死角ゼロの鉄巨人となっている。

そんな、無敵にも思えるサイコ・ガンダム Mk-IIだが、初代機同様、パイロットである強化人間に強い精神的な負荷がかかるうえに、パイロットのメンタルに大きく左右されるといふ点は変わらなかった。

しかも、本機のサイコミュシステムは、初代機時代からのデータが蓄積されており、その思念が搭乗者に大きく影響を及ぼしていた。ロザミアが情緒不安定だったのは、それに起因している。

そんな本機も、ブルツという攻撃的な強化人間をパイロットに迎えたことで本領を発揮した。

サイコ・ガンダムのスタイルはやっと完成したわけだ。

だが同時にパイロットは、人間味のない戦闘マシンのような者にしかできないことも証明した。まさに悪魔の機体といえるだろう。

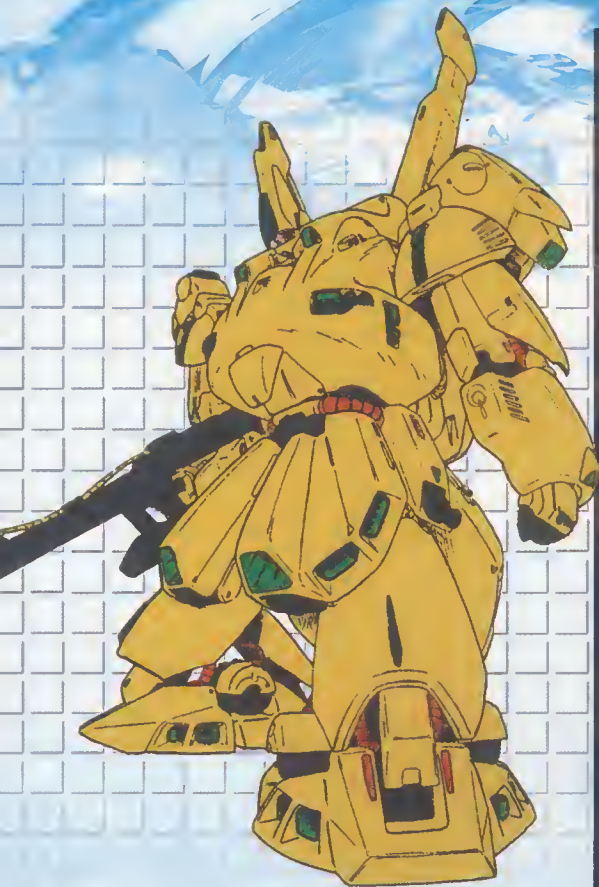
有線式サイコミュハンドやリフレクター・ビットなど、初代機にはないオリジナル武器を多数装備している。



機動性や運動性を極めた超実力派

PMX-003

ジ・O



SPEC

バブテマス・シロッコが設計した、カスタムメイドの重モビルスーツ。全高 24・8m。重量 57・3t。搭乗者はバブテマス・シロッコ。



見た目を裏切る運動性能

戦艦「グワダン」のハマーン・カーンと接触するべく、パプテマス・シロッコは資源探掘用大型艦「ジユピトリス」から自機を駆り発進する。その際に彼が搭乗した機体が「ジ・O」である。

あまりに肥大化したボディに、細長くてアンバランスな頭部。「グリプス戦役」の機体中でも際立って鈍重なイメージが強いこの機体は、今までのシロッコ設計機とはあまりにも違う姿をしていた。

そして、グワダンでの会談が失敗し、シロッコがジヤミトフ・ハイマンを暗殺すると、両軍は交戦状態に突入。本機も「ボリノーク・サマーン」と「バラス・アテネ」を率いて、ハマーンの「キュベレイ」と戦うこととなる。キュベレイのオールレンジ攻撃に対し、ほかの2機が翻弄されるなか、ジ・Oはこれを見事に回避。さらにはファンネルを撃ち落とす芸当まで披露する。

見た目のイメージとかけ離れた運動性と機動性は、この機体が伊達でないことを証明した。

キュベレイのオールレンジ攻撃を回避するなど、外見からは想像がつかないほどの機動性をもっている。



その後、ティターンズとエウーゴ、アクシズの三つ巴の最終決戦にも、ジ・Oは出陣する。「百式」やキュベレイと交戦しながら、本機はコロニー・レーザー「グリプス2」を潰そうと内部へと侵入し、発信部を次々と破壊する。しかし結局は、レーザーの発射を許してしまい、ティターンズは大半の艦隊を失う。そして最終的にジ・Oは、「Zガンダム」と激突する。

両者の戦いは熾烈を極めたが、カミーユにさまざまな死者の思念が集結し、Zガンダムは超常的な力を発動。それに共鳴するかのように、ジ・Oは動きをからめとられる。そして、ウェイブライダー形態での突撃をコクピット部に受け、大破する。

おおよそシロッコには理解できない形で敗れたジ・O。言い訳できないほど高いポテンシャルを持っているからこそ、シロッコ自身の限界が、ジ・Oには凝縮されていたのかもしれない。

▽ パテマス・シロッコがいきついた、モビルスーツの究極形

ジ・Oは、シロッコが設計した4番目のモビルスーツで、彼の専用機を前提に製作されている。シロッコの類い稀な空間把握能力をいかすために、機体制御を独自のサイコミュで動かし、戦艦級の熱核反応炉を内蔵している。しかも、機体の全身50箇所には姿勢制御用の高機動バーニアも配している。その結果、ボディは鈍重なものとなってしまったが、それを補って余りある運動性と機動性を実現している。

ここで疑問となるのが、あの巨体と脚部で大気圏内の地上で鋭敏に動けたかどうかだ。一応歩行は可能なようだが、本機はもともと空間戦闘を主眼にしているため、基本的に脚部や装

甲はスタビライザーなどを統合した構造となっている。

要するにあの脚部は、空間戦闘での柔軟な姿勢制御を可能にするためのユニットのひとつというわけだ。

ジ・Oのシルエットは、エンジニアとして優秀だったシロツコが、実用性重視のコンセプトを追い求めた末にいきついて誕生した、傑作機の証明とさえいえる。

そして本機の武装は、大型ビーム・ライフルとビーム・ソードだけ。非常にシンプルだが、その攻撃力は申し分ない。

また、腰部のスカートには隠し腕（サブ・マニユビレーター）が内蔵されており、武器を携行することで、接近戦での奇襲に役買うこともあった。

総合的に見るとジ・Oは、ニュータイプ能力をいかす機能が充実していながら、いわゆる「ニュータイプ専用機」と違つことがわかる。ビットもなければ、過剰な火力もない。もともと原初的なモビルスーツのスタイルを追い求め、パイロットの技量を確実に引き出すべく高性能化したにすぎない。

シロツコが求めた究極のマシンとは、ひたすらに自分の手足のように動く非常に純粋なロボットだったのだ。

最後の隠し球、隠し腕は、かなりの可動範囲と汎用性がある。ただのオマケ機能とは思えない。



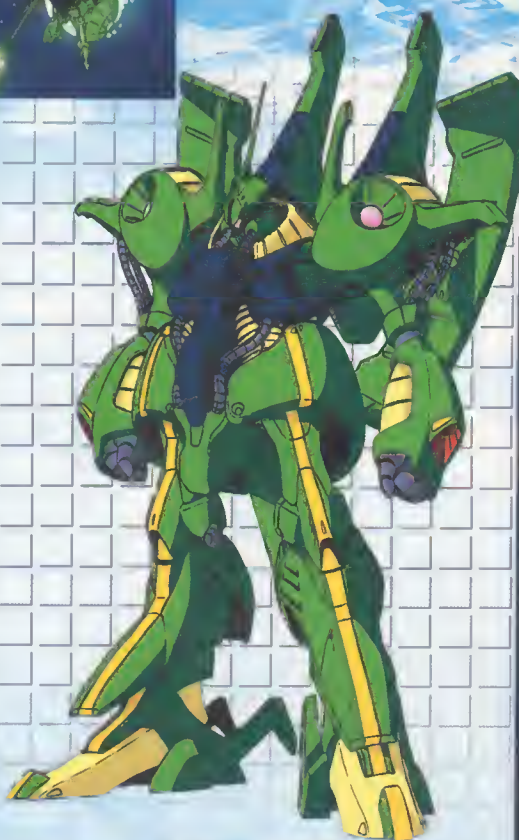


背後に8基の大型ミサイルを装備するこ
ともあったパラス・アテネだが、火力を全
開にする機会はありませんでした。

PMX-001

パラス・アテネ

さまよえる女の情念を背負う武装女神



SPEC

バブテマス・シロッコが設計した、カスタムメ
イドのモビルスーツ。全高 21・6m。重量
65・0t。主な搭乗者はレコア・ロンド。



▼戦艦を撃沈する重火力

第45話で、エウーゴの捕虜となったサラ・ザビアロフの救出を、レコア・ロンドに命じるバテマス・シロッコ。その際、シロッコがレコアに与えたのが、「パラス・アテネ」である。これが、劇中での正式なパラス・アテネの登場シーンであった。

だが、厳密な意味での初登場は第28話で、当時はまだエウーゴだったレコアが、資源採掘用大型艦「ジュピトリス」に潜入した際、格納庫で脚だけが確認されている。

パラス・アテネは、シロッコが独自に開発したカスタムメイドの重モビルスーツである。

多数のビーム砲やミサイルを装備しており、単機での敵艦隊攻撃と、長距離からの味方機支援に特化した機体となっている。

その分、機動性は犠牲になっており、接近戦は不得意であった。

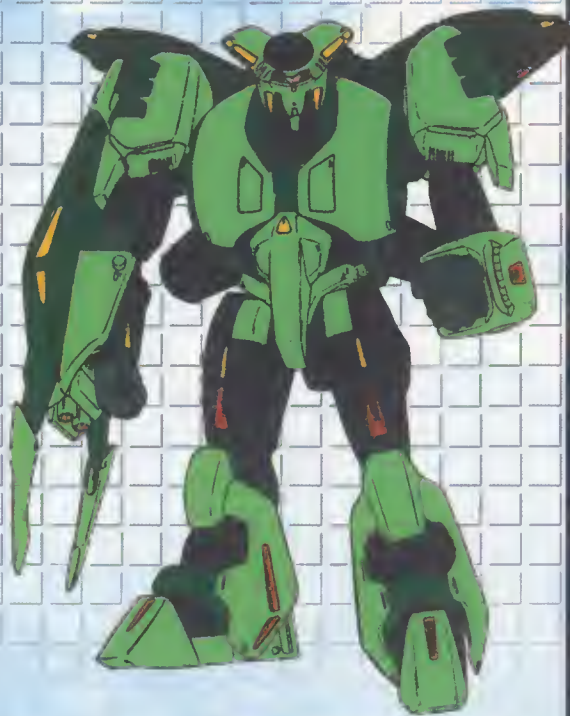
劇中でのパラス・アテネの運用面における最大の活躍場面は、ティターンズの権力掌握を狙ったシロッコの命令を受けたレコアが、バスク・オムの乗船する戦艦「ドゴス・ギア」を撃沈したシーンであろう。火力をいかした戦艦撃沈は、当初の設計目的を最大にいかしたといえる。しかし、それよりも、物語上はレコアの女の情念を体現するマシンとしての印象が強い。

パラス・アテネのアテネとは、ギリシャ神話に登場する、生まれたときから完全武装であった女神アテナの名前から取られている。

その名のついたモビルスーツは、攻撃的に生きたレコアによく似合っていた。



戦艦「グワタン」艦内で待機していたサラは、愛するシロツコの危機を察知し、どっさにビーム・ガンを発射した。



ボリノーク・サマイン

PMX-002

グリプス戦役のパワーバランスを変えた一撃

SPEC

バブテマス・シロッコが設計した、カスタムメイドの偵察用機。全高 19・9m。重量 31・6t。主な搭乗者はサラ・ザビアロフ。



▼索敵能力に特化したセンサーの塊

パプテマス・シロッコは、ジャミトフ・ハイマンとの謁見のために「ゼダンの門」(旧宇宙要塞「ア・バオア・クー」)に向くにあたり、サラ・ザビアロフに、強襲巡洋艦「アーガマ」の動きを監視するよう命令する。このとき初登場し、サラが搭乗するのが、偵察用モビルスーツの「ポリノーク・サマーン」だ。

ポリノーク・サマーンは、シロッコが資源採掘用大型艦「ジュピトリス」艦内で、「ジ・O」、「パラス・アテネ」などと同時期に製造した、カスタムメイドのモビルスーツである。

高機動高出力タイプのジ・O、重武装遠距離攻撃タイプのパラス・アテネに対し、ポリノーク・サマーンは、索敵警戒と情報収集に特化した設計をされている。

このように、シロッコ設計のモビルスーツが、汎用性より、能力特化に重きを置かれているのは、連携による運用を想定しているからであろう。

とはいえ、劇中で見せたポリノーク・サマーンの最大の活躍場面は、その突出した索敵能力によるものではなかった。第46話のハマーン・カーンとジャミトフ、そしてシロッコによる三者会談の際、シロッコの危機を察知したサラは、会場に向けてポリノーク・サマーンのビーム・ガンを発射。その混乱に乗じて、シロッコはジャミトフの暗殺を果たし、ティターンズ内のクーデターに成功する。この一撃が、「グリプス戦役」のパワーバランスを大きく変え、戦局をより混乱させたのである。

新型機の強みをいかして Mk-Ⅱ を苦しめた実力は確かだが、残念ながら大した戦果は残していない。

RMS-108

マラサイ

リック・ディアス並みのスペックを有した影の実力派



SPEC

「ハイザック」を発展させた量産機。全高 17・5m。重量 33・1t。搭乗者はジェリド・メサ、カクリコン・カクーラー。



▽裏取引でティターンズの機体となる

強襲巡洋艦「アーガマ」を追う戦艦「アレキサンドリア」に、新型量産機「マラサイ」が受領される。本機は、さっそくアーガマ攻撃作戦に投入。

ジェリド・メサとカクリコン・カクーラーは、2機で1機に見せる戦法で「ガンダム Mk・II」を翻弄し、マラサイも「ハイザック」を上回る性能を発揮した。

その後マラサイは、エウーゴの地球連邦軍本部「ジャブロー」攻略戦の迎撃にも登場する。この戦いで、カクリコン機は大気圏突入という危険な状況下で Mk・II と交戦。一方のジェリド機は片腕を失いながらも、ジャブロー内で Mk・II とビーム・ライフルで相撃ちしている。それぞれの奮戦は、本機の底力を感じさせるものであった。

マラサイはもともと、アナハイム・エレクトロニクス社がエウーゴに発注されて開発した機体だったが、裏取引でティターンズに受領されている。

武装こそ、頭部バルカン、ビーム・サーベル、ビーム・ライフルと標準的だが、ハイザックをベースに性能を向上させ、さらに装甲にガンダリウム合金を採用しているため、スペック的には「リック・ディアス」と同レベルの傑作機だといってよい。

しかも、本機的设计思想は、のちに「ギラ・ドーガ」にフィードバックされており、一定の評価があったようだ。そういう意味においてマラサイは、「グリーブス戦役」で一番の、影の実力派だったのかもしれない。



初登場時に、ヤザンから「数だけはあるようだな」と評されたバーザム。まさに、量産機の宿命だ。



バーザム

RMS-154

ガンダムMk-IIの量産型として開発された機体

SPEC

ティターンズの量産型モビルスーツ。「グリプス戦役」末期に採用された。全高 19・4m。
重量 40・4t。搭乗者は一般兵。



▼ガンダム系とは思えない外見だが……

ティターンズの基地「キリマンジャロ」に対するカラバの攻撃を、衛星軌道上から援護する作戦に出る強襲巡洋艦「アーガマ」。そこに襲いかかったのが、「ハンブラビ」を操るヤザン・ゲールに率いられた「バーザム」隊である。

衛星軌道上での戦いは、結局、「Zガンダム」と「百式」を、当初の予定になかった大気圏突入にまで追い込んだが、これは、バーザムの活躍によるものではなく、完全にハンブラビの手柄であった。

このようにバーザムは、ほとんど劇中で活躍する機会に恵まれなかった不遇の機体である。ティターンズの採用した最後の量産型モビルスーツではあるが、配備直後に「ゼダンの門」（旧宇宙要塞「ア・パオア・クー」）が崩壊する事件などもあり、実戦に参加した機体数も少なく、名のあるパイロットが搭乗することもなかった。

しかし、これはバーザムの性能が低かったということを意味しない。なぜなら、バーザムは、モビルスーツ開発史的には、「ガンダム Mk・Ⅱ」の量産機という位置づけの機体なのだ。頭部メインカメラがモノアイであるなど、外見からは、ガンダム系とはとても想像できないが、機体の内部構造には Mk・Ⅱのデータがフィードバックされているのである。

もっと早く「グリプス戦役」に投入され、腕のいいパイロットが搭乗していれば、もう少しは活躍できただろうと思われる機体だ。



サイコ・ガンダムは頭部を貫く、バイアランのビーム・サーベル。この一撃が、カミーユに与えた痛手は大きい。



バイアラン

RX-160

変形機構なしで大気圏を高速飛行できるモビルスーツ

SPEC

ティターンズの試作飛行モビルスーツ。全高 18・6m。重量 34・2t。主な搭乗者はジェリド・メサ。



▼ フォウ・ムラサメの命を奪う

ティターンズの基地「キリマンジャロ」攻防戦において、カラバの猛攻に対応するため、ジエリド・メサは、整備員の制止を振り切り、まだ整備中であつた「バイアラン」で出撃する。バイアランは、変形機構なしで大気圏内の高速飛行を可能とすることを目的として設計されたモビルスーツだ。変形なしで飛行するというコンセプトは、変形時のタイムラグを防ぐことと、機体の簡略化による運用のしやすさを意図したためであらう。その目的のため、バイアランは、ほとんど大型ジェネレーターと大出力スラスターのみで機体が構成されているという、特異なデザインとなっている。腕部は小型化され、脚部も着陸時のギア程度の役割しか果たしていない。

武装もすべて内蔵されており、火力全般は低めに抑えられている。その結果、中長距離での戦闘には不向きなモビルスーツとなつたが、高い機動性と空間支配能力を生かした格闘戦では、良好な結果を残した。劇中での、バイアランのもっとも印象的な活躍場面も、その高速格闘能力をいかしたものである。

フォウ・ムラサメを説得するため、無防備な状態にあつたカミーユ・ビダンの「Zガンダム」に、ジエリドのバイアランが突撃を仕掛ける。カミーユは死を覚悟するが、バイアランのビーム・サーベルが貫いたのは、盾となつてカミーユを守つたフォウの「サイコ・ガンダム」の頭部であつた……。こうして、また戦場に悲劇がひとつ生まれたのである。



ハイザック・カスタムで潜伏し、エウーゴのモビルスーツを狙撃していたのは、ソラマとカラというパイロットだ。



ハイザック・カスタム

RMS-106CS

次々とモビルスーツを撃破したスゴ腕スナイパー

SPEC

ティターンズの狙撃用モビルスーツ。全高 18・0m。重量 35・6t。主な搭乗者はソラマ、カラ。



▽百式とも渡り合ったカスタム機

中立スペース・コロニー「サイド2」の「13パンチ」コロニー近辺で、数日のあいだに、エウゴのモビルスーツが9機も不意打ちによって撃破されるという事件が起きた。真相究明のため、クワトロ・バジーナは「百式」でコロニー外壁に沿って偵察飛行をする。すると、そこに狙いましたビームの一閃が――。

モビルスーツ狙撃事件は、この空域に潜伏していたティターンズの「ハイザック・カスタム」の仕業であった。

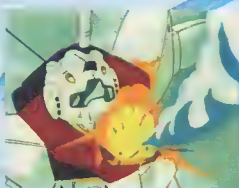
ハイザック・カスタムとは、ティターンズが「ハイザック」をエース用に特化改造したモビルスーツである。ピンポイントでの狙撃を目的とした設計がなされており、そういう意味では、「ジム・スナイパーカスタム」のハイザック版といえるだろう。大きな改造点は、一般のハイザックよりジェネレーターを強化し、ビーム・ランチャーを装備しているところである。

照準器や各部推進器も高性能なものに交換されており、装甲の一部もガンダリウム合金に交換と、あらゆる面でチューンナップが施されている。また、外見的には、両肩の増加装甲と、バックパック、脚部スラスターの形状が、ノーマルのハイザックとの大きな違いだ。

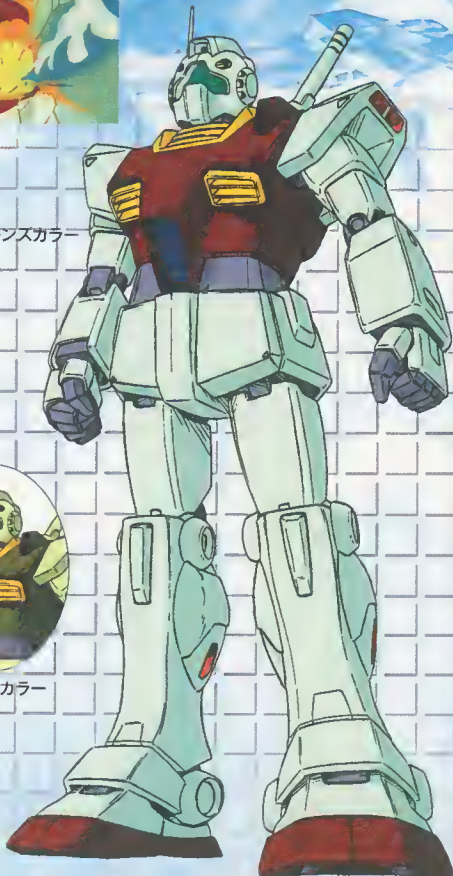
最終的にハイザック・カスタムは、百式に撃墜されてしまうものの、その過程では、百式と互角に戦うという意外性も見せてくれた。

まさに、カスタム機の名に恥じない、隠れた名機ということが出来るだろう。

リック・ディアスのバルカンに撃墜される
ジムⅡ。ジムⅡの装甲にはガンダリウム合
金は使用されていない。



ティターンズカラー



エウーゴカラー

ジムⅡ

RGM-79R/RMS-179

地球連邦軍の正統なる主力量産機

SPEC

地球連邦軍の量産型モビルスーツ。ティターンズとエウーゴでも使用された。全高 18・1m。
重量 40・5t。搭乗者は一般兵。



基本性能は一年戦争時のガンダムを上回る

ティターンズが開発していた新型モビルスーツ「ガンダム Mk・Ⅱ」を、強奪する目的で、スペース・コロニー「グリーン・ノア」に潜入したエウーゴの「リック・ディアス」隊。それを迎撃するために出撃したのが、コロニーの守備にっていた地球連邦軍の「ジムⅡ」である。ジムⅡは、「一年戦争」で活躍した連邦軍の量産機「ジム」の後継機だが、劇中に初登場した時点で、すでに旧式となっていた。先の戦闘場面でも、リック・ディアスに一撃で撃墜されるのだが、それも致し方ないだろう。

標準武装のビーム・ライフルもエネルギー外部充填方式で、この時期主流となっていたエネルギー・バック交換方式と比べると運用面でも威力の点でも見劣りすることは否めない。それでも、旧来のジムと比べれば、後方警戒装置が追加されたことで索敵能力が上がり、アビオニクス（搭載コンピュータ）の交換により通信機能も強化。また、背部主推進器のロケットモーターの数が増えたことで運動性が格段に向上しており、装甲面をのぞく基本性能は、一年戦争の伝説的な名機「ガンダム」を上回っていたともいわれる。

地球連邦軍とティターンズ、エウーゴでも使われ、連邦軍とティターンズでは伝統色の赤と白、エウーゴでは緑と白のカラーリングが施された。連邦軍とティターンズでは、ジオン色の強い「ハイザック」を嫌った将兵により愛用されたが、ほどなく主力量産機は、「ネモ」や「マラサイ」に移っていった。



ガンダムMk.Ⅱと死闘を繰り広げるガルバルディβ。ちなみに劇中では、ただガルバルディとだけ呼ばれている。

第一世代モビルスーツの頂点に立つ高性能機

RMS-117

ガルバルディβ



SPEC

地球連邦軍の量産型モビルスーツ。全高 19・0m。重量 36・3t。主な搭乗者はライラ・ミラ・ライラ。



▽一年戦争に間に合っていたら……

小惑星基地「ルナツー」を母港としている地球連邦軍の巡洋艦「ボスニア」に、エウーゴが「ガンダム Mk・II」を強奪したとの情報が入った。現在、追跡中のエウーゴ艦が強奪をしたに違いないと判断したボスニアのモビルスーツ部隊長ライラ・ミラ・ライラは、自らが率いる「ガルバルディβ」隊の手で、Mk・IIを奪回せんと出撃をする。

ジオン軍が「一年戦争」終戦間際に開発していたモビルスーツを、連邦軍が接収。その機体をもとに終戦後、連邦軍が改修したのが、ガルバルディβである。

ジオン軍で開発されていたときは「ガルバルディα」と呼ばれており、「ゲルググ」の流れを汲むモビルスーツとなっていた。

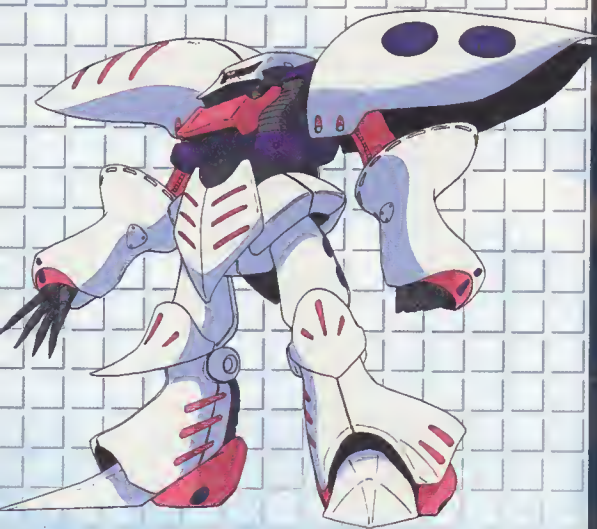
その性能は高く、あと半年早く戦線に投入されていれば、一年戦争の結末は変わったともいわれている。ガルバルディβは、ガルバルディαから基本的な設計変更はなされていない。それだけ、ガルバルディαの完成度が高かったということだろう。しかし、高性能機ゆえ操縦性に癖があり、エースパイロット向きの機体となっている。だが逆にいえば、ポテンシャルさえ引き出せば、次世代モビルスーツとも互角の勝負が可能であった。

事実、ライラは最新鋭機である Mk・II を、ギリギリまで追い詰めている。最終的には破れ去るものの、それは機体の性能差というより、オールドタイプであるライラが、ニュータイプであるカミーユ・ビダンに敗れたということであろう。

強力な武器と高い機動性を備えたハマーン・カーン専用機

AMX-004

キュベレイ



SPEC

アクシズ軍のニュータイプ専用機。全高 18・4m。重量 35・2t。搭乗者はハマーン・カーン。



気品すら感じさせる美麗なフォルム

移動を続けるティターンズのコロニー・レーザー「グリプス2」は、エウーゴの本拠地である月面基地「グラナダ」を、その射程圏内に捉えようとしていた。

事態を打開するため、エウーゴはカミーユ・ビダンを使用者に立てて、ハマーン・カーンにコロニー・レーザーの破壊工作を依頼。ハマーンは専用機「キュベレイ」で、強襲巡洋艦「アーガマ」を訪れるのだった。

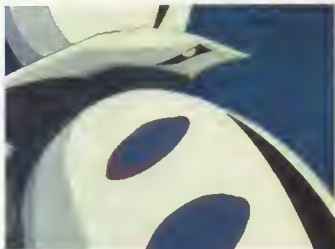
第43話でキュベレイは、ハマーンの専用機として初登場する。

曲線を主体にしたフォルムと白のカラーリングを基調とした機体は、優雅さをも感じさせ、凛とした雰囲気をもつパイロットのハマーンとともに人気が高い。

本格的に活躍するのは、アクシズ軍の戦艦「グワダン」で、パプテマス・シロッコがティターンズの総帥ジャミトフ・ハイマンを暗殺した直後からである。

このときキュベレイは、シロッコの「ジ・O」レ

どこか尖っている硬いイメージの機体が多いなか、曲線を主体としたフォルムのキュベレイは異質な存在だ。



コア・ロンドの「バラス・アテネ」、サラ・ザビアロフの「ポリノーク・サマーン」と3機同時に相手をしていたが、ファンネルを駆使して一歩もひかぬ戦いを見せた。

また、シロツコのジ・Oとは互いに強烈なブレッツシャールを掛け合っており、ニュータイプ同士で超常的な戦いも見せている。

その一方で、簡易型サイコミュのバイオセンサーを搭載した「Zガンダム」との戦いでは、カミィユとの間で精神感應現象を起こしていた。

しかし、「わかり合える可能性」を感じたカミィユとは違い、ハマーンにとって心に触れたことはかえって反発を呼んだようで、「無礼である」と激怒している。

最終決戦では、コロニー・レーザーの内部でジ・Oや「百式」、Zガンダムと交戦。

因縁深いクワトロ・バジーナ（シャア・アズナブル）が搭乗する百式に対しては、とどめをさす寸前まで追い込んでいたが、直接破壊するまでには至らなかった。

百式との戦闘後、キュベレイは登場しなくなるが、主要な艦艇を先に撤退させていたことから、キュベレイも戦場から離脱したものと思われる。

△△△ 代随二との呼び声も高いニュータイプ専用モビルスーツ

キュベレイは、小惑星基地「アクシズ」で開発されたニュータイプ専用モビルスーツである。「一年戦争」時に開発されたニュータイプ専用モビルアーマー「エルメス」の後継機にあたり、サイコミュによって機体制御と遠隔操作で攻撃するファンネルの運用を行っている。

シールドを兼ねて両肩に取り付けられたフレキシブル・バインダーには、メイン・バーニアが3基ずつ内蔵されており、状況に応じて向きを変化させながら機体制御を行う。
また、バインダーを折り疊んで推力を集中させることで、高い加速性能を得ることも可能となっている。

武装としては、両腕部にビーム・サーベル、機体背面下部にファンネルポッドを搭載している。

ほかのモビルスーツとは異なり、ビーム・ライフルなどの携行火器は装備していないが、収納時のビーム・サーベルにエネルギーを収束させずに放つことで、ビーム・ガンとして使用している。

さすがにビーム・ライフルよりは出力が落ちるようだが、モビルスーツ相手なら十分な威力であり、またキュベレイにはファンネルという切り札があるので、火力不足ということはないようだ。

背面に搭載されたファンネルポッドには、ファンネルが12基搭載されており、射出してサイコミュの遠隔操作による無線誘導で敵を攻撃する。

この当時、サイコミュで遠隔操作する兵器を搭載していたのはキュベレイだけで、ファンネルを搭載

ビーム・サーベルと兼用のビーム・ガン。ビーム・ライフルとまではいかないものの、出力はかなり高いようだ。



しているというだけでも、ほかのモビルスーツに比べてかなりのアドバンテージがあったと思われる。

なお、キュベレイのファンネルは、ビームのエネルギーを保持する「エネルギーCAP」という装置を内蔵して小型化に成功したもののだが、その反面、エルメスのビットのように稼働に必要なエネルギーを生むジェネレーターを内蔵してないため、稼働時間は短くなっている。

同時にすべてのファンネルを放てばそれだけ濃密な攻撃が可能となるが、エネルギーが切れたファンネルは、本体に戻してエネルギーの再充填が必要となる。

そのため、その攻撃で相手をしとめられなかった場合、ファンネルを使えない時間ができてしまう。

よって、劇中では数機を同時に相手にする場合や、Zガンダムなどの強敵と感じた相手には多数のファンネルを放出していたが、それ以外では数個で対応している場面が多く見られた。最初に百式を相手にしたときはすべてのファンネルを使用していたが、実は後半はすべてのファンネルを使用しておらず、ハマーンはシャアの百式を少々見くびっていたようだ。

とはいえ、百式はキュベレイやジ・Oに比べるとやはり性能負けの感がある機体だったので、これは仕方ないところだろう。

Zガンダムとの二騎討ちの末に敗れる

「グリプス戦役」ののち、ハマーンは「ネオ・ジオン」を結成。アクシズを拠点としてコロニ

1を占領し、再びエウーゴと戦うことになる。

「第一次ネオ・ジオン戦争」と呼ばれるこの戦いは、次回作となる『機動戦士ガンダムZZ』で語られるが、登場回数はわずかに1回と少ないながらも、キュベレイはハマーンの機体として登場している。

最終話で登場したキュベレイは、ジウド・アーシタの「ZZガンダム」と一騎討ちを行うなか、ハイ・メガ・キャノンの直撃をニュータイプ能力によるバリアーで防ぐなど、超常的な戦いを繰り広げた。

だが最後は、半ば相打ちともいえる形で胴を切られ、パイロットのハマーンとともに宇宙に散った。

なお、『ガンダムZZ』では、キュベレイ以外にもファンネルを搭載した機体が多数登場しており、もはや本機だけの切り札とはいえなくなっている。

しかし、フレキシブル・バインダーによる高い機動性など、機体本体の性能ではほかの追従を許さないものがあり、最高級の性能をもっていたといえる。

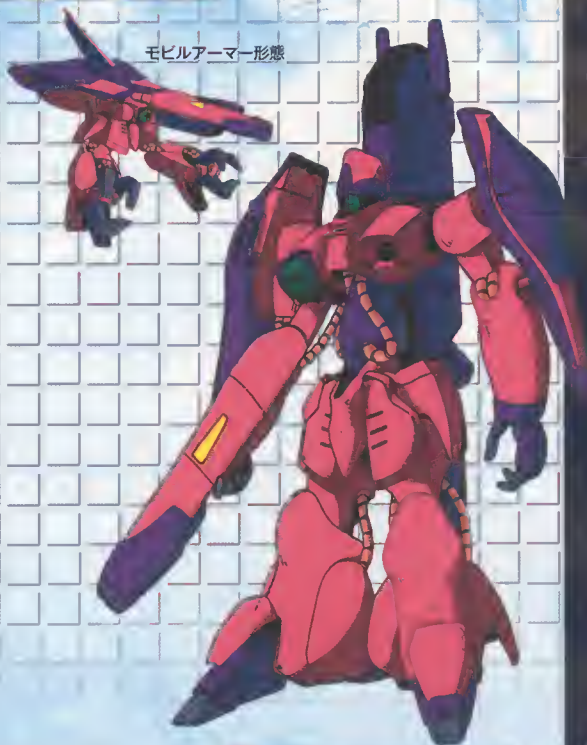
エルメスの後継機というだけに、ファンネルによるオールレンジ攻撃は本機の最大の武器といえる。





機体のポテンシャルが低い分、集団戦術でカバーするのがガゼCの特徴。その戦術は、劇中で有効に活用された。

モビルアーマー形態



ガゼC

AMX-003(MMT-1)

集団戦術で本領を発揮する、奇妙な形の可変機

SPEC

ガゼシリーズの三番目にあたる、アクシズ軍の量産型可変モビルスーツ。全高 18・3m。重量 40・8t。搭乗者は一般兵。



▽ 作業用モビルスーツを戦闘用に改造

戦艦「ドゴス・ギア」と強襲巡洋艦「アーガマ」の激戦に、謎のモビルスーツ群が分け入る。膨大な物量でティターンズ部隊を圧倒したその機体こそ、「ガザC」だ。

その後、本機はアクシズの戦力として何度か登場するが、ハマーン・カーンの狡猾な身の振り方と部隊指揮によって、本格的な出撃は限定されている。

最終決戦で久々の本格出撃を果たすが、その出番もごくわずかにすぎなかった。

ガザCは、作業用モビルスーツを戦闘用に改造し、可変機構を加えた機体である。大量生産が可能のため暫定的に製造されたが、モビルスーツとしてのポテンシャルは低い。そのため、モビルアーマー形態をメインとした支援機といった意味合いが強く、集団戦術での運用が多かった。なお、武器はビーム・サーベル、ビーム・ガン、右胸部のセンサーと直結したナックルバスターを装備している。

そんなガザCは、『機動戦士ガンダムZZ』にも引き続き登場。巡洋艦「エンドラ」などに配備された本機は、アーガマ追撃戦において数回投入された。そのうちの1機はグレミー・トトの乗機で、初恋相手となるルー・ルカとの出会いに一役買っている。

また本機は、キャラ・スーンが乗って大暴れするなど、『ガンダムZZ』ならではの面白い見せ場が多かった。見た目の特異さばかりが際立つガザCだけに、戦闘よりも、そういった活躍のほうがお似合いなのかもしれない。

高性能化が進み、 可変機も登場した発展期

「二年戦争」に勝利した地球連邦軍は、接収したジオン軍の技術をそのまま利用することにしたようで、サイコミュなどの技術も連邦軍に引き継がれる形となった。

この当時、連邦軍の主力機は、ザクの後継機ともいえる「ハイザック」と、ジム系の後継機「ジムⅡ」であった。興味深いのは、ハイザックはモノアイ、ジムⅡはゴグルセンサーを使用していることだ。恐らくジオン軍の技術と連邦軍の技術は設計思想が異なるため、完全にひとつにはできなかったのだろう。

また、一年戦争時、モビルスーツの開発に携わっていた主要な会社は、戦後にアナハイム・エレクトロニクス社に買収されたため、地球圏でのモビルスーツの開発・生産はほぼアナハイム社の独占状態となる。ジオン軍の技術は、連邦軍だけでなくアナハイム社にも流れていたようで、ハイザックの開発にも関わっている。

モビルスーツを扱う大手企業が実質一社になったこと、またティターンズとエウゴの戦闘員の母体はともに連邦軍であることから、当初は両陣営で同じ主力機であるジムⅡが使われるという、奇妙な現象も見られた。

しかし、ハイザックとジムⅡはすでに旧式となっており、装甲素材にガンダリウムYを使用し、ビーム・ライフルとビーム・サーベルを標準装備とした

「マラサイ」や「ネモ」に、その座を譲ることになる。以後、個々の機体に求められる性能は高くなる一方で、量産機の試作機にすら可変モビルスーツが登場することになるのだ。

もつとも、敵側に可変機が登場したばかりでなく、主人公のカミーユ・ビダンが搭乗する「Zガンダム」まで変形するのは、ある意味で衝撃的だった。敵側の可変機では、バブテマス・シロッコの「メッサーラ」が最初に登場するため、可変モビルスーツはすべてシロッコが開発したと思う人も多いようだが、実はシロッコが資源探掘用大型艦「ジュビトリス」で開発した可変機はメッサーラだけで、「アッシマー」と「ギャプラン」はユータイプ研究所「ガブスレイ」と「ハンブラビ」はティターンズと、それぞれ別の所属となっている。

とはいえ、可変させるという思想は、ティターンズの一員となったシロッコの影響によるものだろう。

なお、いずれの可変モビルスーツも「試作機」ということだったが、機体の高性能化にともない可変機構も複雑になる傾向があり、量産には至っていない。そういう意味では、『機動戦士ガンダムZZ』にも登場したアクシズの主力機の「ガザC」は、量産型に最適な可変モビルスーツだったといえるだろう。もつとも、登場した可変機のなかで一番弱かったのもガザCなのだが。

第3章

機動戦士 ガンダムZZ

ダブルゼータ

「グリプス戦役」は「エウーゴ」の勝利に終わったが、この内紛で地球連邦軍の戦力は消耗しきっていた。

最終決戦においていち早く撤退し、結果として漁夫の利を得たアクシズ軍は、ミネバ・ラオ・ザビを擁して「ネオ・ジオン」と改称し、各サイドへの侵攻を開始。ここに「第一次ネオ・ジオン戦争」の幕があがった。

グリプス戦役以降、モビルスーツはどのような局面にも対応できる機体性能を求められるようになり、大出力・高火力を追求していったことで、機体はどんどん巨大化していく。

また、「キュベレイ」のような、サイコミュ兵器を搭載した機体も多数投入されたが、モビルスーツの発展としては、行き詰まりをみせていくことになった。

■ ネオ・ジオン

ザビ家の再興を掲げるアクシズの勢力が、ドズル・ザビの娘であるミネバ・ラオ・ザビを擁して偲称した勢力。ジオン公国であった「サイド3」を占領し、勢力を拡大していった。

■ ニュータイプ部隊

クローン技術で生み出された、「フル・シリーズ」と呼ばれるニュータイプパイロットによって構成される部隊。グレミー・トトの主力部隊である。

■ イジェクションボッド

機体が破壊された際に、コクピットごと脱出するシステム。「グリプス戦役」以降、全周囲モニターをもつモビルスーツに採用されている。

■ インコム

「準サイコミュ」で制御される誘導攻撃兵器。操作は準サイコミュが行うため、一般のパイロットでも多角的な攻撃が行えるようになった。

■ ガンダム・チーム

強襲巡洋艦「アーガマ」に配備されている「Zガンダム」「ZZガンダム」「ガンダムMk-II」「百式」の4機を指す。これに支援兵器「メガライダー」が加わり、活動していくことになる。

■ 第一次ネオ・ジオン戦争

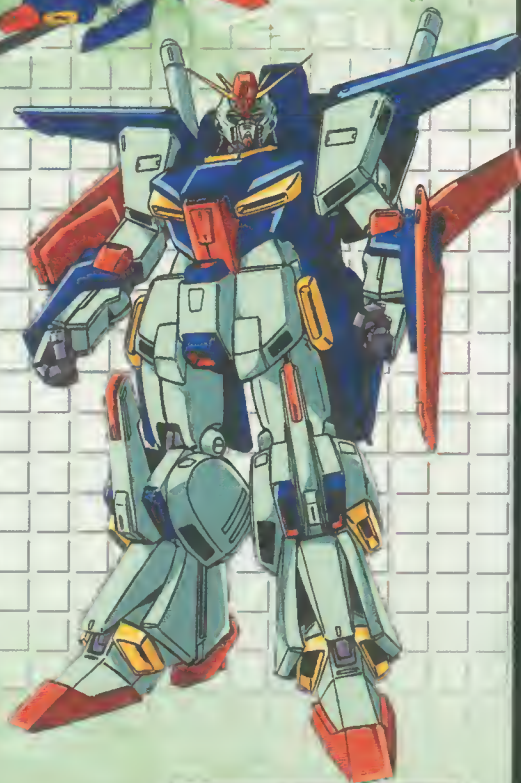
「グリプス戦役」における最終決戦で戦力を温存していたアクシズ軍が、「ネオ・ジオン」を称して地球圏への侵攻を開始したことから勃発した戦争。

変形合体を極め、高性能を誇った怪物級ガンダム

MSZ-010

ZZガンダム

Gフオートレス



SPEC

「Gファイター」の合体、「Zガンダム」の変形を併せもつ機体。全高19・86m。重量32・7t。主な搭乗者はジュード・アースタ。



悪戦苦闘の末に、真打ち登場！

ジュドー・アーシタの「Zガンダム」は、「ハンマ・ハンマ」と「R・ジャジャ」による奇妙な連携の前に、頭部を撃ち抜かれて稼働不能となってしまふ。

なんとか小型戦闘機「コア・ファイター」に乗り移るジュドー。そこに、戦闘機「コア・トップ」と「コア・ベース」が駆けつけ、なんと3機は合体。モビルスーツへと生まれ変わる。「ZZガンダム」の初お目見えだ。

そしてZZガンダムは、高い機動力で敵を圧倒し、ハイパー・ビーム・サーベルで大きな隕石を一刀両断すると、ダブル・ビーム・ライフルでハンマ・ハンマを中破させる。初陣でZZガンダムは、そのケタ外れな攻撃力を見せつけ、鮮烈なデビューを飾るのであった。

これ以降、ZZガンダムはエウゴの中核戦力として活躍する。しかし、複雑な構造をしているうえに、ジュドーたちが自分勝手に行動するため、当初は効果的に運用されずにいた。

モビルスーツ形態での出撃もあったが、基本的に

初陣にして、伝説の隕石斬りを披露したZZガンダム。あまりにケタ違いな攻撃力だ。



は、3機揃ってZZガンダムに合体することが多かった。その合体パターンも、敵が奪って逃走で使ったコア・トップへ強引に合体したり、パイロットを交代させるために一度分離して別のコア・ファイターと合体したりと、実にさまざまだった。

その逆の、分離パターンのほうも少なくない。3機の戦闘機による連携だけで敵を倒したり、さらには、敵の目を欺くためにわざと隕石に隠れてコア・ファイターを分離させて背後から攻撃するといったこともあった。

いずれにせよ本機は、合体・分離状態をいろいろと使い分けることで難局を切り抜けてきたのである。

豪快に戦場を駆け抜けた英雄機

一方、戦果のほうに目を向けてみると、実に目覚ましい。キャラ・スーンのR・ジャジャ、ラカン・ダカランの「ドライセン」、ダナの「パウ」、ブルツの「サイコガンダム Mk・II」などなど。錚々たるエース機を撃破している。

また本機は、アクシズ艦隊に単身突っ込んで無事帰還したり、「キュベレイ Mk・II」のファンネルを一気に殲滅させたりと、尋常ならざる芸当も披露。さらに、劇中中盤ではルーが乗った際にも、ガデブ・ヤシンの「ドワッジ」を撃破するなどの活躍を見せている。乗り手に左右されないほど、本機の実力は飛び抜けていたといつてよい。

こうして数々の戦火をくぐり抜けたZZガンダムは、ガンダムチームとともにネオ・ジオ

ン同士の内紛が行われている小惑星基地「アクシズ」宙域へ向かい、最後の決戦に討って出る。耐ビームコーティングやフルアーマーシステムなど、激戦に備えて強化が施された本機は、強敵揃いの過酷な戦場ながらも、あまり大きな損傷を受けることなく最後まで生き延びる。

そして、ハマーン・カーンの「キュベレイ」との一騎打ちとなった。

戦いは熾烈を極めるが、ジウドーの強い思念に呼応するように、ZZガンダムに搭載されていた簡易型サイコミュのバイオセンサーが発動。人の思念が集結し、分離状態だった機体を再び合体させるなどの超絶的な力を発揮する。

人の思いが力となったかのような、砲門が焼けただれるほど強力なハイ・メガ・キャノンを発射。そしてついに本機は、ビーム・サーベルでキュベレイにとどめをさすのであった。

こうしてZZガンダムは、「第一次ネオ・ジオン戦争」を終結させる。もちろん、ZZガンダムは1機だけで戦ってきたわけではない。

「ガンダムチーム」という、かけがえのない仲間がいたからこそ、生き延びられたのだ。そんな、ジウドーたちの友情と信頼が戦争を終わらせたことは、実に清々しい印象を抱かせてくれる。

ファンネルの攻撃を避けるのもすごい、これを見事に撃ち落としているのもすごい。機動性も半端ではない。



▽高性能化と人の愛が相まった強さ

ZZガンダムは、エウーゴとアナハイム・エレクトロニクス社が共同開発した新型ガンダムで、開発コードは、θガンダムという。

本機のコンセプトは、「ガンダム」と支援用重戦闘機「Gファイター」の合体機構と、Zガンダムの変形機構を1台にまとめるというもの。

本機を構成するパーツはAパーツ、コア・ファイター、Bパーツの3つで、実戦においてはコア・トップ、コア・ファイター、コア・ベース、戦闘機3機で出撃した。

そして3機が合体し、不要なコア・ファイター2機が離脱することで「Gフォートレス」という巡航形態になる。

本形態は、長距離巡航時だけでなく、重爆撃機としても運用でき、また水中航行も行うことができる。ただし、劇中でのGフォートレスの運用は数えるほどしかなく、実際には、この形態からすぐにモビルスーツ形態に変形するパターンがほとんどだった。

そして、本機は高出力ジェネレーターを2基、全身に32基もの姿勢制御スラスタ、機体管制にはバイオセンサーを搭載しているため、高い機動性も発揮できる。大柄な機体ながら、ファンネルを華麗に避ける姿が多く見られたが、これはそのおかげでもある。

武装も、その大火力をいかした強力なものが多い。「ズサ」部隊を一瞬で葬った2連装ダブルビーム・ライフル。伝説の隕石斬りをなした、ビーム・キャノンと兼用のハイパー・ビー

ム・サーベル。サイコ・ガンダム Mk・IIなどを猛爆した21連装ミサイルランチャー。標準的なダブルバルカン以外は攻撃力の高い武器が多いZZガンダムだが、なかでも強力なのが、額から発射されるハイ・メガ・キャノンだ。

コロニー・レーザーの約2割とされるその火力は、一撃で艦艇を沈めるほど強力。あまりに膨大なエネルギーを消費するため、当初はすぐに稼働不能となった。ハイ・メガ・キャノンは、まさにとっておきの必殺技なのだ。

複雑なギミックのため、操縦やメンテナンスが大変だというデメリットはあるものの、火力と高機動性を兼ね備えた本機のポテンシャルは最高水準だったといえる。

加えて、純真なジウドーというニュータイプに操縦されたことで、単なるハイエンドな戦闘兵器というより、彼の心の温かさを具現化したモビルスーツだった印象が強い。

迷えるパイロットたちに対し、コクピットのハッチを開けて、ジウドーが手を差しのべたことは一度や二度ではない。人の愛とドッキングしたからこそ、ZZガンダムは強かったのかもしれない。

一撃必殺のハイ・メガ・キャノンだが、劇中終盤でのハイパー化したハイ・メガ・キャノンは凄まじい威力だった。

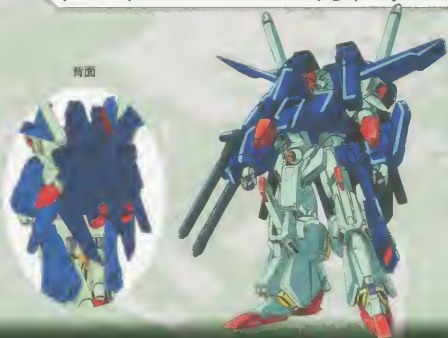


最終決戦に向けて、超武装化したZZガンダム

FA-010S

フルアーマーZZガンダム

背面



クレミートトとの最後の決着をつけるべく出撃したZZガンダムには、「ゴテ」テした追加装甲が施されていた。この「フルアーマーZZガンダム」は、この場面でしか登場しない貴重な機体で、耐ビーム・コーティングで敵のビーム攻撃を跳ね返しつつ特攻し、ラカン・ダカランの「ドーベン・ウルフ」を撃破したり、「クイン・マンサ」に大打撃を与えるなど、グレミー軍の主力エース機を叩く多大な戦果をあげている。

本機はその名の通り、追加装甲を施したZZガンダムの姿で、そのままでは変形合体はできないものの、重量のわりにノーマル時より機動性は向上。武装も、スプレーミサイルランチャー、16連

[MSZ-010S 強化型ZZガンダム]



装ミサイルポッド、8連装ミサイルポッド、腰部ハイ・メガキャノンなど、大幅に追加されている。ちなみに、追加パーツは不要であればバージして、ノーマルなZZガンダムになり、変形合体を行うこともできるが、残念ながら劇中ではそのシーンはなかった。

また本機には、「強化型ZZガンダム」というマイナーチェンジャー版も存在する。追加装甲や大型バックパックの搭載などにより、いろいろと強化されている。

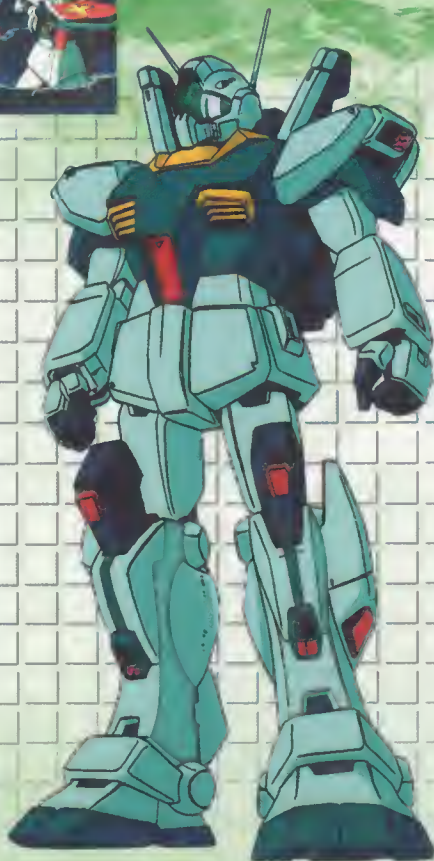
基本的には火力を抑えながら、装甲を軽量化している分、機動性を向上させている機体だ。ただし、残念ながら劇中には登場していない。

「ガンダムZZ」でのエウーゴは、活躍自体が限定されている。そういう意味では、貴重なシーンを演出する機体だ。

ジムⅢ

RGM-86R

カラバが開発したジムシリーズの発展系



SPEC

「ジムⅡ」をベースに、新技術の導入や設計を見直して開発されたカラバの機体。全高 18・0m。重量 38・6t。搭乗者は一般兵。



活躍した場面も少なく、やられ役でもない

ダカールを掌握したネオ・ジオンを攻撃するガンダムチームに、カラバの援軍が合流する。その主力となったのが「ジムⅢ」だ。大型輸送機「アウドムラ」から出撃したジムⅢ部隊は、彼らと入れ代わるようにして徹底抗戦を行った。その後、メルリル湖付近にあるカラバ基地や、ダブリンで避難民を収容する輸送機の護衛としても登場するが、どちらにせよ登場シーンはわずか。大活躍をしたわけでもなければ、やられ役でもない、地味な機体だった。

ジムⅢは、カラバがエウーゴと協力して開発したジムシリーズの発展系で、「ガンダム Mk・Ⅱ」の装備や駆動系を導入して再設計し、新技術を採用している。武装はビーム・サーベル、バルカン砲、ビーム・ライフルのほか、オプション兵器として肩部に15連装ミサイルポッド、腰部に高性能2連装ミサイルランチャーを装備することが可能。ただし、これらのミサイルを装備するとシールドを装備できず、その際は支援機として活用した。

設定上でも生産時期、生産台数が限られているとされる本機は、劇中での活躍が少ないせいで、正直いつてジムシリーズ中で一番印象が薄い。しかし、『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』で意外な活躍をしている。

「ジェガン」とともに地球連邦軍艦隊から発進したジムⅢは、地球に落下する小惑星「アクシズ」の欠片を、一緒に押しはじめたのだ。有名シーンに花を添えたことは、評価されているだろう。

搭乗者のメンタルを反映するニュータイプ専用機

AMX-004-2/AMX-004-3

キュベレイMk.II

ブルカラー



ブルツーカラー



SPEC

「キュベレイ」の試作2号機、および3号機。
全高 18・4m。重量 35・2t。搭乗者はそれ
ぞれ、エルビー・ブル、ブルツー。



少女の心にすなおなマシン

ゴットン・ゴアの「ガ・ゾウム」を追う「ZZガンダム」の前に、タミー隕石に隠れた謎のモビルスーツが現れる。カラーリングこそ異なるが、「キュベレイ」に瓜ふたつの紫の機体は、ファンネルによる猛烈な攻撃でガンダムチームを圧倒。有利に戦いを進めるが、強襲巡洋艦「アーガマ」のハイメガ粒子砲を避けて撤退する。結果的にガ・ゾウムを逃がすことに成功したこの機体こそ、エルピー・ブルの「キュベレイMk-II」である。

その後、本機は、小惑星基地「アクシズ」へと潜入したジュドーの前にも現れる。しかし、ブルの無邪気な性格を反映してか、怒ると猛攻撃、しよげると動きを止めたりと、彼女のメンタルに大きく左右され実力を発揮できなかった。そこで、ネオ・ジオンの地球降下作戦の際、ブルは強烈な催眠暗示をかけられて出撃する。

この戦いで、ブルはジュドーの必死の説得から正気を取り戻すが、キュベレイMk-IIは大気圏突入中に中破。そして、修理されることなく、アーガマのドックで放置されていた。しかし、ダブリンにてブルツ

ブルのメンタルをダイレクトに反映するキュベレイ Mk-IIは、攻撃こそ猛烈だが、無邪気を感じられる。



Ⅰの「サイコ・ガンダム Mk・Ⅱ」がアーガマを襲撃したさい、重傷を負いながらも、ブルは本機に乗って出撃。身を挺してジユドーを守り、強烈なブルの思念をまといながらキュベレイ Mk・Ⅱは彼女とともに自爆するのだった。

それからしばらくして、キュベレイ Mk・Ⅱは再び劇中に登場する。それは、赤いカラーリングのブルツー専用機だ。

資源衛星「キケロ」に潜入するジユドーの気配を感じたブルツーは、本機を駆って内部へ侵入。遠隔操作によるファンネルのコントロールでキャラ・スーンたちを牽制したり、スペース・コロニー「サイド3」の「コア3」コロニー内でハマーン・カーンの屋敷を爆撃するなどの活躍をした。そして、「ゲーマルク」やZZガンダムといった強敵を相手に善戦したものの、戦艦「ネエル・アーガマ」のハイメガ粒子砲の直撃を受け、大破してしまふ。

どちらのキュベレイ Mk・Ⅱも、ブル、ブルツーという少女たちの心のままに活躍した。機体そのものには邪悪な他人の思惑はなく、感じたままにともに戦ってきた姿が劇中にはあった。良くも悪くも、すなおなマシンだったといえる。

パイロットごとに調整され、シンクロ率の高さはヒカイチ

キュベレイ Mk・Ⅱは、キュベレイの2号機、3号機というポジションの機体だ。ブル、ブルツーというパイロットに合わせて細かい調整が施されているだけで、基本的な性能はハマーンのキュベレイと変わらない。1号機との違いはカラーリングと肩の紋章くらいで、2号機

が紫、3号機は赤が基調となっている。

その2号機と3号機の違いも、3号機は遠隔操作でコントロールできることくらいだが、これは3号機の特徴というより、のちに取付けられたオプション機能といった印象が強い。ちなみに、武装のほうも1号機と2、3号機の違いはなく、ビーム・サーベル、ハンドランチャー、ファンネルと、まったく一緒だ。

キュベレイMk-IIは、総合的にいえば1号機のマイナーチェンジ版だが、パイロットに合わせたチューニングが施されているだけあって、機体の追従性と、サイコミュとの親和性は絶大といえる。プルやブルツのメンタルに敏感に反応するのは、その証拠だ。しかも、奇しくも搭乗者が女性ばかりなせいとか、ヒステリックな攻撃パターンと、動かなくなるときの柔和な佇まいが、どこか今でいうツンデレを思わせる。

ニュータイプ専用機としては最高傑作の機体であるキュベレイだが、「愛がほしい女性」を体現できるモデルであることが、実は本質なのではないかと思える。ほかのモビルスーツと比べ、キュベレイがフォルムも含めて、どこか異質に感じるのはそのせいなのかもしれない。

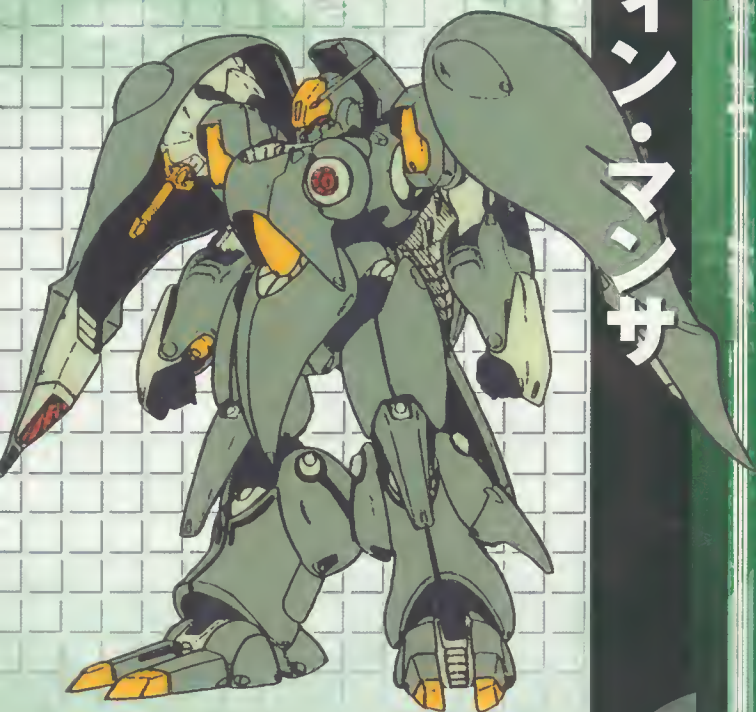
ブルツのキュベレイ Mk-IIは、彼女のポテンシャルを反映してめっぽう強い。3対1の戦いでも優位に戦っていた。



高い操縦技術を要求されるグレミー軍の最終兵器

NZ-000

クイン・マンサ



SPEC

ニュータイプ専用機の集大成ともいうべき、ネオ・ジオン最大のモビルスーツ。全高 39・2m。重量 143・2t。搭乗者はブルツー。



▼ 完璧であるがゆえに、無念に果てる

ハマーン・カーンの部隊と全面抗争となったグレミー・トトの部隊から、ブルツの新たな乗機が発進する。全高39メートルというその巨体こそ、「クイン・マンサ」である。

戦艦「ネエル・アーガマ」へと突進するクイン・マンサは猛攻を仕掛けながらも、そこに「ZZガンダム」がいないとわかるや、すぐに宙域から離脱しようとする。しかしそこに、ドック艦「ラビアンローズ」から発射されたドッキンググアームが本機を直撃。これに怒ったブルツは、機体を反転させ、ファンネルでラビアンローズを猛爆して撃沈するのだった。実に壮烈な初陣である。

さらに、本格的な全面対決の際には、ファンネルでハマーン軍を猛攻撃。途中、マシュマー・セロの「ザクⅢ改」に圧倒されるという、予想外の展開を強いられるものの、「ゲーマルク」などの強敵と交戦し、終止これを圧倒した。しかし、猛攻撃を続けるクイン・マンサに異変が起こる。ブルの思念がブルツを必死に説得しはじめたのだ。そして、本機も徐々に本調子でなくなっていく、ラカン・ダカランの「ドーベン・ウルフ」が「フルアーマーZZガンダム」に撃破さ

胸部メガ粒子砲の威力は、まさに戦艦クラス。ドッキンググアームを何本も瞬殺するなど、生半可な芸当ではない。



れると同時に、小惑星基地「アクシズ」内部の作戦本部まで後退してしまふ。

苦しむブルツーを見かねたグレミーは、ブルツーとともにコクピットに乗りこむと、アクシズ内部に侵入したガンダムチームと激突。彼女を扇動しながらこれを迎撃し、「Zガンダム」と「ガンダム Mk・II」を稼働不能に陥れた。そこへ現れるZZガンダム。ジュドー・アーシタの必死の説得と、グレミーの揺さぶりの狭間に揺れ苦しむブルツーに反応して、クイン・マンサは再び悪鬼のごとく攻撃するが、それも束の間だった。

すぐに正気に戻ったブルツーは自分にすなおになり、自らの意志でコクピットを出てZZガンダムへと飛び移る。

すっかり動きを止めた本機の頭部付近には、グレミーただひとりが残された。そこへ、Zガンダムのビーム・ライフルが放たれる。グレミーの死とともに、本機もコクピットを破壊され、爆発。無敵のように思われたクイン・マンサは、グレミーとともに見放され、呆然とする刹那に轟音を立てて散った。

▼ 乗り手を選ぶ最強最大のニュータイプ用モビルスーツ

クイン・マンサは、ニュータイプ専用機の集大成ともいえる、ネオ・ジオンが開発した巨大モビルスーツだ。通常のモビルスーツの2倍以上もの巨体をしているが、大出力のスラスターを搭載しており、この手のモビルスーツとしては機動性が高い。

そのうえ、メガ粒子偏向器が搭載されている肩部バインダーは、ビームを無効化するシール

ドにもなるため、ディフェンス面も拔かりはない。また、本機の頭部は脱出ポッドとして分離可能となっている。

本機最大の特徴は、なんといってもその怒濤の攻撃力。頭部3連メガ粒子砲、胸部メガ粒子砲、腕部メガ粒子砲、背部メガ粒子砲と、計9門ものメガ粒子砲を装備しているが、なかでも胸部メガ粒子砲は戦艦の主砲を遥かに上回るほど強力である。そして、ニュータイプ専用機らしくファンネルもテールバインダーに装備しているが、その数は30基と、キュベレイの3倍近くにも及ぶ。このほか、肩部バインダーには巨大なビーム・サーベルを2本も装備している。

単体のモビルスーツとしては攻守ともに完璧な機体で、「最終兵器」と形容するのに相応しい。だが、高い操縦技術を要求されるマシンのため、ニュータイプ専用機のなかでも特に乗り手を選ぶ。結果、実質的にプルツーにしか本機のポテンシャルを引き出せなかった。しかも、最終的に本機は、そのプルツーが自らの意志で機体を降り、稼働不能となったところに攻撃を受けて大破している。

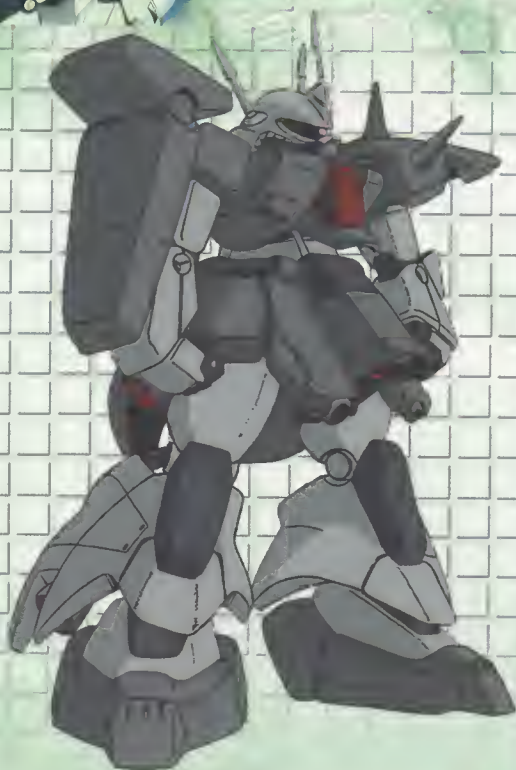
これだけの機体を完成させたネオ・ジオン技術陣の底力は賞賛すべきかもしれないが、完璧すぎるハイスペックモデルというのも考えものである。

ファンネルでの猛攻は、ガンダムチームを圧倒するばかり。ラビアンローズを撃沈した攻撃力は伊達ではない。





独特の構えで発射する腰部ビーム・キャノン。避難民を乗せた船を撃沈させたのもこの武器である。



ザクⅢ

AMX-011

見る者を恐怖に陥れた阿修羅のような機体

SPEC

「ザクⅡ」のコンセプトを継承し、発展させた試作モビルスーツ。全高 21・0m。重量 44・2t。搭乗者はラカン・ダカラン。



△今まで一番悪魔的に見えたザク

ダブリンへのコロニー落としを敢行するネオ・ジオンのラカン・ダカランは、特命を受け「ザクⅢ」で出撃する。

そして、ザクⅢ率いる部隊は非情にもダブリンからの避難経路を断ち、さらに避難民を乗せた船を撃沈させ、ハヤト・コバヤシの乗るモビルスーツ輸送機「ド・ダイ改」も撃破した。

コロニー落としの成功後も、本機は「ZZガンダム」へ迫ったが、怒れるジュード・アークの気迫に押され、下半身を失い、撤退する。

ザクⅢは、その名の通り「ザクⅡ」の発展系として開発された機体である。小惑星基地「アクシズ」に逃げたジオン系技術陣が、「ハイザック」をザクシリーズの後継機と認めず、開発に踏み切った機体とされており、多様なオプション兵器を装備できる汎用性をもち合わせている。

基本武装としては、ビーム・サーベル、腰部ビーム・ライフル、顎部メガ粒子砲などを装備。機体の全体的なポテンシャルも高い。

だが、汎用性を重視したコンセプトだったため、火力や機動力の面で同時期に開発された「ドーベン・ウルフ」に量産機の座を譲ってしまう。結果、試作機が少数しか生産されなかった。しかし、ザクⅢが劇中で見せた、阿修羅のごとき無差別攻撃は、見る者を恐怖させた。出番こそ少ないものの、これほど悪魔的に見えたザクというのほかにないだろう。



通常機でありながら、クイン・マンサを最終圧倒していた。ザクシリーズでは、最高の戦果といえる。



ザクⅢ改

AMX-011S

鬼神のような戦いを見せたマシュマー・セロ専用ザク

SPEC

「ザクⅢ」をベースに、スラスター推力などを強化した、マシュマー・セロ専用機。全高 21・0m。重量 44・3t。



史上最強のザク

グレミー・トト軍との全面抗争を控え、マシヌマー・セロは「ザクⅢ改」に乗って出撃する。最初の戦闘こそ、スペース・コロニー「サイド3」の「コア3」コロニーに侵入したジウド・アーシタたちの追撃というものだったが、その後の内紛戦闘では、驚異的なポテンシャルを発揮。「クイン・マンサ」のファンネルを華麗に撃破し、メガ粒子砲を避けつつボディに一本刀を与えるなど、信じられない戦いぶりを見せつける。

その後、「ドーベン・ウルフ」隊の奇襲を受けて有線式ハンドに拘束され、猛攻撃を浴びてしまう。ところが、マシヌマーの異様な高揚感にはザクⅢ改にバリアを張るばかりか、ドーベン・ウルフの1機を強引に引き寄せて頭部を握りつぶすという離れ業までやってのける。ただ、最後には自らの超常現象的な力で崩壊するかのように自壊し、マシヌマーも壮絶な死を迎える。

ザクⅢ改は、ザクⅢにオプション換装を行い、高機動戦闘に特化した姿である。通常機との違いは、アーマー類などが追加されているほか、頸部のメガ粒子砲の代わりに、ハイド・ボンブ投下機などが追加。また、増量されたプロペラントタンクのおかげで、機動性と稼働時間も飛躍的に向上している。

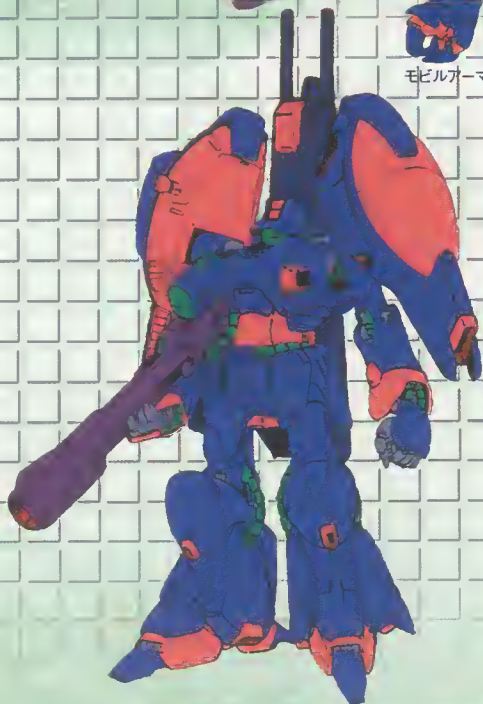
基本的に高性能機ではあるが、ニュータイプ専用機ではない。にもかかわらず、クイン・マンサを圧倒する戦いを示したことは、驚きとしかいえない。おそらく、史上もつとも強かったザクだといつてよい。



ガザDは、ガザの嵐隊で一番よく活用された。乗り手の詰めが甘さなければ、Zガンダム撃破も夢ではなかったはず。



モビルアーマー形態



ガザD

AMX-006

どこか抜けていて憎めないエンドラ魂の象徴

SPEC

「ガザC」の後継機。全高17・0m。重量28・7t。主な搭乗者はバンパ・リダ、ピアン、ワイムら「ガザの嵐隊」。



▽ 実際立つ乗り手たちのズッコケぶり

「Zガンダム」を叩くべく巡洋艦「エンドラ」から、ガザの嵐隊の「ガザD」が出撃する。ガザDは、Zガンダムにファ・ユイリイが乗っていたこともあり、終止有利に戦闘を進めていた。しかし、ジウドー・アーシタがZガンダムに乗り込むと、戦況は流動的になってくる。そこで、ガザの嵐隊は煙幕による攪乱戦法「ガザストーム・フォーメーション」に出る。ただしこの戦法は、自機も敵を見失うという根本的な欠陥があった。結局は、ジウドーのZガンダムにあつさり倒されてしまう。

ガザDは、その名の通り「ガザC」の後継機で、シリーズの弱点であったモビルスーツ形態の戦闘力を向上させ、機動力もアップしている。武装は基本的にはガザCと同じだが、肩部バインダーにミサイルランチャーが追加されている。

基本性能が向上した本機は、変形構造が同一であるガザCの生産ラインを活用できたため、短期間でネオ・ジオン軍の主力機となった。実際、劇中後半ではよく本機の姿を見るので、量産は順調だったのだろう。しかし、やはりガザDといえば、ガザの嵐隊やエンドラクルーが乗っていたころの姿が一番輝いて見える。

華々しい戦果はないが、本機のポテンシャルや、乗り手のズッコケぶりを見るにつけ、ガザDは「まあまあやるけど、どこか間が抜けていて、しかもツメが甘い」という姿がやけにお似合いなのだ。本機こそ、まさにエンドラ魂の象徴といえるだろう。

GAZA



やればできる子、といった感じのポテンシャルを秘めたガ・ゾウム。ただ、安々とやられるパターンが多い。



モビルアーマー形態



ガ・ゾウム

AMX-008

ガザシリーズでもっとも成果を収めた機体

SPEC

大幅に火力が強化された、ガザシリーズの発展型。全高 18・0m。重量 31・6t。主な搭乗者はゴットン・ゴー。



▽アーガマやネルアーガマを追いつめた名機

旗艦を失ったゴットン・ゴー以下エンドラ隊は、強襲巡洋艦「アーガマ」への奇襲を敢行した。このとき、ゴットンが乗っていた機体が「ガ・ゾウム」だ。ガ・ゾウムは、「ガザC」とともに戦闘機「コア・トップ」らを攻撃し、「ZZガンダム」に合体する前に撃破しようと追いつめるも失敗。撤退を余儀なくされるのであった。

ガ・ゾウムはガザシリーズの発展系で、火力が大幅に向上しているのが特徴。武装も9連装ミサイルランチャーやハイパーナックルバスター、ビーム・ガン兼ビーム・サーベルなど、対モビルスーツ戦を重視した武器をもっている。また、変形機構も従来とは異なり、モビルアーマー形態の機動力が向上している。

本機は、そのポテンシャルの高さもあってか、実はかなりいいとこまでエウーゴの旗艦を追いつめた作戦に投入されている。

エンドラ隊が月面都市「グラナダ」で行ったアーガマ強奪作戦では、クレイユ・オーイやネル・マーセンが本機に搭乗。移民船を盾にするという卑劣な手で、アーガマを追いつめるも、ガ・ゾウムが母船に帰還したとき、爆弾を抱えたセシリアもろとも爆発してしまった。また、スペース・コロニー「タイガーバウム」でハマーン・カークンが行った、戦艦「ネル・アーガマ」奇襲作戦では、本機は制圧寸前まで追いつめている。戦果を残せなかったことは悔やまれるが、これらはガザシリーズでは最高の栄光だといつてよい。



左手の指先から発射されるミサイルランチャー。このへんが、グフの流れを汲んでいるといわれるゆえんだろう。



ガルスJ

AMX-101

グフの流れを汲む、陸戦用モビルスーツ

SPEC

地球侵攻作戦を想定して開発された陸戦用モビルスーツ。全高 19・5m。重量 52・7t。主な搭乗者はマシュマー・セロ。



▼主役に振り回された悲しき機体

スペース・コロニー「サイドー」の「シャングリラ」コロニーに寄港した巡洋艦「エンドラ」から、マシユマー・セロは強襲巡洋艦「アーガマ」を襲撃すべく、まだ整備中の「ガルスJ」で出撃する。

コクピットのハッチもない状態ながら、アーガマのブリッジに取りつき無条件降伏を迫った。だが、ジウドー・アーシタの機転で機体に爆弾をとりつけられ、このチャンスを利用してしまふ。その後、ガルスJは「メタス」や「Zガンダム」と交戦し、終止有利に戦いを進めていた。しかし、最終的にはZガンダムのビーム・サーベルで頭部を破壊され、撤退する。

ガルスJは、ネオ・ジオンが地球侵攻作戦を想定して開発した、「グフ」の流れを汲む陸戦用モビルスーツである。「ズサ」との共同運用を想定して開発されており、主に都市攻略戦の制圧行動を目的としている。武装はビーム・サーベルやミサイルポッドのほか、腕が伸びるアームパンチや、指からミサイルを発射するフィンガーランチャーなど実験的な装備が多い。正直、機体性能はさほど高くないが、生産性に優れていたため、のちに量産化されている。

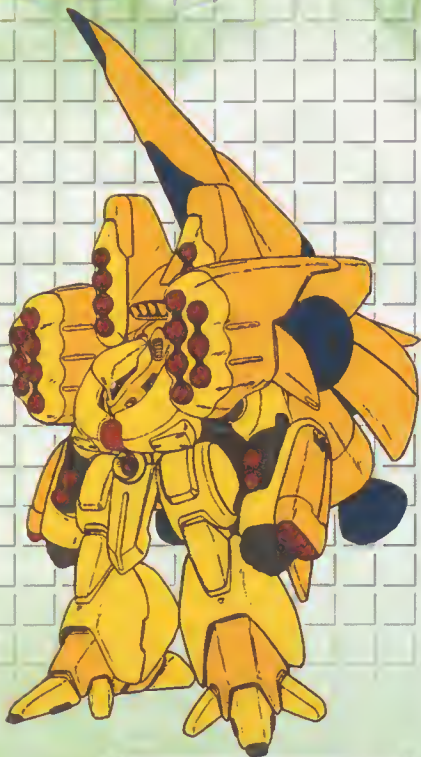
先の戦いのあと、再びアーガマ襲撃に向かい、コロニーにつくった落とし穴へZガンダムを誘い込み、宇宙での戦闘を行っている。陸戦用機ながら、宇宙でも運用できる汎用性はなかなかだ。ジウドーの当て馬的印象の強いガルスJだが、それだけに量産されたことは、救いだといえるだろう。

全身ミサイルの動く弾薬庫

AMX-102

ズサ

ミサイルつぎのズサ。ミサイルポッドだけでなく、全身にもミサイルがあり、まさに動く弾薬庫状態だ。



SPEC

「ガルスJ」との共同運用を想定して開発されたモビルスーツ。全高 15・0m。重量 23・7t。主な搭乗者はマシュマー・ゼロ。



▼支援機ならではの猛爆スタイル

打倒「Zガンダム」に燃えるマシユマー・セロは、新型の「ズサ」に乗って出撃する。スペース・コロニー「サイド1」の「シャングリラ」コロニーのスクラップ廃棄場に隠れたZガンダムをいぶり出すべく、ミサイルで周囲を猛爆。次々に廃棄場は変形していくが、それは本機の行動範囲も狭める結果となってしまう。

そこで本機は、肩のミサイルポッドを取り外してZガンダムに特攻を仕掛ける。ポッドを外して不利かと思いきや、実はボディにもミサイルを内蔵。どんな状況からでもミサイルの嵐が吹き荒れる、それがズサスタイルなのだ。

ズサは、「ガルスJ」との共同運用を想定して開発された支援用モビルスーツである。ジオン軍の「ガッシャ」のコンセプトを引き継いで、主に中距離支援を目的としている。そのため、胸部、腕部、脚部にはミサイルを内蔵し、さらに肩に大型ミサイルポッドを増設することで、火力の爆撃を行うことができる。また、ミサイルポッド搭載の専用ブースターを装備することで、機動力や火力が大幅に向上し、一撃離脱戦法を行うことも可能だ。そのほかにビーム・サーベルも装備しているが、その際にはブースターやミサイルポッドを外さないといけないようだ。

ズサの爆撃スタイルを見るにつけ、ガルスJと共同運用されると真価が発揮できるのではないか、と思えてならない。この2機が同時に出撃していれば、Zガンダムを倒せたのではないだろうか。



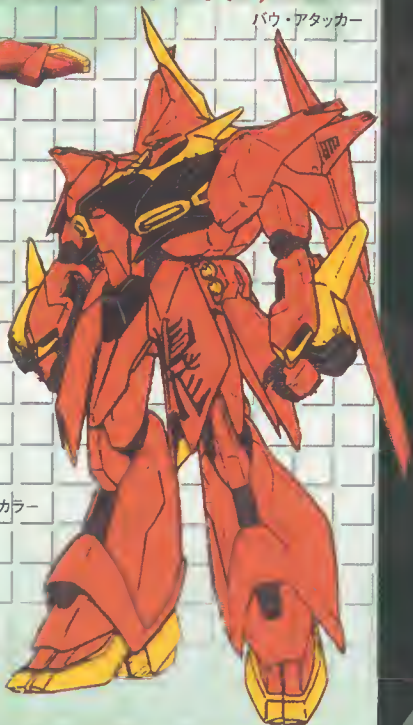
故障中とはいえ、ガンダム Mk-II を中破した戦果は大したもの。ちなみに、「龍飛」と書いてバウと読む。



バウ・アタッカー



バウ・ナッター



グレミーカラー

SPEC

可変分離機構を持つ、量産型モビルスーツ。全高 18・5m。重量 34・7t。主な搭乗者はグレミー・トト、アリス・モア。

バウ

AMX-107

2機の戦闘機に合体・分離できる実力派



▽グレミー・トト機よりも活躍した量産型

グレミー・トトは、ムーン・ムーンに捕われた巡洋艦「エンドラ」を発見し、「パウ」に乗って出撃。エンドラからリイナ・アーシタを連れ出すと、戦線を離脱した。

その後、パウはグレミーの専用機として何度も登場するが、指揮官機としてのスタンスに徹し、残念ながら大きな戦果をあげていない。正直、序盤は実力がわかりにくい機体だった。

パウは、可変分離機構をもつモビルスーツで、上半身のパウ・アタッカーと下半身のパウ・ナッターに分離できる。分離状態では有人のアタッカーでナッターを遠隔操作し、主にアタッカーを戦闘機として運用するのが主となっている。ただし、モビルスーツ形態での機体性能は十分で、こちらでの出撃のほうが多かった。武器はビーム・サーベル、4連装グレネード・ランチャー、ビーム・ライフル、メガ粒子砲付きシールドなどを装備している。

グレミー機なきあと、パウは量産され、アリアス・モマの部隊の乗機として再び登場。こちららはグリーンを基調としており、強襲巡洋艦「アーガマ」をいぶり出すべくダブリンを爆撃したり、エルピー・ブルの乗る「ガンダム Mk-II」をあと一歩まで追いつめる戦果をあげている。

量産型のほうがグレミー機に比べると大活躍をしたといえるが、実は量産型とグレミー機に性能的な差はない。「パウはもともと強いんだ」と、ここにきてやっと示せたことは、本機にとって本望だったに違いない。



ドライセンの怒濤の接近戦は、他を圧倒していた。本機がドムの魂を継ぐ機体であることは、確かなようだ。



ドライセン

AMX-009

ドムの魂、再び戦場へ推参

SPEC

「ドム」をもとに開発された重モビルスーツ。
全高 22・0m。重量 36・7t。主な搭乗者は
ラカン・ダカラン、オウギュスト・ギタン。



怒濤の接近戦で敵を圧倒

地球降下作戦を進行中のネオ・ジオン軍に接近する強襲巡洋艦「アーガマ」を討つべく、ラカン・ダカランの「ドライセン」が出撃する。

本機は、ハマーン・カーンの母艦から逃げる「ZZガンダム」を見つけると、これを襲撃。ダブルビーム・ライフルを破壊し、ボデイに一太刀を浴びせるという活躍を見せる。

その後本機は、オウギュスト・ギタン率いる部隊の乗機として登場。ダカールでの戦闘や、エウーゴやカラバの前哨基地潰しに投入される。そして、「ガンダム Mk・II」の右腕を斬ったり、「Zガンダム」を墜落させるなど、若者ばかりのガンダムチームに対し、熟練パイロットの気迫を見せつける猛攻を示した。2機のドライセンとも、誇りとともに戦った「漢の機体」だったといえるだろう。

ドライセンは、見た目通り「ドム」の発展系にあたる機体で、高い機動力と戦闘力を誇っている。本機が得意としているのは白兵戦で、ビーム・ランサーとビーム・トマホークを接合させた武器をメイン兵装している。そのほかの武器としては、腕に内蔵された3連装ハンドガン、トライ・ブレード、ビーム・ライフルなどがある。

新型機が続々と登場する当時、これほどドムを意識した機体は珍しい。それだけニーズが高かったわけだが、それに応える実力をもつドライセンの勇姿は、ドムがまだ死んでいないモデルだと感じさせてくれる。



戦闘用の機体ではないが、こと偵察に関してはスペシャリスト。忍者のような、影の存在だった見える。



アイザック

RMS-119

偵察任務に秀でた、電子戦のスペシャリスト

SPEC

「ハイザック」をベースに開発された偵察用モビルスーツ。全高 18・0m。重量 41・6t。搭乗者は一般兵。



巨大な頭をもった忍者

機体を失い、砂漠をさまようグレミー・トトと遭遇した民族解放ゲリラ「青の部隊」。そこには「ディザート・ザク」や「ゲルググ」に混じって、「アイザック」の姿もあった。しかし、本機は、ガンダムチームとの戦闘であつさり撃破されてしまう。設定を知らなければ、その実力すらわからない機体だっただろう。

また、アイザックはその後、ダブリン戦後にドック艦「ラビアンローズ」を視察していた巡洋艦「エンドラⅡ」の偵察部隊としても登場。グレーを基調とする本機は、新造戦艦「ネエル・アーガマ」の情報を入手し、帰還しているが、戦闘シーンはなかった。

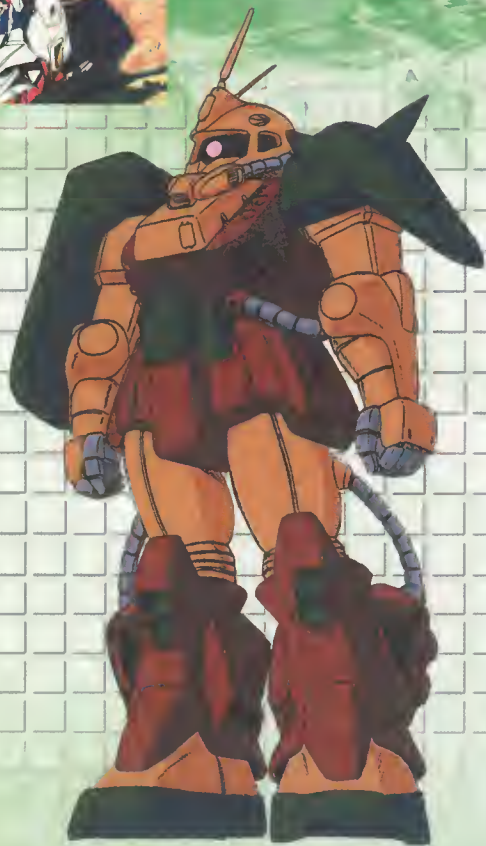
アイザックは「ハイザック」をベースに、低ミノフスキー粒子下での電子戦を想定して開発された、偵察用のモビルスーツである。もともとは地球連邦軍の機体だったが、ティターンズの残党がネオ・ジオンに合流した際に本機ももち込まれている。

巨大な後頭部にレドーム（円盤状のレーダー）が装備されており、各種センサーで収集した情報は、頭部のデータシステムで統括処理してアンテナから味方へと発信されたり、バックパックにあるデータポッドに書き込まれたりする。偵察任務が目的のため、本機は武器を持っていないが、青の部隊では戦力不足からザク・マシンガン改を装備していた。

偵察機というポジションから、出番が限られたアイザックだが、本機のような存在が作戦を下支えしていたことは事実だろう。



砂の中に潜み、突然現れるという戦法は、砂漠戦に慣れていない敵にしてみれば、恐怖以外のなにものでもない。



デイズート・ザク

MS-06D

砂中から獲物を狙うハンター

SPEC

砂漠戦仕様の「ザク・デザートタイプ」を改修した機体。全高18・5m。重量44・7t。
主な搭乗者はエロ・メロエ。



砂漠戦のスペシャリスト

ガンダムチームを叩くべく決起した、デザート・ロンメル隊の主力として登場したのが、「ディザート・ザク」である。

砂漠での機動性に優れた本機は、「ドワッジ改」とともに地の利をいかした戦法を展開。砂の中に埋もれて待機しつつバズーカで敵を急襲したり、敵が砂に設地した途端足を捕まえるなど、局地戦用の機体であることをアピールした。

その後、ディザート・ザクは、「青の部隊」のメンバー、エロ・メロエの搭乗機としても登場。青にカラーリングされた本機は、ガンダムチームの迎撃に現れ、「Zガンダム」のビーム・ライフルを吹き飛ばして、さらにシールドも斬り落とすなど、かなり卓越した戦い方を見せつけた。

ディザート・ザクは、「陸戦型ザク」の砂漠戦仕様機「ザク・デザートタイプ」をベースに、旧ジオン軍などが地球連邦軍から奪った資材で改修した機体である。ザク・デザートタイプと比べると、防塵対策パーツが多く、動力部や関節部などに違いが見られる。

また、砂上走行用のホバージェットや、背中にプロペラントタンク3本を装備。砂上の機動性が高いうえに、空中高くまで飛びあがることもできる。ちなみに武器は、ロケットランチャー、ザク・マシンガン、クラッカー、ヒートホークなどがある。

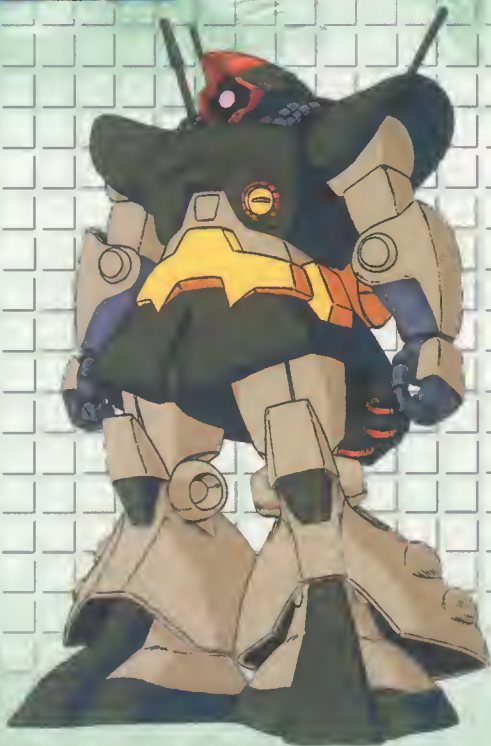
本機は、砂漠戦でガンダムチームを苦しめた。局地戦では新型汎用機より、旧式でも特化した機体のほうが有利であることを実証したといえる。

傑作機といわれるだけあって、暴れっぷりはなかなかのもの。砂漠での機動性には、ガンダムチームも苦戦した。

ドワッツ

MS-09G

砂漠での機動性を見せつけた旧式の底力



SPEC

ジオン軍の陸戦用量産型モビルスーツ。全高18・2m。重量43・5。主な搭乗者はアマサ・ポーラ、ガデブ・ヤシン。



▼ 一年戦争末期に開発されたトムシリーズ最終形

ダカールでエウーゴやカラバの部隊を迎撃するべく、グレミー・トトの部隊に率いられるように登場したのが「ドワッジ」である。

ガンダムチームを相手に善戦するが、グレミーの「パウ」がピンチと見るや、アマサ・ポールのドワッジは「ZZガンダム」や「Zガンダム」に幾度となく斬りかかる。

しかし、空中戦メインということもあって、この戦いでは実力を発揮できなかった。

その後、アフリカ解放戦線の隊長、ガデブ・ヤシンの乗機としても登場。ネオ・ジオンと手を組んだ彼は、ガルダーヤの街を無差別攻撃し、さらにガンダムチームと交戦する。

ここでようやく本機は、砂漠での機動性を存分に発揮。砂上を機敏にホバリングする姿は、あの「ドム」を思わせる逞しいものだった。

ドワッジは、ジオン軍の陸戦用量産機で、「一年戦争」末期に開発された最終生産型である。プロペラントタンクの増設などによって、機動性や作戦行動時間が大幅に向上。優秀な傑作機として評価されたが、実戦投入時期が遅く、完成があと数ヶ月早ければアフリカ全域はジオンの勢力下のままだったのでは、とさえいわれる。なお武器は、30ミリ2連装バルカン砲、ジャイアント・バズ、ヒート・サーベル、ヒート・トマホークを装備している。

旧式といえる本機だが、砂漠での機動性は、今だ通用するレベルだった。結局ガンダムチームに敗れはしたが、旧式の底力を見せつけたといつてよい。

傑作機のドワッジをベースとしているだけ
あつて、機動性の高さはヒカイチだった。

砂漠戦の名手デザート・ロンメル専用モビルスーツ

MS-09H

ドワッジ改



SPEC

「ドワッジ」の機動力を向上させた改良機で、
デザート・ロンメルの専用機。全高 18・2m。
重量 41・6t。



▼砂漠を独壇場とした強豪機

ガンダムチームを発見して、ネオ・ジオンの地球侵攻作戦を知った旧ジオン兵のデザート・ロンメル。彼はジオン再興のため、ガンダムチームを倒すべく決起する。

そして、砂漠で「デザート・ザク」とともに潜み、ジュード・アーシタの「Zガンダム」に襲いかかったロンメルの機体こそ、「ドワッジ改」である。

ジュードが砂漠での戦いに不慣れなこともあって、終止Zガンダムを圧倒。獲物を狙うような不気味なモノアイ、あざ笑うかのような砂上での機動性、昔年の恨みをぶつけるかのような猛攻は、まさに古兵ロンメルを体現するかのような機体だった。

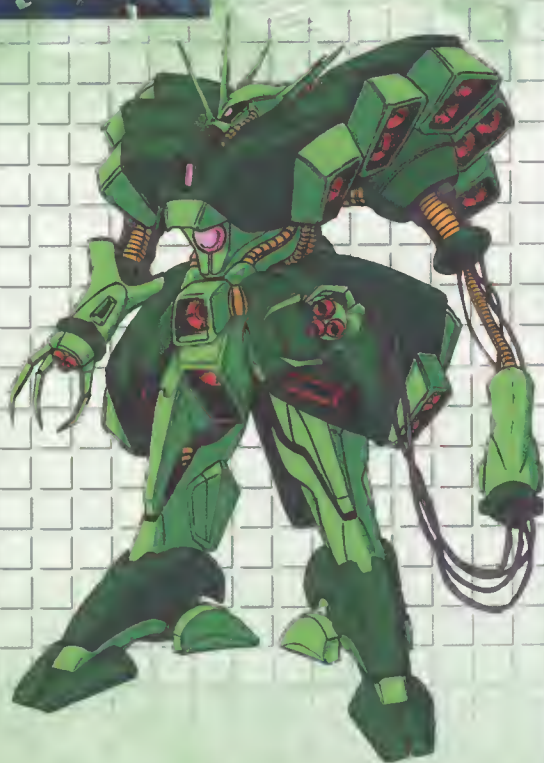
ドワッジ改は、「ドワッジ」を独自に改修したカスタムモデルで、実質的にロンメルの専用機である。通常機との違いは、肩に装備されたブースター、頭部の形状、左胸の拡散ビーム砲のカバー、腰部のノズルなど。特に肩のブースターは、推力を大幅に向上させるもので、これにより、並外れた高い機動性を発揮している。武装はドワッジと変わっておらず、違いは頭部のバルカン砲が2門づつに減っている程度である。

本機が善戦できたのは、ジュードたちが砂漠戦に慣れていなかったことも要因のひとつだが、本機のポテンシャルが高かったことにも起因している。

そして、地の利をいかした戦法で相手を苦しめたドワッジ改の勇姿は、「砂漠の主」という言葉がよく似合うものだった。



有線式アームは、本機がもともとニュータイプ向けだった証拠。シオング的なものを
目指した武器だったに違いない。



AMX-103

ハンマ・ハンマ

キュベレイの後継機として開発された準サイコミュ搭載モデル

SPEC

「キュベレイ」の後継機として開発されたモビルスーツ。全高 21・5m。重量 40・3t。搭乗者はマシュー・ゼロ。



機体バランスは悪いが、実績は一流機体

スペース・コロニー「サイドー」の「シャングリラ」コロニーを出港した、強襲巡洋艦「アーガマ」。それを追撃する巡洋艦「エンドラ」から、マシユマー・セロの新たな機体、「ハンマ・ハンマ」が発進する。暗礁空域で「Zガンダム」と交戦するも、ダミー隕石を使ったジユドー・アーシタの頭脳プレーにより随伴機の「ガザC」は全滅。本機も片腕を破壊される。

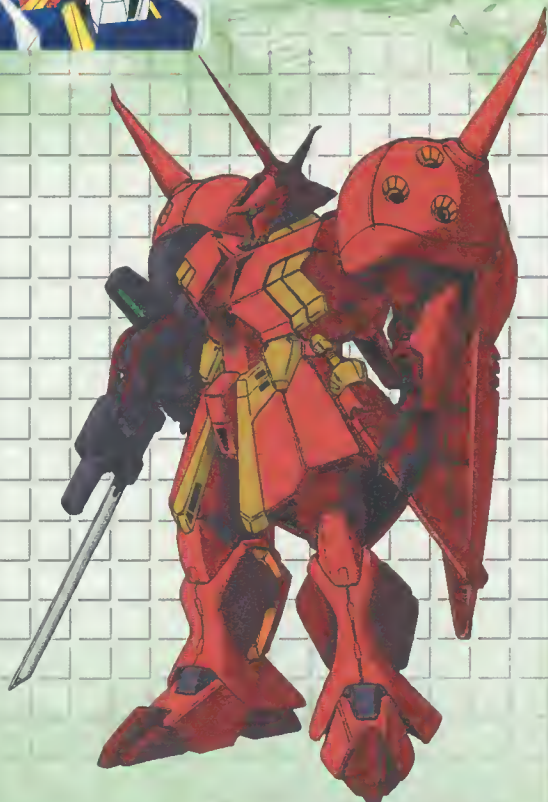
その後、二度にわたりアーガマ襲撃へと出るが、今度はそれぞれ善戦し、最初の戦いでは「メタス」を、次の戦いでは3連メガ粒子砲内蔵シールドによって「Zガンダム」を稼働不能に追い込んでいる。その後、新たに登場した「ZZガンダム」によって中破されてしまうものの、その戦果はすばらしいものがある。

ハンマ・ハンマは、キュベレイの後継機として開発された準サイコミュ搭載モデルである。全身に配備されたスラスターのおかげで高い推力を誇るが、その結果出力の大半をスラスターに食われてしまうという欠点もある。メガ粒子砲内蔵シールドは、その補填のために生まれた武器だ。ほかの武器としては、3連装ビーム砲を内蔵したフレキシブルアームや、ビーム・サーベルを装備している。もともとは量産をめざして開発された本機だったが、機体バランスが悪いなどの理由から、結局見送られた。

ただ、メタスやZガンダムを追い込んだ実績は大したもので、強化人間になる前のマシユマーの乗機としては、もっとも戦果をあげた機体だといえる。



ただ暴れていただけの印象が強い本機だが、強かったことは間違いない。カスタム機だったことは伊達ではない。



R・ジャジャ

AMX-104

ギャンの設計思想を受け継いだ、華麗なる騎士

SPEC

「ギャン」の設計思想を受け継いで開発されたモビルスーツ。全高 20・0m。重量 36・4t。搭乗者はキャラ・スーン。





見た目は騎士、戦い方は猛獣

作戦の失敗が続くマシユマー・セロの戦いを見届けようと、キャラ・スーンも「R・ジャジャ」に乗って出撃する。モビルスーツに乗ると気分が高ぶり、メチャクチャな戦いをするキャラだが、「Zガンダム」のシルドを斬り落とし、背後から羽交い締めにするといった活躍ぶりを発揮した。なぜかその後、戦線を離脱するが、それから「ZZガンダム」に幾度となる戦いを挑む。並外れたポテンシャルを発揮し、ハイ・メガ・キャノンを放たれてもそれを回避するなど、見事な芸当も見せている。しかし結局、スペース・コロニー「ムーン・ムーン」でZZガンダムに倒されてしまう。

R・ジャジャは、「ギャン」の設計思想を受け継いで開発され、白兵戦能力を重視して製作されている。量産化も視野に入れられていたが、それは見送られ、機体性能の高さから指揮官用としてカスタム化されている。そのため、機動性や運動性は非常に高い。武器は、3連装ミサイルポッド、銃剣付きビーム・ライフル、ビーム・サーベルを装備している。

ギャンの後継を思わせる、騎士らしい佇まいをしているが、キャラの獣のような操縦法のせいで、イマイチ華麗な活躍をしていたとはいえない。

ただ、あのむちゃくちゃな操縦についていけるだけの追従性を考えると、本機のポテンシャルは相当なものだったことがわかる。量産されていれば、活躍できただろうと思うと、ワンオフの機体だったことがつくづく悔やまれる。



ZZ ガンダムを終始圧倒する戦いをしていたリゲルグ。まさに「蝶のように舞い、蜂のように刺す」といった戦い方だ。

リゲルグ

MS-14J

圧倒的な機動性と運動性をもつ新型ゲルグ



SPEC

「ゲルグ」をベースに、宇宙用高機動型として改修された機体。全高 21・0m。重量 43・7t。搭乗者はイリア・バズム。



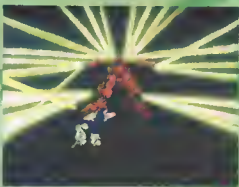
ZZガンダムを圧倒したニューゲルグ

戦艦「ネエル・アーガマ」の撃破作戦を展開する巡洋艦「エンドラII」から、「ズサ」隊に引き続きイリア・バズムの「リゲルグ」も出撃する。圧倒的な機動力をもつ本機は、「ZZガンダム」に対し有利に戦いを進めていた。しかし、ジウド・アーシタの頭脳プレーの前に、リゲルグは損傷し撤退してしまふ。その後も幾度となくガンダムチームの前に現れるが、サトウの乗る「シユツルム・ディアス」を破壊したり、スペース・コロニー「サイド3」の「タイガーバウム」コロニーでハマーン・カンを救出するなど、要所要所で活躍をしている。最後にはグレミー・トト軍との内紛にも参戦しているが、その後どうなったかは不明である。

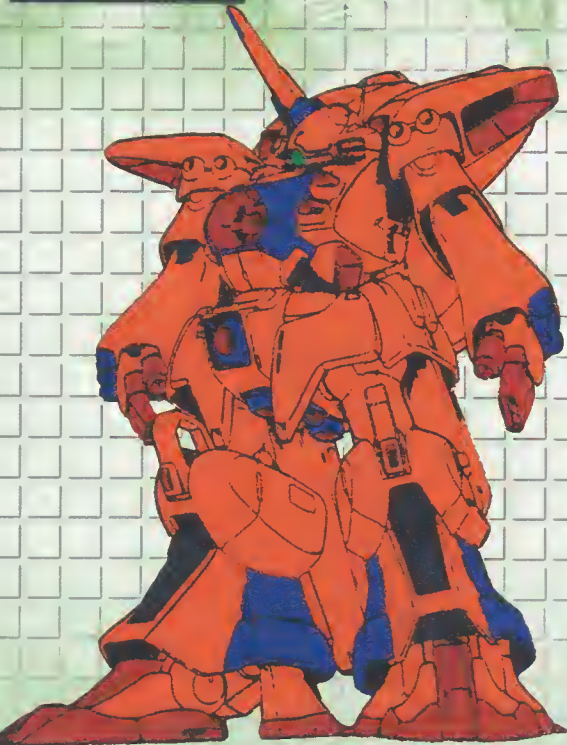
リゲルグは、「リファイインド・ゲルグ」の略称で、「ゲルグ」を宇宙用の高機動型に改修した機体である。しかし、両肩にはメインスラストも兼用しているウイングバインダーを装備しており、先代を圧倒する高い機動力と運動性を誇っている。そのため、本機はこれをいかした一撃離脱戦法を得意としている。

武器は円盤形宇宙用機雷、バックパック部のミサイルポッド、腕部グレネードランチャー、ビーム・サーベル、ビーム・ライフルなどを装備している。

改修機ながら、リゲルグは、完全な新型ともいえるほどのポテンシャルをもっている。結局、末路は不明だが、もしかすると、あの激戦のあとも生き残っているのではないか、などと思っ



胸、肩、腰、両手両足と、あらゆる箇所から内蔵ビーム兵器を発射するゲーマルク。凄まじい火線である。



ゲーマルク

AMX-015

強化人間専用に開発された超攻撃的モビルスーツ

SPEC

強化人間専用に開発された攻撃用モビルスーツ。全高 22・0m。重量 46・3t。搭乗者はキャラ・スーン。



高火力をもつハマーン軍の中核

資源衛星「キケロ」に潜入しようとするジウド・アーシタたちの前に、空域をパトロールする機体が現れる。「ガスエル」、「ガスアル」を従えた「ゲームルク」だ。

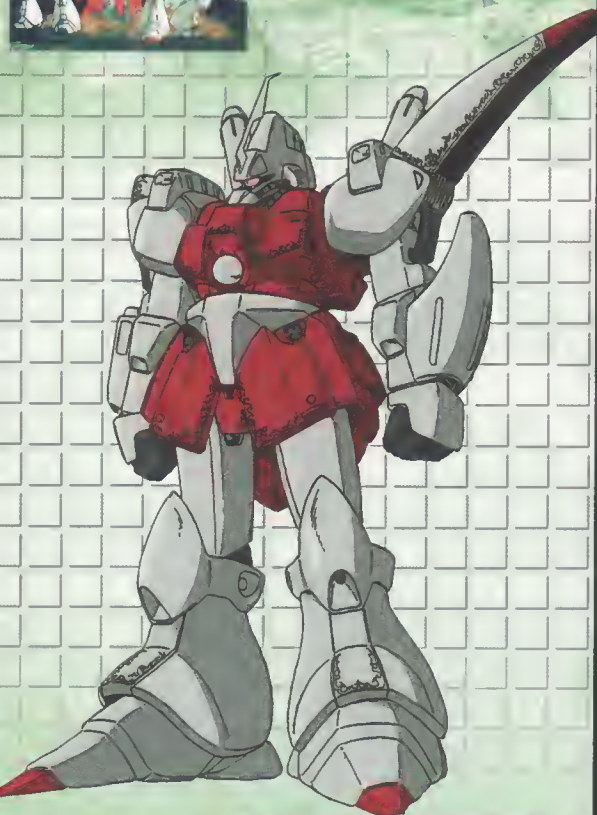
本機はその後、スペース・コロニー「サイド3」の「コア3」コロニー内で暴れる「キュベレイ Mk・II」の前に立ちあはだかるが、派手な戦闘ができぬまま、結局逃げられてしまう。そして、グレミー・トト軍との戦闘にも参戦。圧倒的な火力で強敵たちと交戦する。最後には、一騎打ちを望む「ZZガンダム」らの前に現れた「量産型キュベレイ」軍団の相手をし、これを次々と撃破した。だが、最後に残る1機と相撃ちの形で爆発している。

ゲームルクは、強化人間専用に開発された、超攻撃的なモビルスーツである。最大の特徴はその圧倒的な火力で、胸中央のハイパー・メガ粒子砲、その左右にある4門のメガ粒子砲、両手両足のビーム砲など、実にさまざまな武器を内蔵している。さらに、マザー・ファンネルと、それに内蔵されたチルド・ファンネルという大小のファンネルも有している。

はつきりいつて本機に死角はなく、火力に限っていえば、当時最高クラスの機体だといえる。キャラの能力のおかげもあって、本機の性能は遺憾なく発揮された。その戦う様は、「サイコ・ガンダム Mk・II」を思わせるものだったが、本機にはあの悪魔的なイメージは感じられない。デザインも含めて、どこか柔和な感じがするのは、乗り手のぶつとんだ性格が悲壮さを感じさせないからだろう。



双子ならではの息のあった攻撃もまた、ガズエル&ガズアルの醍醐味。戦果をあまりあげていないのが残念だ



ガズエル

AMX-117L

キュベレイを護衛するために生まれた親衛隊専用機

SPEC

「ガルバルディβ」を改修して製作された、親衛隊用モビルスーツ。全高19・0m。重量40・5t。搭乗者はランス・ギレン。



親衛隊らしく、最後まで華麗に戦う

「ゲーマルク」に随伴するようにキケロ近辺をパトロールしていた機体、それが「ガズアル」と「ガズエル」である。2機は常にゲーマルクを護衛するようにともに行動し、「キュベレイ Mk・II」がスペース・コロニー「サイド3」の「コア3」コロニー内部を攻撃した際にはこれに応戦。また、グレミー・トト軍との最終決戦でもゲーマルクにつき添うようにして敵と交戦した。

しかし、「ドーベン・ウルフ」の奇襲によってゲーマルクがピンチを迎えると、ガズエルは身を挺してかばい、そして爆発四散した。

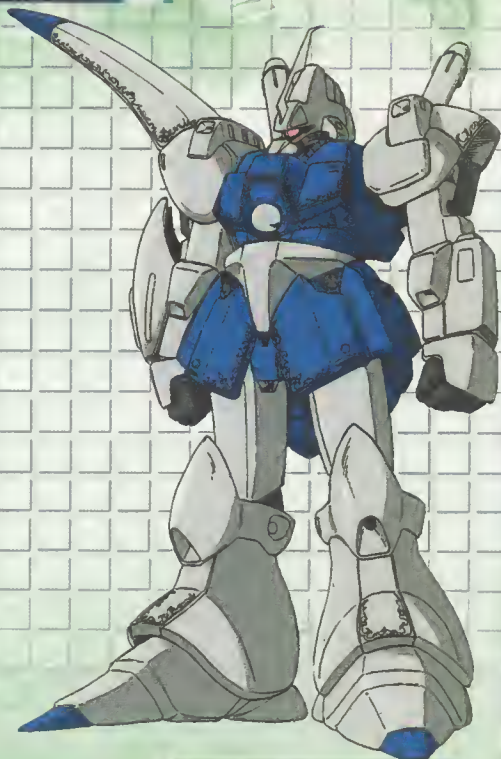
ガズエルは、「ガルバルディβ」を改修した機体で、ネオ・ジオンの親衛隊用のモビルスーツとして整備され、スラスター推力やジェネレーター出力が大幅に強化されている。そもそもは「キュベレイ」を護衛するための機体で「ロイヤルガード・ガルバルディ」とも呼ばれている。

ガズアルとの共同運用が基本のため、双子のギレン兄弟の乗機として活躍。2機はほぼ基本性能も見た目も同じだが、左肩部が大きく張り出しており、胸部などのカラーリングが赤いほうがガズエルである。武器はヒート・ランスや、ビーム・キャノン兼ビーム・サーベルなどを装備しているが、左肩にこれらの武器を内蔵することが可能である。

当時のモビルスーツとしてはやや特色とパンチに欠ける機体ではあるが、シルバーを基調としたカラーリングといい、劇中での騎士のような戦い方といい、その勇姿は優美さを感じさせた。



親衛隊機というだけあって、風格を感じさせる。よく見ると、ヒート・ラングなどに装飾が施されている。



ガズアル

AMX-117R

ロイヤルガードの使命をまっとうした親衛隊魂

SPEC

「ガズエル」と同様の親衛隊用モビルスーツ。
全高 19・0m。重量 40・5t。搭乗者はニー・ギレン。



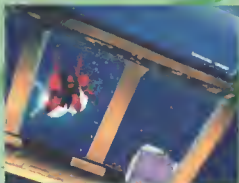
▽ガズエル亡きあとも職務をまっとうする

「ガズエル」とともに「ゲーマルク」を護衛するようにして、スペース・コロニー「サイド3」の「コア3」コロニーに現れた「ガズアル」。常にガズエルとの共同運用を行う本機は、「キユベレイ Mk・II」迎撃や、グレミー・トト軍との最終決戦でも、ゲーマルクを護衛するかのように登場する。

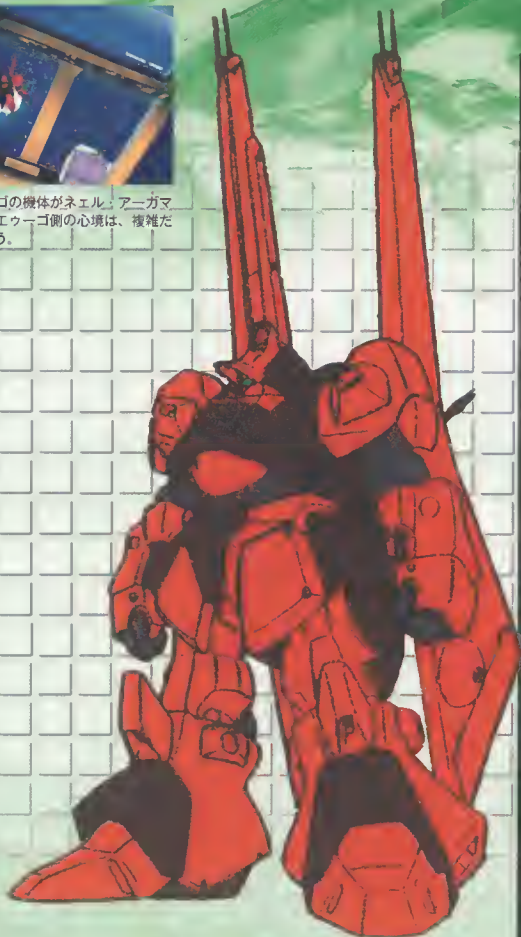
強敵の前に善戦するも、チームの相棒であるガズエルが「ドーベン・ウルフ」により撃破されると、ガズアルだけでゲーマルクを護衛するようになる。そして、ハマーン・カーンの「キユベレイ」とジウド・アースタの「ZZガンダム」の一騎打ちを阻む「量産型キユベレイ」軍団の前に、ゲーマルクが立ちはだかると、ともにこれを迎撃せんと応戦する。しかし、敵のオールレンジ攻撃の前に、あつけなくガズアルは散ってしまふ。

ガズアルは、ガズエルとの共同運用を前提に開発された、「ガルバルディβ」を改修した機体である。開発経緯や機体性能、武装といったものはガズエルとまったく変わらないが、右肩が大きく張り出しており、胸部などのカラーリングが青いほうがガズアルである。ちなみに、アルはRight（右）のアル、エルはLeft（左）のエルからネーミングされている。

常にガズエルとともに行動した本機だが、ガズエル亡きあとは、量産型キユベレイを前に、無謀と思える戦いながら懸命にゲーマルクを守ろうとしていた。戦果は大したものではないが、最後まで貫き通した親衛隊魂は賞賛されるべきだろう。



元エウゴの機体がネエル・アーガマを襲う。エウゴ側の心境は、複雑だっただろう。



シュツルム・ディアス

RMS-099B

ネオ・ジオンに横流しされたリック・ディアスの強化型

SPEC

エウゴに配備される予定だったが、裏取引でネオ・ジオンに渡った機体。全高 18・7m。重量 32・5t。搭乗者はサトウ。



裏切り者が搭乗する元エウーゴ機

ダニー率いる3機部隊「3D」の情報をもとに、戦艦「ネエル・アーガマ」を襲撃するべく、サトウ率いる「シュツルム・ディアス」隊が先行して出撃する。

エウーゴを裏切った元ジオン軍系のサトウは、一気に暗礁空域を抜けて、ネエル・アーガマに到着。ブリッジを破壊する手前まで追いつめたが、マシユマー・セロになかなか従わぬ彼を疎んだイリア・パゾムの「リゲルグ」によって狙撃され、撃破されてしまう。これを受け、士気の下がったシュツルム・ディアス隊はその後、戦線から撤退している。

シュツルム・ディアスは、「リック・ディアス」をベースに開発された機体で、もともととはエウーゴのエース専用機として製作された。しかし本機は、エウーゴで使用されることなく、のちに裏取引によってネオ・ジオンに横流しされている。

ビーム・キャノンを内蔵したグラインドバインダーを装備しており、火力も機動性も向上している。しかし、その巨大なバインダーのせいで格闘戦は苦手としている。

なお、ほかの武器は、ビーム・ピストルやバルカン・ファランクスなどで、リック・ディアスとはほぼ変わらない。

元エウーゴの機体がエウーゴの戦艦を襲うという、前代未聞の事件の主役となったシュツルム・ディアス。ネエル・アーガマを落とす直前までいったことは賞賛に値するが、その末路はどうにも格好が悪いものがある。



怪鳥を思わせるフォルムが印象的。おそらく、第一次ネオ・ジオン戦争で一番の連携攻撃の使い手だ。



モビルアーマー形態



SPEC

試作モビルアーマーに、仮設の頭部と手足を取り付けた可変機。全高 15・0m。重量 24・7t。搭乗者はダニー、デル、デューン。

ジャムル・フィン

AMA-01X

ZZガンダムを追いつめた三位一体攻撃の威力



ビグ・ザムの開発思想を受け継ぐはずが……

巡洋艦「エンドラⅡ」に合流するべく、3機の「ジャムル・フィン」が航行していた。その途中、ドック艦「ラビアン・ローズ」を発見した3機は、三位一体攻撃でこれを猛攻するが、支援メカ「メガライダー」の一撃で撤退する。

その後3機は、再び戦線に登場し、3機で1機に見せかけるという戦法で「ZZガンダム」を襲撃する。その圧倒的な機動力で優位に攻め立てるも、「百式」とZZガンダムの連携で逆襲を許し、結局命令により撤退を余儀なくされる。

ジャムル・フィンはもともと、「ビグ・サム」の開発思想を受け継ぐ巨大モビルアーマーとして開発されていたものだが、完成を急いだために小型化し、さらに仮設の頭部と手足を加えて急造された可変モビルアーマーである。

モビルスーツ形態でも格闘攻撃などではできるが、その真価が発揮されるのはやはりモビルアーマー形態だ。この形態での加速力は圧倒的で、さらにメガ粒子砲は対艦戦闘に用いられるほどの威力がある。そのほかの武器は、小型ミサイルやメガビーム砲などがある。

劇中での活躍後に、本機がどういう末路を辿ったかはわかっていない。一応、スペースコロニー「サイド3」の「コア3」コロニーでの戦いにはその姿が見られるので、それなりに活躍したのだろう。

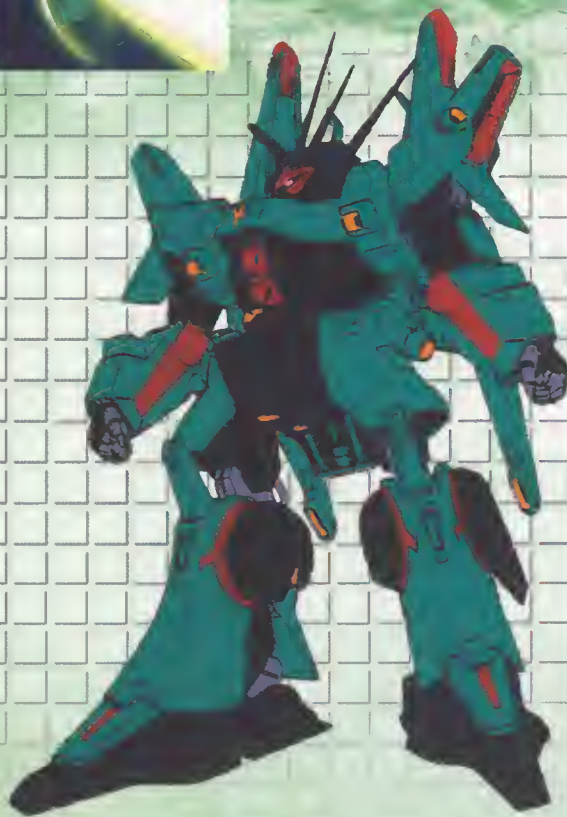
ZZガンダムを追いつめた三位一体攻撃が、ほかにも通用しないはずはないのだ。

腕を飛ばして敵を捕え、ビームでとどめを
さす戦法は、かなり脅威だ。ちなみに、ラ
カン機は無縁で腕を飛ばせる。

AMX-014

ドールベン・ウルフ

簡易サイコミュを搭載したオールドタイプ希望の星



SPEC

簡易サイコミュを搭載した、攻撃用重モビルス
ーツ。全高 22・0m。重量 36・8t。主な搭
乗者はラカン・ダカラン。



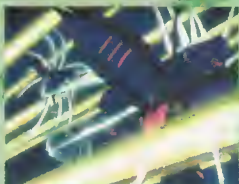
▼ 獲物に群がる狼

グレミー・トトの反乱から起こった、ネオ・ジオンの派閥抗争。グレミー軍のラカン・ダカランは決戦に挑むべく、「ドーベン・ウルフ」隊を率いて戦地に赴く。激戦をくぐり抜けた本機最大の戦果は、「ザクⅢ改」を窮地に追い込んだことだ。

有線ハンドビームで四肢をからめとり、高圧電流などで猛攻する姿は、まさに獲物に群がる狼といったところ。この戦いで結果的に味方機を1機失っているが、活躍としては華々しいといえるだろう。その後、ラカン機は「ゲーマルク」にあと一歩でとどめをさすというところまで善戦。しかし、「ガズエル」に邪魔され、さらに加勢に入った「フルアーマーZZガンダム」によって撃破されてしまう。

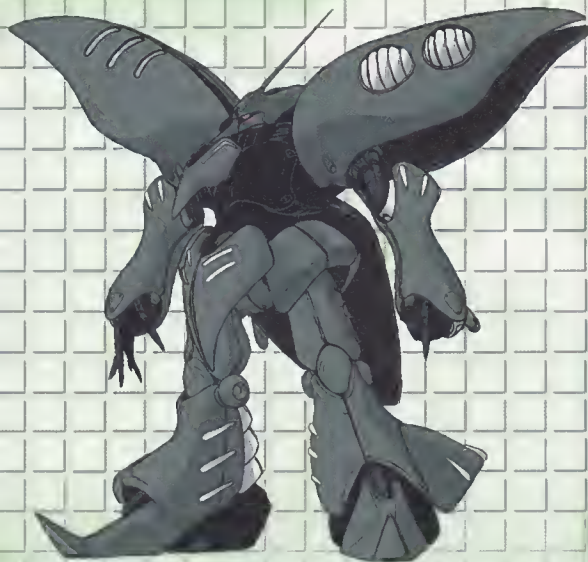
ドーベン・ウルフは、簡易サイコミュを搭載した、一般兵用の量産型「サイコ・ガンダム」といった機体である。一般兵でもオールレンジ攻撃が可能な、インコムやビーム砲内蔵の有線式ハンドを使用することができる。また、メガ・ランチャーとしても機能する大型ビーム・ライフルや、対艦用大型ミサイル、12連装ミサイルランチャーなどの大型火器も多数装備。くわえて、運動性も高い水準を保っている。

ラカンの卓越した操縦技術もあり、本機は強化人間を相手にしながら、かなりの善戦をしている。むしろ、「武人ここにあり」といった戦いぶりは痛快に思えてならない。ドーベン・ウルフは、オールドタイプ最後の希望の星だったといえるだろう。



恐ろしいほど高いポテンシャルをもつ量産型キュベレイ。ゲーマルクのビームを軽々避けるなど、機動性も高い。

グレミー軍カラー



量産型キュベレイ

AMX-004G

オリジナルより攻撃力が増した量産タイプ

SPEC

「キュベレイ」の量産機。ファンネルが30基と、試作機より多い。全高18・4m。重量35・2t。搭乗者はニュータイプ部隊。



無表情で人間味のない戦闘マシン

小惑星基地「アクシズ」に後退した「クイン・マンサ」は、「量産型キュベレイ」軍団を率いて再び戦場に舞い戻る。単機でさえ驚異的なポテンシャルを誇る機体が徒党を組んだ、その攻撃力は絶大で、ハマーン・カーン軍やガンダムチームを終始圧倒していた。

その後、グレミー・トトが戦死すると、量産型キュベレイ軍団はその吊い合戦とばかりにハマーンの「キュベレイ」の前に出現。しかし、そこに「ゲーマルク」と「ガズアル」が現れ、その相手をすることになる。

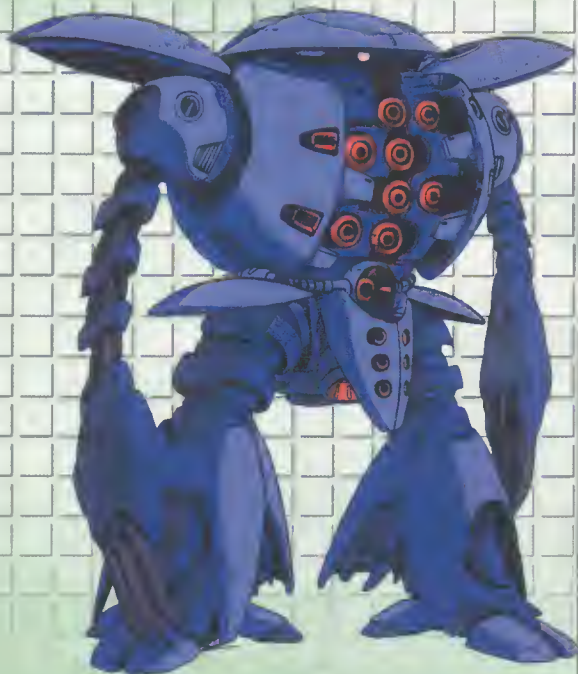
本機はガズアルを一瞬で葬り去るも、ゲーマルクの猛攻の前に次々と大破。残る1機も、ゲーマルクともども爆発してしまった。

量産型キュベレイは、その名の通りキュベレイの量産機で、グレミーが誇るニュータイプ部隊によって運用されている。マスプロモデルながら背部にはアクティブカノン2門を追加し、ファンネルは30基も装備しているため、試作機よりも大幅に攻撃力が増している。ちなみに、初登場時はグレーのカラーリングで、最後の戦闘時には紫のカラーリングで現れている。

オリジナルより攻撃力が増し、量産化されたキュベレイには、絶望的な気持ちしかわかない。しかも、乗り手が「ニュータイプ部隊」と称される面々で表情が見えず、劇中での量産型キュベレイは非常に無感情で、人間味のない戦闘マシンという印象が強い。それは、強さと引き換えた代償なのだろう。



水中から攻撃を仕掛けるカプール。戦闘は短かったが、その戦い方が今なお通用することを実証する活躍であった。



カプール

AMX-109

ハイゴックグを発展させた優秀な水陸両用機

SPEC

ネオ・ジオンが地球侵攻作戦に備えて開発した水陸両用モビルスーツ。全高 16・5m。重量 38・7t。主な搭乗者はタマン。



▽スペース・コロニー製のため好まれず

地球へと降下した強襲巡洋艦「アーガマ」に水中から忍び寄り、攻撃を仕掛けるモビルスーツがあった。「カプール」である。カプールは水中を自在に移動し、ミサイルでアーガマを次々に攻撃。しかも、迎撃に出た「Zガンダム」の追尾も、水中に潜ってあつという間に振り切ってしまう。実に鮮やかな手並みだった。

その後、ネオ・ジオン兵に騙された少年、タマンが乗り込み、再びアーガマに攻撃を仕掛ける。しかし、ジウドー・アーシタの説得で我に返った彼は、カプールを乗り捨てて、ネオ・ジオン軍の秘密基地に特攻自爆する。

カプールは、ネオ・ジオンが開発した水陸両用モビルスーツである。「ハイゴック」の発展系で、水中を移動する際には手足を収納して球体型のモビルアーマー形態に変形する。この形態はホバー移動できるほか、耐圧性や耐弾性も向上するというメリットがある。なお、武器としてはアイアンネイルや連装ミサイル、ソニックブラスト、レーザービームを装備している。

事実上、ハイゴックや「ズゴックE」以来の水陸両用機だけあって、本機の機体性能は過去のモデルを遥かに凌駕している。しかし、スペース・コロニー製という理由から、地球のジオン軍人にはあまり好まれなかったらしい。新型にもかかわらず、少年タマンをカプールに乗せたのは、そうした理由があったからのようだ。

本機がともに評価されなかったのは、残念でならない。



水中戦用の武器を多数装備しているザク・マリナー。劇中では、その実力をいかすことなく撃沈した。



ザク・マリナー

RMS-192M

着脱式のハイドロジェットをもつ水中用ザク

SPEC

ネオ・ジオン地球軍の水中用モビルスーツ。全高 17・5m。重量 48・8t。主な搭乗者はエイン、ビーツ。



▼得意の水中戦のはずが……

「カプール」とともに水中から、強襲巡洋艦「アーガマ」を視察していた「ザク」のような機体。それが「ザク・マリナー」だ。

本機も攻撃に参加しようとするが、命令でその場をすぐに撤退。その後、タマンの乗るカプールを弾除けとして、再びアーガマ襲撃を狙うが、「ZZガンダム」にその計画を邪魔され、次々に撃破されてしまった。

ザク・マリナーは、地球連邦軍がザクの水中仕様「ザク・マリンタイプ」の後期型を改良した機体である。ネオ・ジオンがダカールを制圧した際に接収され、地球軍に配備された。水中用の装備の大半はアタッチメントで、特に脚部のハイドロジェットを取外せば、地上でも運用できるようになっている。また、機体そのものはザクシリーズのものを大幅に流用しているため、整備や生産の面から見てかなり扱いやすい機体だったようだ。

武器はサブロケットランチャー、マグネットハーケン、サブロケットガンなど。ちなみに、ザク・マリナーには一般機、指揮官機、シュノーケルカメラ装備型の3種類が存在する。

カプールに比べると明らかにザク・マリナーの見せ場は少なく、水中戦にもかかわらず雑魚つぶりを見せつける結果になってしまった。しかし、その姿はどこかノスタルジックなものを感じさせる。それは、主役を引き立たせた、まさしく「一年戦争」時代のザクとダブるからだろう。果敢なく散ったザク・マリナーも、また立派なザクだったのだ。

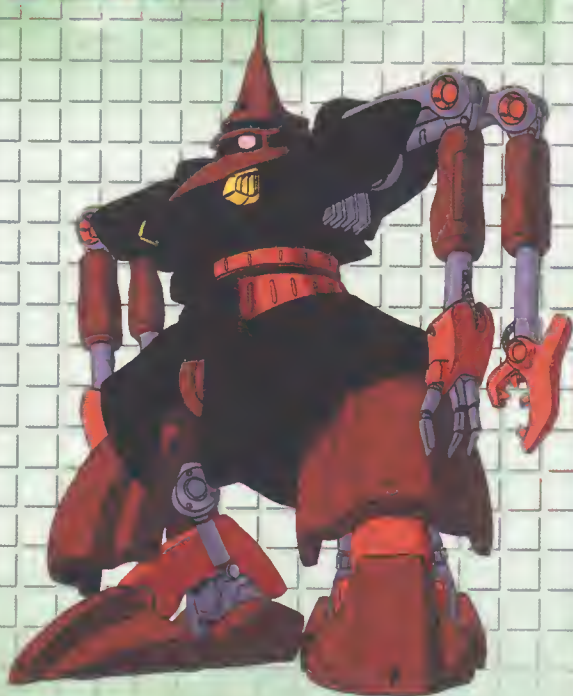


パワーだけでなく、運動性もかなり高いゲゼ。落下中に体を入れ替えて戦うなど、戦闘力は並外れている。

ゲゼ

CUSTOM MADE MOBILE SUIT

パワーあふれる豪腕ファイター



SPEC

ジャンク部品から、ゲモン・バジャックが独自に製作した作業用モビルスーツ。全高、重量は、ともに不明。

無所属

最新技術が満載のリサイクルモビルスーツ

ネオ・ジオンと手を結んだゲモン・バジャックは「ゲゼ」を駆り、強襲巡洋艦「アーガマ」を襲撃せんと出撃する。だが、なぜか「Zガンダム」と決闘をすることになる。ゲゼは、その強力なパワーでZガンダムを圧倒する戦いを見せるが、結局ジュドー・アースタに乗り変わったZガンダムに腕を斬られて敗北してしまう。

その後、復讐に燃えるゲモンは再びゲゼで出撃。今度はヤザン・ゲーブルを乗せた、もう1機のゲゼも連れて、アーガマやZガンダムに襲いかかる。暴虐三昧の2機だったが、結局はゲモン機もヤザン機も、Zガンダムのビーム・ライフルを受けて爆発してしまう。

ゲゼは、ゲモンがジャンク部品から製作したリサイクルモビルスーツで、ジャンク処理の作業用のもの。武器となる電流が流れる特殊ステッキも、ジャンク処理用のものだ。戦闘用ではないが、「グリプス戦役」の機体パーツを利用してあるため、実はガンダリウム合金やムーバブル・フレームなどの、最新技術が満載されている。また、コクピットはむき出しで、胴体にあるレールを一周する移動式となっている。

ゲゼは、そのユーモラスなデザイン通り、三枚目的な機体である。Zガンダムとボクシングに挑んだり、アーガマを鉄骨でバシバシ叩いたり、空中でZガンダムにプロレス技をかけたたりする。だが、作業用にしてこの活躍は見事。「グリプス戦役」のモビルスーツのパーツから再生されたことは、伊達ではないということだろう。

高出力・重火力化によって 機体の大型化が進む

「第一次ネオ・ジオン戦争」に投入されたモビルスーツの種類は、「グリプス戦役」とほぼ同じで、エウーゴ側の機体はカラバの「ジムⅢ」を含めてわずか7機種なうえに、新型機は「ZZガンダム」とジムⅢのみであった。

これは、「グリプス戦役」に勝利したとはいえエウーゴの戦力は消耗が著しく、新型量産機の配備の間に合わせるのが精一杯で、エース機級の新型機を開発する余裕がほとんどなかったためと思われる。

一方のネオ・ジオンは、新たに多種多様なモビルスーツの開発が可能となるほど勢力を拡大。

その勢いは、「二年戦争」当時の旧ジオン公国を彷彿とさせるもので、ひとつの小惑星を拠点とする勢力に過ぎなかったネオジオン（旧アクシズ）は、地球圏にとってそれだけ大きな脅威となっていたのである。

また「グリプス戦役」では数々の可変モビルスーツが投入されたが、エウーゴでは「Zガンダム」のみで新たな機体は開発されておらず、ネオ・ジオン軍でも計6機種にとどまっている。

エウーゴで新たな可変機が開発されなかったのは、可変機は機動力は高いものの整備に手間がかかるうえ、パーツの互換性もほとんど望めないということをグリプス戦役での経験から知ったためと思われる。

ネオ・ジオン軍で可変機の割合が低いのは、もともと独自にモビルスーツ

を開発しており、個々のモビルスーツの高出力・重火力化が進んだことで一定水準以上の機動力が確保できたため、変形する必要がなかったということがあったのだろう。

この「モビルスーツの高出力・重火力化」という傾向は、両陣営ともに共通して見られる現象だが、特に新型機を多数開発したネオ・ジオン側で著しく、それにともない機体も大型化していった。

ネオ・ジオンの権力を握るハマーン・カーンは、グリプス戦役での経験から主力機である「ガザC」では能力不足であり、戦闘員の大半が戦いに不慣れた新兵である点をカバーする意味でも、強力な機体を開発する必要性を感じていたと思われる。

さらにネオ・ジオンでは、旧ジオン公国で開発されたサイコミュ兵器の研究を引き継いでいたほか、ティターンズからの亡命者も受け入れていたように、一般兵でも扱える準サイコミュ兵器を搭載した機体まで開発しており、戦力的にネオ・ジオン軍は万全の状態だったといえるだろう。

なお、劇中にはモビルスーツの祖先ともいえる作業用機械「キャトル」が登場しており、現役のモビルスーツに負けないパワーでガザCを撃破する活躍を見せていた。

興味がある方は、チェックしてみてほしい。

第4章

機動戦士ガンダム
逆襲のシヤア

宇宙世紀0093年。数々の戦いの中で地球人類に対する失望を深めたシャア・アズナブルは、新たに「ネオ・ジオン」を結成。地球連邦政府に対し宣戦を布告し、地球寒冷化計画の第一段階として、小惑星「5th ルナ」を地球へ落下させるのだった。

シャアは「サザビー」、アムロ・レイは「νガンダム」と、それぞれサイコ・フレームを使用した機体に搭乗して直接対決を行ったほか、ネオ・ジオン軍は「マラサイ」から派生した「ギラ・ドーガ」、地球連邦軍は「ジム」系の最終系である「ジェガン」を、それぞれ主力機としている。

これらは、初期のモビルスーツに近いサイズで機動力を重視しており、機体の大型化という傾向は影をひそめている。

■ ロンド・ベル

武力を用いた反政府運動を取り締まる目的で設立された、地球連邦軍の外郭新興部隊。エゥーゴやカラバなど、一時的に地球連邦政府から離反した組織を母体としているため、地球連邦軍内部からは危険視する声も多く、補給をはじめとする支援などがおぼろげになるという一面もあった。

■ ロンデニオン

スペース・コロニー「サイド1」にあるコロニーで、ロンド・ベル隊の本拠地。

■ スウィート・ウォーター

ネオ・ジオンの拠点。密閉型と開放型を組み合わせられてつくられたコロニーで、多くの難民が住んでいる。

■ 地球寒冷化計画

ネオ・ジオンが推し進める計画名。地球に小惑星を落とすことで「核の冬」をおこし、人が住めない状態にしようとする計画。地球に居続けようとする人々を無理やり宇宙へあげ、ニュータイプへ覚醒させようという狙いもあった。

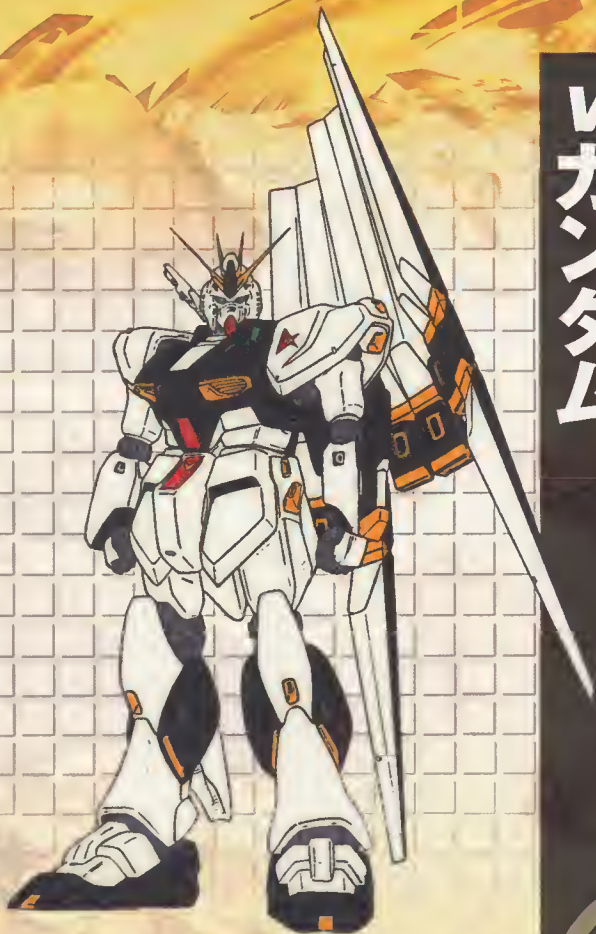
■ サイコ・フレーム

サイコミュの機能をもつコンピュータチップを、金属粒子レベルで取り込んだモビルスーツ用素材。コアとなるメインコンピュータを設置することにより、サイコミュシステムとして高い機能を発揮する。この素材によって、サイコミュ機器の小型化が実現した。シャアは密かにこの技術を、νガンダムに供与していた。

アムロ・レイの手によって設計された最強のガンダム

RX-93

Vガンダム



SPEC

アムロ・レイの専用機として彼自身が設計し、アナハイム・エレクトロニクス社で開発された機体。
全高 22・0m。重量 27・9t。



遅すぎる機体の完成

劇中のオープニングにおいて、組み立て前の姿でいきなり登場したのが「vガンダム」である。

冒頭でクエス・パラヤが言っていたように、ネオ・ジオンの総帥シャア・アズナブルはすでに「地球寒冷化作戦」を始動しており、かつての英雄アムロ・レイは、ロンド・ベル隊のモビルスーツ隊長として戦っていた。

しかし、最初の戦闘シーンとなる小惑星「5thルナ」落としの攻防で、アムロが搭乗していたのは「リ・ガズイ」で、オープニングで現れたガンダムではなかった。「あの機体はまだ出てこないのか」と、やきもきしながら作品を観ていた人も多かったはず。ところが、この「ガンダムはまだか」という思い、実は登場人物であるアムロも同じだったのだ。

これまでの経験で地球に住む人々の姿に絶望していたシャアは、これを滅ぼして地球に住めなくすることで強制的に人類を宇宙にあげ、ニュータイプとして目覚めさせようと考えていた。彼は、宇宙移民

シャアの計画はすでに動き出していたが、vガンダムは組み立て途中で未完成だった。



者（スペースノイド）の自治権を掲げて新生ネオ・ジオンを組織し、スペース・コロニー「スウィート・ウォーター」へ武力進駐した。

アムロは、これまでの間にすべてのコロニーを調査し、シャアの行方を追っていたが、シャアが行動をおこすまでついに発見できなかったのだ。

また、地球連邦政府にしても、シャアに対抗するためにアムロをロンド・ベル隊へ配属しておきながら、いまだにニュータイプを恐れており、ガンダムタイプのモビルスーツの使用を禁じたばかりか、ロンド・ベル隊からの兵力増強要請をなかなか受け入れなかった。

νガンダムの開発も、シャアが大々的に行動をおこしてからようやくはじめられたため、アナハイム・エレクトロニクス社が3ヶ月という短期間で進めたにもかかわらず、シャアの「地球寒冷化作戦」の第一段階である5thルナ落としての攻防時には、まだ機体の組み立てすら終えていなかったのである。

こうした経緯で、アムロはリ・ガズィで出撃するが、ネオ・ジオン軍のニュータイプ専用モビルスーツ、特にシャアが搭乗する「サザビー」との性能差は大きく、計画の阻止に失敗。宿敵のシャアを目の前にしながら、アムロは撤退を余儀なくされたのだった。

調整を重ねつつ、その真価を遺憾なく発揮する

この戦いで危機感を覚えたアムロは、月面都市「フォン・ブラウン」での調整を控えていたνガンダムを、時期を早めて引き取ることにした。そして、劇中で初めて全身を表すのは、シ

ヤアがスペース・コロニー「ロンデニオン」へ降下する際の陽動作戦でのこと。急遽ロンド・ベル隊への帰還命令を受けたアムロは、vガンダムのサイコミュ受信調整もそこそこに軽装備のまま出撃。直接戦場へ向かったのであった。

ロンド・ベル隊へ帰還したアムロは、メカニックのチエーン・アギとともにvガンダムの調整を進め、小惑星「アクシズ」をめぐる戦いではフル装備で第二波として出撃。ネオ・ジオン軍の「ギラ・ドーガ」を次々と撃破していった。

しかし、このときはサイコミュの調整が不完全だったのか、フィン・ファンネルを簡単に撃ち落とされてしまったり、ケーラを人質にとられた際には、過敏に反応して悲惨な結果を招いてしまったりと欠点も見られ、万全とはいえない状態だった。

このうち、ロンド・ベル隊はアクシズへ三段構えの攻撃を仕掛けるが、このときはさらに調整を進めていたようで、前回とはフィン・ファンネルの動きががらりと変わっていた。ネオ・ジオン軍の強化人間ギユネイ・ガスが搭乗する「ヤクト・ドーガ」との戦いでは、彼のファンネルをやすやすと撃ち落とし、クエス・バラヤ搭乗の「a・アジール」との戦いでは、まったく歯牙にかけずに攻撃を受け流して、

戦場へ急行するvガンダム。このときの遠距離射撃は、敵に戦艦のビーム砲と思わせるほどの威力だった。



格の違いを見せつけていた。

また、サザビーとの決戦でも、フィン・ファンネルはサザビーのファンネルと互角だったほか、ビーム・ライフルでの射撃戦、ビーム・サーベルでの白兵戦いずれにおいても堂々と渡りあっており、本来の性能を十分に発揮していた。

▽スマートなフォルムに搭載された数々の装備

νガンダムの基本武装は、専用の大型ビーム・ライフルとビーム・サーベルのほか、頭部に60ミリ機関砲、背面にフィンファンネルを6基とニュー・ハイパーバズーカを装備。左手のシールドにはミサイルが搭載されているほか、手（マニピュレータ）の先端にダミーの発射機能がついている。

主に使用していたのはビーム・ライフルで、ネオ・ジオン軍のモビルスーツを一撃で破壊する威力をもっていた。ビーム・サーベルはサザビーとの戦いで使用していたが、相手がシヤアだったこともあり、決定的なダメージは与えられていなかった。頭部の機関砲は、ギラ・ドーガのシュトルムファウストの迎撃に使用していたが、ギラ・ドーガの頭部も破壊しており、かなりの火力を発揮していた。

背面の左側に装備されたフィン・ファンネルは、主にヤクト・ドーガやサザビーといった、ニュータイプ専用機との戦いで使用していた。脳波によるコントロールで敵を直接攻撃するだけでなく、相手のファンネルを迎撃したり、フィン・ファンネルを立体的に展開してバリアを

張ることもできる。ランドセルに装備されたニュー・ハイパー・バズーカは、マニピュレータで構えなくても射撃が可能で、ヤクト・ドーガとの戦いでは、攻撃をかわしたあとの反撃に使用してシールドを破壊。また、シールドとともに囷に使用して、ギユネイのヤクト・ドーガを撃破していた。

vガンダムのコクピットシートの上しろには、サイコミュの受信パックがあり、敵の脳波をサイコミュで強化してキャッチすることで対応を早めるシステムになっている。また、コクピット周囲のフレイム材料に、金属粒子並みの小さなマイクロコンピュータチップを埋め込んだサイコ・フレイムを使用し、より反応を高めている。

しかし、実はこのサイコ・フレイムは、アムロと互角の条件で戦って決着をつけることを望んだシャアが、意図的に情報を流したものだった。

この結果vガンダムは、基本的には非常にバランスが取れたクセのない機体でありながらも、アムロの意思に敏感に反応するカスタム機としての要素を併せ持つ、高性能機となった。

そして、結局シャアのサザビーは、最終的にvガンダムにパワー負けをする事態となり、敗れ去ることになったのであった。

アムロの操縦に敏感に反応するvガンダムは、もはやシャアのサザビー以外、敵なしといった状態だった。





リ・ガズイという名前の由来は、「リフデ
インド・ガンダム・ゼータ」(Refind
Gundam Zeta)の頭文字だ。



飛行形態



リ・ガズイ

RGZ-91

Zガンダムの流れを受け継いだ量産型の新鋭機

SPEC

「Zガンダム」の量産機。全高20・5m。重量
24・7t。主な搭乗者はアムロ・レイ、ケーラ・
スゥ。



高火力をいかして敵艦隊を強襲

劇中冒頭の小惑星「5thルナ」落としの攻防戦で、アムロ・レイが搭乗していたのが「リ・ガズィ」である。この戦いでは、ネオ・ジオン軍の強化人間ギニュー・ガス搭乗の「ヤクト・ドーガ」を追い詰めていたが、シャア・アズナブルの「サザビー」には性能が及ばず撤退。シャアからは、「そんなもの」と表現されていた。のちに、アムロが「^{ミナ}リガンダム」に搭乗するようになる、以後はロンド・ベル隊のケーラ・スウやメカニックのチューン・アギが使用した。

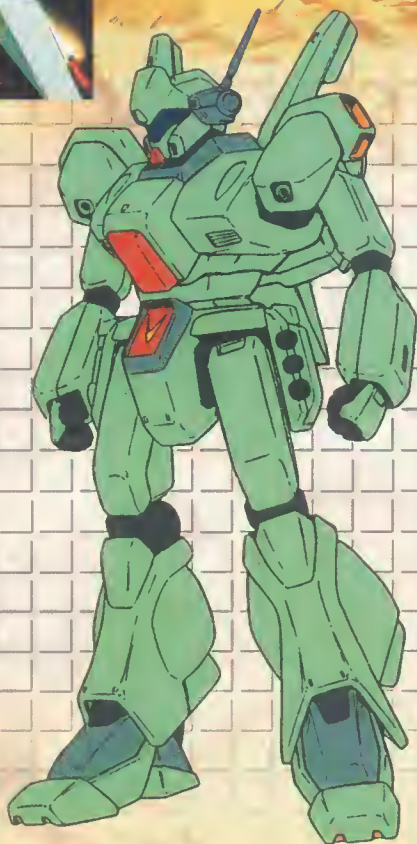
ニュータイプのを恐れる地球連邦政府により、ガンダムタイプのモビルスーツの使用を禁じられたアムロが、唯一持ち出せたのが本機である。このリ・ガズィは、「Zガンダム」の量を指標につくられ、フレームはZガンダムのものをコピーしている。基本武装に、ビーム・ライフルとビーム・サーベル、腕部と脚部にグレネードを装備し、指からはダミーを放出できる。また、簡易可変機構のバック・ウェポン・システム（BWS）により飛行形態をとることができ、大口徑ビーム・キャノンと二連装ビーム・キャノン、ミサイルが使用可能になる。

しかし、モビルスーツ形態になると完全に除装するため、その戦闘では飛行形態をとれなくなる。劇中では飛行形態で出撃し、ビーム・キャノンの高い火力をいかして敵艦隊に強襲をかけていた。

最後はチューンが搭乗したが、クエス・パラヤを殺されて逆上したハサウェイ・ノアに破壊された。



ビームやファンネル主体の時代にあっても、実弾兵器である連装ミサイル・ランチャーの実用性は意外と高いようだ。



ジェガン

RGM-89

ふたつの技術を統合した究極のシムシリーズ

SPEC

地球連邦軍の主力量産型モビルスーツ。全高 19・0m。重量 21・3t。主な搭乗者はケーラ・スゥ、ハサウェイ・ノア。



乗る人が乗れば活躍できる機体

劇中冒頭での、ネオ・ジオンによる小惑星「5thルナ」落下作戦。これを阻止するべく、ロンド・ベルの主力機として「ジェガン」は初めて我々の目の前に姿を現す。

以降、地球連邦軍の布陣に必ず登場するこのモビルスーツは、端的に言えば『逆襲のシャア』時代における連邦軍側のやられ役で、劇中ではとにかく瞬殺されるシーンばかり目立つ機体だ。そんなジェガンはもともと、連邦軍の「ジム」シリーズの特性に、アナハイム・エレクトロニクス社の「ネモ」の技術を統合するという設計思想のもとで開発された。つまり、究極のジムシリーズを追求したモデルなのだ。

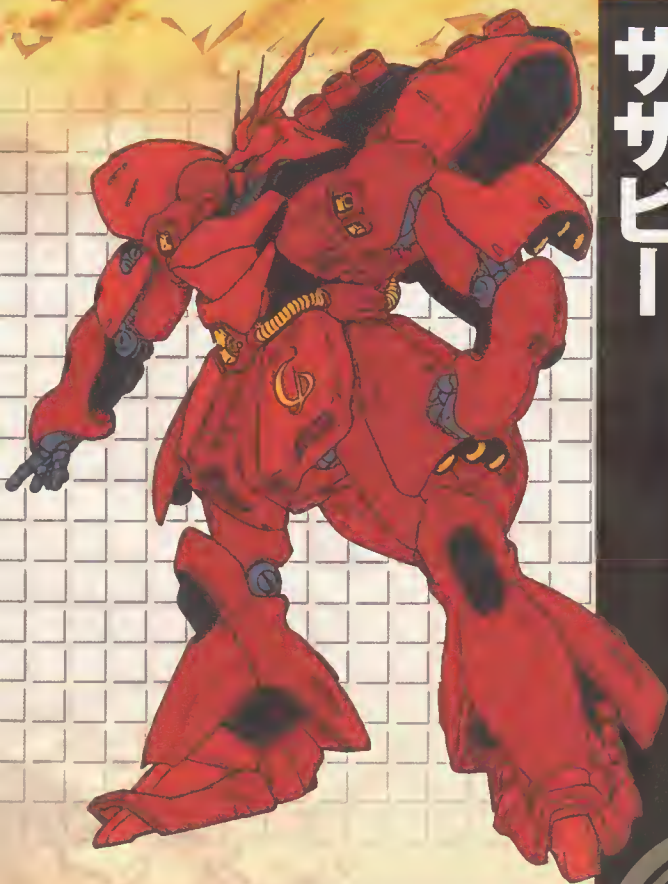
実際、本機は改修を繰り返しながら30年以上も現役で運用されており、それだけ信頼性が高かったことを証明している。また、武器的には、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、60ミリバルカン砲というジムシリーズの標準装備に加え、腰部にハンドグレネード、シールドに連装ミサイルランチャーというオリジナル武装も装備。特に連装ミサイルに関しては、「ギラ・ドーガ」を撃破するシーンが劇中でも何度か見られており、実はかなり優秀な武器だといえる。こうして見るとジェガンは決してスペックの低いモデルではなく、伊達に究極のジムシリーズではないといえる。実際、ハサウェイ・ノアの乗るジェガンは、バルカンだけで「ギラ・ドーガ」を撃破したりしている。

そういう意味では、乗る人が乗れば立派に活躍できる名機なのである。

Vガンダムと激闘を繰り広げた、シャア・アズナブルが駆る真紅の機体

MSN-04

サザビー



SPEC

ネオ・ジオン総帥、シャア・アズナブル専用モビルスーツ。全高 23・0m。重量 30・5t。
サイコ・フレームを使用している。



VVガンダムの登場をひたすら待つ

劇中冒頭の小惑星「5thルナ」落下作戦で、ギユネイ・ガスの「ヤクト・ドーガ」を援護するため、シャア・アズナブル自ら搭乗し、戦艦「レウルーラ」から発進した真紅の機体が「サザビー」である。

このとき、 Rond・ベル隊のエースパイロットである、アムロ・レイ搭乗の「リ・ガズイ」と交戦しているが、ファンネルは牽制程度にひとつ飛ばすだけにとどめ、ほとんど使用しないという余裕すら見せていた。その場でようすを見ていたギユネイは、なぜファンネルを使わないのかといぶかしんでいたが、シャアは「アムロと対等の条件で戦って勝ちたい」という宿願があったことから、リ・ガズイに乗ったアムロをあえて見逃したと思われる。

地球連邦軍よりも戦力が劣るネオ・ジオン軍にとって、サザビーほどのモビルスーツは重要な戦力になりうるはずだが、搭乗者であるシャアがネオ・ジオン総帥という立場にあることから、そうそう前線に出て軽々しく戦うというわけにはいかないようだ

出撃したサザビーだが、ファンネルによるアクシズへのミサイルの迎撃に専念していた。



った。

とはいえ、小惑星「アクシズ」に対してロンド・ベル隊が攻撃を仕掛けた際には、サザビーのファンネルでこれを迎撃しており、あくまでアクシズの推進力となっている核ノズルを守るといふ、防衛的なスタンスで戦闘に参加していた。

シヤアの興味はアクシズを地球へ落下させることと、「^{ミイ}レガンダム」に搭乗したアムロと戦って決着をつけることだけだったので、レガンダムを待っていたともいえる。

▽ネオ・ジオン総帥機にふさわしいハイスペック

ジオン・ダイクンの遺児、キャスバル・レム・ダイクンとしての顔をもつシヤアは、ジオン軍の一員として地球連邦軍と戦い、またエウーゴのクワトロ・バジーナとして地球連邦政府の内情に触れた。

これらの経験で、地球に住む人々に絶望した彼は、人類を強引に宇宙へあげることでニュータイプへの覚醒を促そうと考える。

そして、ネオ・ジオンを結成するとスペース・コロニー「スウィート・ウォーター」へ武力進駐し、地球連邦に宣戦布告を行うと同時に「地球寒冷化計画」を発動したのだった。

新たにネオ・ジオン軍を設立するにあたっては、総帥であるシヤアが搭乗するモビルスーツを開発することになった。こうして誕生したのが総帥専用モビルスーツ、サザビーである。総帥専用モビルスーツの開発にあたっては、当初「ギラ・ドーガ」をベースにした「レーテ・ド

「ガ」という機体が開発されたが、ギラ・ドーガのフレーム内では、サイコミュの装置が収まりきらず、求められたスペックに達しなかった。このため、新たに大型の機体を開発することになったが、構造部材にサイコ・フレームを採用したことで過度な大型化を抑えることに成功し、現在のサイズに落ち着いたのであった。

ネオ・ジオン総帥自らが搭乗するモビルスーツということで、機体はより頑丈であることが要求されたことから、耐久性は非常に高くなっている。また、ほかの多くのモビルスーツとは異なり、コクピットが頭部に設置されており、緊急時には機体から切り離すことが可能となっている。コクピットが頭部に設置されたことで生まれた胴体のスペースには、高出力のジェネレーターとサイコミュのメイン機器を装備している。

主武装に、ビーム・ショット・ライフルを装備し、左右のマニピュレータにはビーム・サーベルが1本ずつ収納されているほか、腹部にメガ粒子砲、背面にファンネル6基を搭載したコンテナを装備。

また、左腕に装着されたシールドの裏にはミサイル、スカートの内側にはビーム・トマホークを装着している。

冒頭の5thルナでの戦いでは、リ・ガズイが

ビーム・ショット・ライフルでビームを狙撃。シャアの能力とサザビーの高い出力、どちらが欠けてもできない芸当だ。





高出力のメガ粒子砲を拡散状態で発射し、ジェガン3機を同時に撃破。量産機がつけいる隙などまったくない。

ヤクト・ドーガに放ったビームを狙撃して窮地を救うという離れ業を見せていたが、これはリ・ガズイのビーム・ライフルより出力が高いがゆえにできたことだ。また、直後のビーム・サーベルでの接近戦でも、パワーで押し勝っている描写があり、出力の高さがうかがえる。

▽Vガンダムとの果てしない戦闘

5thルナの戦い以後、サザビーが本格的に戦闘能力を披露するのは、終盤のアクシズ攻防戦で、アムロのVガンダムを捕捉してからだ。

Vガンダムの接近を感知したシヤアは、サザビーで積極的に攻撃を仕掛け、サザビーの装備をフルに活用して、打倒アムロの宿願を果たそうと奮戦する。

このとき、ビーム・トマホークを投げつけてVガンダムのビーム・ライフルを破壊しているが、アムロはアクシズの核ノズルの破壊を優先していたためか、サザビーの攻撃に対し防衛的に戦っていた。

途中、ロンド・ベル隊のジェガンがサザビーを止めようと向かってくるが、ビーム・ショット・ライフルやビーム・サーベルであっさり返り討ちにしたほか、残る相手は腹部のメガ粒子

砲で一掃。またたくまに5機のジェガンを文字通り瞬殺して見せている。このとき、腹部メガ粒子砲は拡散状態で発射されていたことから、射撃モードを切り替えて使用できることがうかがえる。

νガンダムからアムロが降りて、アクシズ内部の確認を行ったのち、サザビーは再びνガンダムと白兵戦を展開。νガンダムがギラ・ドーガから奪ったビーム・マシンガンの狙撃を受けるもほとんど損傷もなく、装甲の堅牢さを実証して見せた。

また、サザビーが左手に構えていたビーム・トマホークは、先端からブレードを発生させて大型のビーム・サーベルとして使用していた。

激しい戦いで、ビーム・ショットライフルと右のビーム・サーベルを失いながらも戦い続けていたサザビーだが、途中のパワーダウンがいたのか左手で使用していたビーム・トマホークの出力で押し負け、左腕を破壊される。

最後は双方武器を失い、強靱な手足を使つての格闘戦となったが、アクシズに叩きつけられたショックで頭部が損傷。

コクピットユニットが射出されてしまい、惜しくも敗れ去ることになった。

残った左手のビーム・トマホークで、νガンダムをとらえかけたものの、惜しくも決定打とまではならなかった。

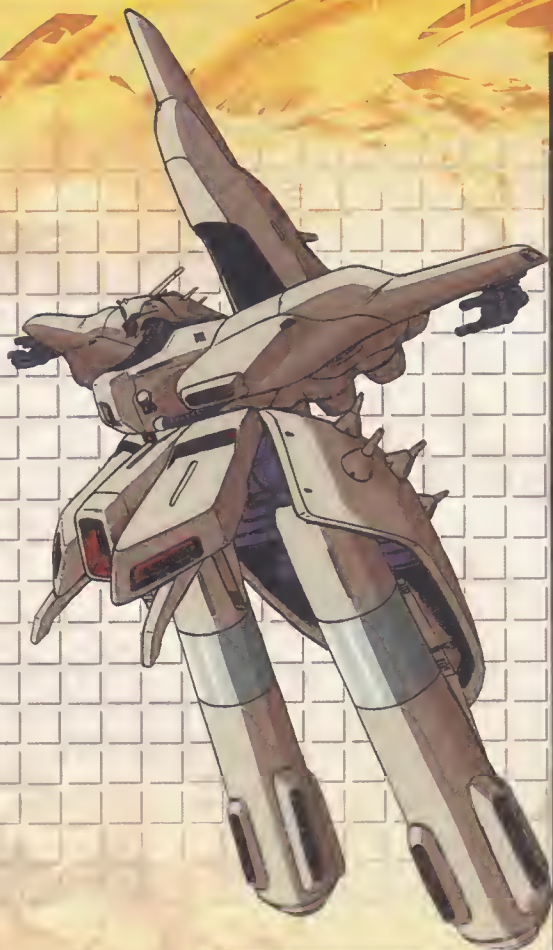


ニュータイプ専用機として開発された巨大モビルアーマー

NZ-333

アルバ

α・アジール



SPEC

ネオ・ジオン軍のニュータイプ専用モビルアーマー。全高 58・4m。重量 128・6t。搭乗者はクェス・エア。



△ ジェガン隊を単機でくい止めるもνガンダムは倒せず

「^α・アジール」は、ネオ・ジオン軍が地球連邦軍の小惑星「ルナツー」と、小惑星「アクシズ」への同時攻撃に出撃する際に登場した。

艦艇の格納庫には収容できないほど機体が巨大であるため、劇中では戦艦「レウルーラ」からワイヤーを射出し、艦底に固定して牽引。シャア・アズナブル率いる艦隊がアクシズを制圧したのちは、アクシズのドックに収容されていた。

劇中にα・アジールが登場したとき、パイロットはまだ決まっていなかったようで、冒頭の小惑星「5thルナ」落下作戦で登場していなかったのも、このためと思われる。

ところが、ネオ・ジオンに身を寄せた民間人の少女クエス・エア（クエス・パラヤの偽名）は、ニュータイプの資質をもっており、「ヤクト・ドーガ」に搭乗して戦力の一端を担うこととなった。

このヤクト・ドーガがルナツー攻防戦で損傷し、また、クエスとα・アジールの相性がよかったということもあって、彼女がパイロットとして搭乗することに

α・アジールは、牽引しているレウルーラがひどく小さく見えてしまうほど、巨大なモビルアーマーだ。



決まったのだった。

劇中ではアクシズ攻防戦で出撃し、ネオ・ジオン軍の強化人間ギユネイ・ガスの「ヤクト・ドーガ」の援護を受けつつ、ロンド・ベル隊の「ジェガン」やアムロ・レイ搭乗の「νガンダム」と戦った。

連邦軍の量産型モビルスーツ「ジェガン」を相手に戦った際は、a・アジールがニュータイプ専用モビルアーマーでもともとと強力な火力を有していたことと、クエスのニュータイプ能力が高かったこともあって、大した戦闘訓練を積んでいないクエスが操縦しているにもかかわらず、強力なオールレンジ攻撃で、多数のジェガンを撃墜する戦果をあげていた。

しかし、同じニュータイプ能力者であるアムロが搭乗するνガンダムとの戦いでは、大型ファンネルが次々と撃ち落されて、アムロに「子供につき合っていないか」などと言われてしまふ。

こののちも、しつこくνガンダムに追撃をかけ、a・アジールの大型ファンネルとギユネイ機のファンネルによる波状攻撃で、一瞬勝機が見えたかに思えたが、フィン・ファンネルのバリアに阻まれて不発に終わる。なおも有線サイココミュ式メガアーム砲で攻撃を仕掛けるが、まったく当てられず、歯が立たない状態であった。

a・アジールは優秀な機体だったが、パイロットのクエスはニュータイプ能力が高いとはいえ戦闘経験が足りておらず、同じニュータイプで数々の戦いをくぐり抜けてきたアムロの相手にならないのは当然で、勝てというほうが無理というものだ。

最後は、アムロのあとを追おうとするもハサウェイ・ノアのジェガンに止められ、事情を知らないチエーン・アギがハサウェイを助けようと放った、「リ・ガズイ」のグレネードの直撃を受けて破壊されてしまった。

総帥専用モビルアーマー開発計画の流れをくむ機体

α・アジールは、総帥専用機「サザビー」を開発する過程で、総帥専用機をモビルアーマーにしようという案を、別の計画として継続した結果、完成した機体である。

武装としては、頭部のメガ粒子砲と大型ファンネル9基を備えているほか、シオルダーアーマーの両翼に有線サイコミュ式メガアーム砲を装備している。

劇中では、艦艇からのミサイルの迎撃やロンド・ベル隊のジェガンに対してメガ粒子砲を使用していたほか、有線サイコミュ式メガアーム砲によるオールレンジ攻撃も披露し、高い火力を見せつけていた。

性能的には決してガンダムにも劣っていないが、はずのα・アジールだが、戦士として優秀なパイロットに出会えなかったために、性能を出しきれなかったことが悲運といえる。

有線サイコミュ式メガアーム砲によるオールレンジ攻撃は、単機でジェガン隊を足止めするほどの威力。





クェス・エア機

ギユネイ・ガス機



ヤクト・ドーガ

MSN-03

ネオ・ジオン軍の中核を担ったニュータイプ専用機

SPEC

ニュータイプ専用モビルスーツ。全高 21・0m。重量 28・0t。搭乗者はギユネイ・ガス、クェス・エア。



縦横無尽の活躍でロンド・ベル隊を苦しめる

「ヤクト・ドーガ」は、劇中冒頭の小惑星「5thルナ」落下作戦で登場。核ノズルを破壊しようとするアムロ・レイの「リ・ガズィ」と戦った。

搭乗者は強化人間のギユネイ・ガスで、機体の性能差もあり、アムロとほぼ互角の戦いを展開し、5thルナ落下作戦を成功に導いた。

ただし、戦闘の最後でシャア・アズナブル搭乗の「サザビー」に援護されている。

クエス・エア（クエス・パラヤの偽名）がネオ・ジオンへ合流してからは、彼女の訓練用として頭部とカラリングが異なるヤクト・ドーガが登場した。

小惑星「ルナツー」への強襲作戦では2体揃って出撃し、ギユネイ機は初めての実戦であるクエス機を守りつつ、ルナツーから発進してきた地球連邦軍モビルスーツ「ジェガン」と交戦。またたくまに8機を撃墜し、圧倒的な力を見せていた。

クエス機は、自身の父親アデナウアー・パラヤが座乗していた巡洋艦「クラップ」のブリッジを、ビーム・ガトリングガンで破壊したが、ミサイルの反撃により

一般兵が搭乗するジェガンが相手では、戦闘というより一方的に蹂躞しているようなものであった。





機体のベースはギラ・ドーガだが、頭部をはじめ各所ともかなり形を変えており、その面影は残っていない。

右腕を損傷した。そしてクエスは、小惑星「アクシズ」攻防戦から「a・アジール」に乗り換えたため、以後彼女の機体は登場しなくなる。

これに対し、ギユネイは以後もヤクト・ドーガに乗り続け、ロンド・ベル隊がアクシズへ放った核ミサイルをすべて迎撃したほか、ケーラ・スウ搭乗の「リ・ガズィ」に対しては、ほぼ反撃を許さずに無力化してしまうなど、縦横無尽の働きを見せる。

▼量産型から生まれたニュータイプ専用機

ヤクト・ドーガは、「レーテ・ドーガ」という機体を前身とした機体である。このレーテ・ドーガは、もともと総帥専用機として、「ギラ・ドーガ」をベースに開発されていたが、ギラ・ドーガのフレーム内では求められたスペックを満たすことができなかった。このため、新たに総帥専用機としてより大型のサザビーを開発することになり、レーテ・ドーガからはサイコミュ試験型のギラ・ドーガを経て、ヤクト・ドーガが開発されることになったのだ。

量産型のギラ・ドーガをベースにしているとはいえ、ニュータイプ専用機として、ファンネルの稼働時間はやや劣るもののサザビーと同様のものを装備しているほか、大型のジェネレー

ターやスラスターの追加などさまざまな改良が加えられており、もはやまったく別の機体となっている。ただし、優秀な性能ではあるものの、根本的に量産機を強引にニュータイプ機として仕上げたものであるため、バランス的には少々問題が残っている。

劇中では、ギユネイ機は濃緑と金、クエス機は赤と白を基調としたカラーリングが施されているほか、ギユネイ機には指揮官機用のアンテナが付けられている。

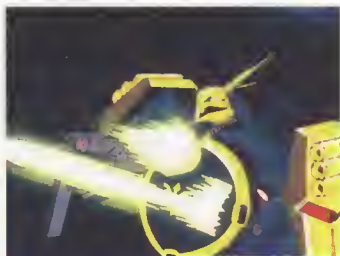
両機とも、ファンネル6基と4連装メガ粒子砲を内蔵したシールドを基本武装としており、加えてギユネイ機はビーム・アサルトライフル、シオルダーアーマーにミサイル、シールドの裏にビーム・サーベルを装備。クエス機は、ビーム・

ガトリングガン装備していたが、そのほかの装備については、使用していなかったため不明である。

最後のアクシズ攻防戦において、ギユネイ機はアムロの「^{ニギハヤヒ}νガンダム」と交戦。クエスのα・アジールとの連携攻撃で窮地に追い込むも、最終的に切り札のファンネルをすべて破壊されて打つ手がなくなり、ビーム・ライフルの直撃で撃破された。

しかし、パイロットの技量差や、νガンダムがヤクト・ドーガより高性能な機体だったことを考えれば、むしろよく戦ったといつてよいだろう。

シールドに武器を内蔵するコンセプトは、「ギャン」や「ハンマ・ハンマ」などの歴代モビルスーツから受け継ぐ。



ジオン軍の伝統を色濃く受け継ぐ最新鋭の量産機

AMS-119

ギラ・ドーガ

一般指揮官機

レズン・シュナイダー機



SPEC

ネオ・ジオン軍の主力を担う量産型モビルスーツ。全高 20・0m。重量 23・0t。主な搭乗者はレズン・シュナイダー。



ジオン系量産機の集大成

劇中冒頭の小惑星「5thルナ」落下作戦で初登場。以後、ネオ・ジオン軍の主力機として登場したのが、この「ギラ・ドーガ」だ。いわば、ネオ・ジオン側のやられ役といえなくもない本機は、量産機の宿命でアムロ・レイやケセラ・スウなど、ロンド・ベル隊の名立たるパイロットたちの前では、あっさり撃破される運命となった。

ギラ・ドーガは、ジオン軍モビルスーツの魂である「ザク」の基本設計をベースに、「グリプス戦役」で登場した「マラサイ」のフレイムと運動性能を加えて設計された機体で、外観がマラサイに似ているのはこのためだ。また、ジオン軍のザクと同様、緑のカラーリングを基調とし、指揮官機にはツノ（アンテナ・ブレード）が付けられている。

なお、レズン・シユナイダーが搭乗していた機体は濃紺色だったことから、一部のエースパイロットに特別のカラーリングを許可する伝統も残っていたと考えられる。

ギラ・ドーガの基本武装は、ビーム・マシンガンとビーム・ソードアックスで、シールドの裏にシユツルムファウストとグレネードランチャーを装備。特に、シユツルムファウストは一撃でジェガンを破壊する威力があるうえに、爆風を目くらましに使う場面もあり、使用頻度は高かった。

やられ役の影響が強いギラ・ドーガだが、ロンド・ベル隊の「ジェガン」が最新鋭の量産機であったことを考慮すれば、互角に戦っていた本機もなかなかの名機といえるだろう。

地球連邦とジオン両系統の 集大成となる機体が登場

「第二次ネオ・ジオン戦争」で巨大化していったモビルスーツだったが、高出力・重火力重視での進化では頭打ちとなり、「第二次ネオ・ジオン戦争」時に投入された機体は、軍用モビルスーツの原点ともいえる「一年戦争」当時に近いものとなっている。

また、シャア・アズナブルが率いるネオ・ジオンは、ザビ家の再興を目標んでいたハマーン・カーンのものとは異なり、地球圏のスペース・コロニーを拠点にした、純粹にスペースノイド（宇宙移民者）の立場を代弁する形をとった組織であった。

このためか、ネオ・ジオン軍のモビルスーツ開発には、スペースノイド寄りの立場ともいえるアナハイム・エレクトロニクス社が深くかかわっている。しかし、地球圏のモビルスーツの製造・開発も、相変わらずアナハイム社が握っており、ネオ・ジオン軍に対抗するロンド・ベル隊や地球連邦軍も、同社のモビルスーツを使用している状況であった。

かくして、「第二次ネオ・ジオン戦争」は「グリプス戦役」当初と同じく、アナハイム社製のモビルスーツ同士が戦うという事態となったのである。

もともと、アナハイム社としては地球連邦もネオ・ジオンも大事な顧客であり、対立する双方の陣営に武器を供与するという事自体は、実在の兵器会社でも見られることなので、そう珍しいというわけではない。

こうした経緯からか、ネオ・ジオン軍の主力機である「ギラ・ドーガ」とロンド・ベル隊の主力機である「ジエガン」は、ほぼ同等といつてよい性能であった。

開発を担当した部署は異なるようだが、やはり双方に出荷するモビルスーツにあからさまに差をつけるわけにはいかないという、同社の事情が関係しているのは間違いないだろう。

両陣営のモビルスーツの特徴としては、ともにグレネードランチャーやシユトルムファウストといった、爆発する実弾兵器を標準装備している点があげられる。

「第一次ネオ・ジオン戦争」では、機体の高出力・重火力化にともない、ビーム・コーティングやフィールドといった、ビーム兵器の威力を緩和する対策も講じられることとなった。

こうした技術の発達により、対抗策として実弾兵器の効果が見直され、爆発系の実弾兵器が標準装備されることになったと考えられる。

モビルスーツの新たな技術は、サイコミュ機能をもつ構造部材サイコ・フレームのみだった。加えて、両機はすべてにおいて高い性能をもち、地球連邦、ジオンそれぞれの系統の集大成ともいえるモビルスーツになっている。

編集	株式会社レッカ社 斉藤秀夫
ライティング	サデスパー堀野 野村昌隆 奈落一騎
装丁	一瀬錠二 (Art of NOISE)
装丁原画	安藤義信
仕上	梅崎裕子
特効	千場 豊
本文デザイン	寒水久美子
DTP	Design-Office OURS
協力	株式会社サンライズ
プロデュース	越智秀樹 (PHP 研究所)

[主な参考文献]

『TV シリーズ機動戦士Zガンダムフィルムブック パート1』、『TV シリーズ機動戦士Zガンダムフィルムブック パート2』(以上、旭屋出版) 『GUNDOAM CENTURY RENEWAL VERSION 宇宙翔ける戦士達』(創想社) / 『機動戦士ガンダム モビルスーツバリエーション 2 ジオン軍 MS・MA 編』、『機動戦士ガンダム大全集』、『Z GUNDOAM HISTORICA Vol.0 ~ 12』、『総解説ガンダム事典 ガンダムワールド U.C. 編』(以上、講談社) 『別冊宝島 1099 号 僕たちの好きなガンダム DX』(宝島社) / 『機動戦士ガンダム 画報 モビルスーツ二十年の歩み』(竹書房) / 『機動戦士ガンダム MS 大図鑑 PART.1 一年戦争編』、『機動戦士ガンダム MS 大図鑑 PART.2 クリプス戦争編』、『機動戦士ガンダム MS 大図鑑 PART.3 アクシズ戦争編』、『機動戦士ガンダム メカニック大図鑑』、『機動戦士ガンダム 戦術戦略大図鑑 - 一年戦争全記録 - 』(以上、バンダイ) / 『OENGEKI HOBBY BOOKS 電撃データコレクション THE BEST 機動戦士ガンダム 一年戦争大全』、『OENGEKI COMICS データコレクション 4 機動戦士Zガンダム 上巻』、『OENGEKI COMICS データコレクション 5 機動戦士Zガンダム 下巻』、『OENGEKI COMICS データコレクション 6 機動戦士ガンダムZZ』、『機動戦士ガンダム MS 大全集 2006 MOBILE SUIT Illustrated 2006』(以上、メディアワークス) / 『ガンダム・エイジ - ガンプラ世代のためのガンダム読本 - 』(洋泉社) / 『ガンダム人物列伝』株式会社レッカ社 (PHP 文庫)

この作品は、2008 年 7 月に当社より刊行した(文庫)「ガンダム MS 列伝」をカラー化したものである。

編著者紹介

株式会社レッカ社 (かぶしきがいしゃ れっかしゃ)

編集プロダクション、1985年設立。ゲーム攻略本を中心にサッカー関連、ファッション系まで幅広く編集制作する。代表作としてレトロバイブル『大百科シリーズ』（宝島社）や、シリーズ計600万部のメガヒット『ケータイ着メロ ドレミ BOOK』（双葉社）などがある。『永遠のガンダム語録』『ガンダム顔 大事典』（以上、カンゼン）、『ガンダム人物列伝』『ガンダムMS列伝』（以上、PHP文庫）をはじめ、『平成仮面ライダー英雄伝』『平成仮面ライダー変身伝』（以上、カンゼン）など、アニメや特撮関連本も多数編集制作。現在『ジュニアサッカーを応援しよう!』を雑誌、ウェブ、ケータイ公式サイトで展開中。

【決定版】ガンダム モビルスーツ列伝

2011年9月29日 第1版第1刷発行

編 著 者	株 式 会 社 レ ッ カ 社
発 行 者	安 藤 卓
発 行 者	株 式 会 社 P H P 研 究 所
東京本部 〒102-8331 千代田区一番町21	
クロスメディア出版部 ☎03-3239-6254(編集)	
普及一部 ☎03-3239-6233(販売)	

京都本部 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE <http://www.php.co.jp/>
印 刷 所 図 書 印 刷 株 式 会 社
製 本 所

©創造・サンライズ 2011 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合は弊社制作管理部(☎03-3239-6226)へご連絡下さい。送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN978-4-569-79975-9

「平成仮面ライダー」徹底ガイド

株式会社レック社 編著

魅力にあふれる登場人物、勧善懲悪では説明できない世界観とストーリー……。クウガからオーズまでの12作品を深く掘り下げた一冊！

定価680円
(本体648円)
税5%

ビジュアルで楽しむ「クトゥルフ神話」

森瀬 繚 監修／株式会社レック社 編著

異形の神が多数出てくる「クトゥルフ神話」。邪神の知られざる姿を気鋭の絵師たちがビジュアル化。神たちのプロフィールも楽しめる本。

定価920円
(本体876円)
税5%